
Good day , today

accogum

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Good day , today

【Nコード】

N7209S

【作者名】

accogum

【あらすじ】

喫茶店で働く、わけありへたれ美青年と、しつかりものの少女。じりじりと近づく距離。周囲の人々に見守られながら、美青年の「わけ」を解消するためには・・・？

ゼン、少女にたすけられる

雨の夜、黒い靴下。

傘をたたむ間に濡れた短い髪を伝う水滴。

飴色のカウンターに白い手について、メニューを覗き込む少女のつむじを、ゼンは見ていた。

(こんな夜に、女の子が一人で来るなんてめずらしい)

Le matin - 朝 - という名のその店は、昼から夜更けまで営業しているカフェだ。

夜は照明を落とし、白熱灯の橙色が木のテーブルを染める。

今日は雨だから、オープンテラス部分との仕切り戸は閉めていた。ビジネス街にあるこの店は、普段は仕事帰りのサラリーマンなどで閉店の10時まででそこその賑わいを見せるのだが、今日は皆家路を急ぐのか、9時の時点で客は一組だけだった。

「カフェオレ、ください」

顔を上げた少女とぼつちりと目が合ってしまった。ゼンは微笑んで値段を告げた。200円。安さと静けさがこの店が長持ちしている秘訣だ。

代金を貰い、手早くカフェオレを作り、トレイに載せて渡す。

少女は、店の奥の壁際の椅子に座った。

店内に流れるピアノの音に紛れて、かすかなため息が聞こえたように、ゼンには思えた。

「女の子が、いるわね」

補充用の珈琲豆を取りに、倉庫兼休憩室兼事務室に足を踏み入れたゼンに、晃はパソコンを覗いたまま言った。

「最近、よく来てくれるんだよ」

あの雨の夜以来、夕方か夜に小一時間ほど、度々少女は現れるようになった。

最初に現れたのが秋の終わり。いまはもう年の瀬だから、一ヶ月は経つだろうか。

いつも黒いPコートに青いマフラー。膝上までのプリーツスカート、黒い靴下に、焦げ茶のローファー。学校の校章が印刷されたバツク。

「緑女の子ね」

「え？」

「緑奥女学院。偏差値も学費もばか高いお嬢様学校よ」

「へえ、よく知ってるね」

「有名なもの」

呟いて、晃はううんと大きく腕を挙げ、伸びをする。座っただけも天井に届きそうに見えるのは、晃の腕が長いせいか、この休憩室が狭いせいか。

晃はゼンの従兄弟で、この店の店主である。

南洋系の濃い顔立ちである晃は、同じく彫りが深くとも北欧系の顔立ちであるゼンとはあまり似ていない。ただ、二人とも190cmに届きそうな長身であるというところだけに、お互い血のつながりを感じていた。

あと共通点といえば、女性に興味が無いという点だろうか。

しかし、晃とゼンでは、その理由に大きな違いがあった。

珈琲豆を取って戻ると、カウンターに人がいたのでゼンはお待たせしましたと丁寧な顔を下げる。

頭を上げた瞬間、しかしゼンの笑顔は少し固まった。

「なんで来てくれなかったの」

カウンターの向こうの女性は鋭い声でゼンを威嚇した。

長い髪は黒く、うりざね顔の細い目は強い光を宿していた。

ゼンは一瞬、息が止まった。その隙に、女性は言葉を重ねた。

「約束したじゃない。仕事が終わったら行くから、あそこの公園で

待ってて。私、ずっと待ってたのに」

「お客様・・・」

「仕事中だからって、他人行儀な呼び方はやめて。ひどいわ。人の気持ちをもてあそんで！」

だんだん声がつわずる。店内の客はまばらだが、それだけに視線が痛い。

ゼンは、必要以上に冷たくならないよう、穏やかに声を絞り出した。

「申し訳ありませんが、あなたと付き合いをしていたり、ましてやもてあそんでいたことなんてありません。お名前も存じ上げないんですよ」

「嘘。なんでそんな嘘をつくの」

（それはこっちが言いたい）

と思つたが、丁寧かつ差し障り無い言い回しでどうやってその気持ちを伝えたらいいかわからず、少し考える。

「なんで黙るの、やましいところがあるからでしょう?!」

そう言つて、女性はカウンターに身を乗り出し、ゼンの腕を強く握つた。

「や、めてください」

ゼンはとっさに強く振り払う。

女性は、一瞬呆然としていたが、ふいに顔がゆがみ、大声で泣き始めた。

割れるような大声に、足早に客が席を立ち始める。

（あああ）

「どうしたのよ、」

大騒ぎに晃が休憩室から顔を出した。

女性はカウンターの前でしゃがみこんでしまっていた。

（油断した）

ゼンは掴まれた部分から痺れるように、痒みが這い登るのをこらえていた。

そのとき、ゼンの目端を黒い影がよぎって、ふわりとカウンターの前にしゃがみこんだ。

「泣かないで」

泣き声にまぎれて、平静な声がゼンの耳に届いた。

カウンターの向こうを覗き込むと、すぐそこに、女性の背を撫ぜる制服姿の少女の姿。

「混乱してしまったんですね。この人が好きで」

「ほんとうに、約束したの」

嗚咽まじりに女性はそれだけ言った。

少女が顔を上げて、無表情にゼンを見た。

ゼンは急いで首を振った。

少女は少し、ゼンに目を止めた。

鏡のように透明な目だった。

ゼンは少し怯えた。

「約束は、知りませんけれど、この人があなたをもてあそぶことはできないと思います」

「なんつで、あなたにそんなこと、わかるの。わたし、ほんとうに付き合って・・・」

ちらりと、理はゼンを見た。そして、立ち上がり、いきなりゼンの手をぎゅと握った。

ゼンの心臓が、激しく鳴った。

汗が流れ、掴まれたところから、異常な痒みが全身を襲い、こらえきれなくなる。

少女の手を振り払い、しゃがみこんで手当たり次第、移動する痒みを追った。

しばらくは鼓動が収まらず、汗がシャツを濡らし肌に張り付いた。暖房がきいているとはいえ、真冬には尋常でない汗だった。

露出した部分は、搔いたところも搔いていないところも紅い斑点がさっと散る。それは元々が色白であるだけに余計に目立った。

顔にまで痒みは這い登り、ゼンは我慢できずかけていた黒縁めが

ねを外して掻きむしった。

「よくわかったわね、お嬢さん」

晃がゼンの傍らをすり抜けて、そう少女に向けていいながら、女性の腕を掴んで立ち上がらせた。

「あなたとゼンの間になにがあったのかわかったのかわからないけど、こういうことだから、ゼンがあなたをもてあそぶようなことは、ありえないわね」

女性は呆然と、変わり果てたゼンの姿を見た。

「この子は、女性アレルギーなのよ」

女性は、よろよろと店の外に出ていった。

店には少女以外、客がいなくなつた。

「お騒がせしました」

ゼンは晃と少女に向けて、頭を下げた。

「ほんとよ。まったく、変な女に隙を見せるなつて言ってるでしょ」

「ちがうんだよ。あの人は単なるよく来るお客さんで、こないだ道を聞かれたから教えただけで、それ以上のことは本当に何も無いんだつてば」

「それがなんであそこまで思いつめなきやいけなくなるのよ。また思わせぶりの笑顔でも振りまいてきたんじゃないの」

「客商売は笑顔が大事だつて言ったのは晃じゃないか」

二人が話している間に、少女は席に戻り、コートを着込み帰り支度を始めていた。

もう客はほかに誰もいなかった。

ゼンは眼鏡を握つたまま少女に近づいた。

「あ、あの、ありがとう」

少女は振り返つた。相変わらず無表情である

「いえ」

「これ、コーヒー無料券。カフェオレでも使えるから」
すると、少し口元が緩んだ。ゼンは、少しほっとした。

「お気遣いなく」

「でも、迷惑かけたから」

ぐいと少女の前に差し出すと、少女は眉を下げ、そして笑った。

「ありがとうございます」

受け取って、頭を下げた。

ゼンの胸に、暖かな灯りがともったように思った。

「でも、ほんと、なんでわかったの、この子が女性嫌いだって」

晃がゼンの方に顎を載せて再度問うた。

少女は、一瞬言いよどむように口を閉じたが、すぐに答えた。

「なんとなく」

常連の中に気付いているお客さんもいるので、二人はとくに気にしていなかった。

「この子ね、女性嫌いっていうより、女性アレルギーなの。触られると呼吸困難、発疹でどうしようもないの」

「そうですか・・・」

「失礼なアレルギーだけど、これからもどうぞご鼻屑に」
につこりと、晃が営業用の笑みを浮かべる。

少女は、ぺこりと頭を下げ、店を出ていった。

「気付くひとは、気付くのよね」

晃がぼつりと言った。

ゼンは、アレルギーの発する女性に対して身構えがちであった。

しかし、客商売ではそうもいかないの、身構える代わりに問答無用の笑顔を覚えた。しかしそれがかえって、女性をよりつけてしまうのは皮肉な話だ。

さりげなく触らないように気をつけているが、ときにはどうしても触れてしまうことがある。一瞬触れたくらいならば痒みを通り過ぎるだけで済むが、さっきほど長く掴まれていると防ぎようが無い。

もしも、そういったことがあった場合には、晃に交代する手はず

だった。幸い、いままでそういうことはなかったけれど。

あの女性の強い力。

ゼンは、本当に彼女と約束などしていない。

話しかけられたから答えただけ。道を尋ねられたから教えただけだ。気を持たせるようなことをするはずが無い。

しかし、それをどう解釈してか、気を持たせられたと勘違いした女性。

あの目に宿る強い光は、おそらく常軌を逸している。

それは、ゼンの胸底に眠る記憶を揺り動かす。

(でも、思い出せない)

それは、思い出さないほうがいいからなのかもれしれないとゼンは本能的に知っていた。

それからしばらく、少女はやってこなかった。

それまでも、間隔が開くことはあったが、2週間近く姿を見ないのは初めてだった。

一度そのことに気付くと、なんとなくゼンの中では気になり続けた。

お嬢様学校の生徒が一人で夜に喫茶店に入ったりしていいのかわかった基本的なことから、女性をなだめた落ち着きや思い切りのよさや、洞察力の深さまで。

ゼンが女性に掴まれたあの一瞬の様子を見て、女性アレルギーに準ずるものとして認識しなければ、ゼンの手を握ろうなどと考えつかなかったはずだ。

そんなある日の閉店作業中に、晃が口を開いた。

「そういえば今日、あの子にあつたわよ」

「あの子って？」

「こないだ女の人をあんたが泣かせたときに、助けてくれた子」

いろいろ事実とは相違がある、とゼンは思ったが指摘するより前に、テーブルを拭きながら話を促した。

「お父さんが留守がちで、一人で家にもつまらないから、たまにここにきたりしてるんですって」

「最近見ないけど」

晃はグラスを拭きながらふふと笑った。

「しばらく、お父さんのお仕事が落ち着いて、早く帰ることが多くて、お父さんの分のご飯の用意をしなくちゃいけなかったんですってよ。スーパーの袋抱えてたわ。えらいわよねえ」

「俺だつて高校のときには家事全般やつてたけど。誰かさんがなにもしないから」

「あら。あたしは鍛えてあげてたのよ。感謝してほしいくらいだわ」

「よく言うよ」

しばらく黙々と作業を続けた。

灯りを落として、コートを着込んで鍵をかける段になって、ゼンは口を開いた。

「あの子、また、来てくれるかな」

「また来てねとは、言ったけどね」

でもそれは少女が寂しいときだということにゼンは気付いて、来てくれないほうが、きっと少女にはいいのだろうと思った。

ゼン、じりじりする

背中に触れて消えるてのひら。

(おまえが気にやむことはない。おまえはなにもわるくないよ)
低い、やわらかな声。

もうほんとうにそんな声だったか、さだかではないのに。

(そんなふうにつもものじゃないよ。おまえはおまえの母親とは違
う生き物だよ)

でもおばあさん、でも、と繰り返す自分の声を、ゼンは他人のも
のように聞く。

明滅する明かり。

伸びる人の影。

大きな人たちの中で惑う自分。

自分に向かってくるてのひら。

めかくしをするてのひら。

白い三日月。

てのひらのかんじょく。

でもおばあさん。

(ぼくがわるいことから)

呟いたとたん、ゼンはぱっちりと目を覚ました。

寝間着代わりのTシャツは寝汗でべっとりとしていた。
心臓がたからかに鳴っているのが耳の裏でうるさかった。

深呼吸を繰り返して、鼓動を整える。

冷えた汗で寒気を感じた。

窓の外は薄明かりに青く染まっている。携帯の時刻表示を見れば6時半だった。

まだふだん起きる時間よりは早かったが、ゼンは起き上がる。着替えを持って、階下の風呂場へ向かった。

ゼンが晃と住むこの家は、築60年の二階建てだ。元々、小さなホテルだったという建物で、祖母の代からは下宿屋を営んでいた。

二階には廊下の左右に6畳ほどの部屋が4部屋ある。

ゼンがこの家にやってきたときには、すでに下宿屋は畳まれていたが、晃がそのうちの二室を利用していた。

ゼンはずっと一部屋だけを使い続けている。階段の植物を模した流線型の手すりや、廊下の両端にある上げ下げ窓など、部屋は畳だけが全体的には洋風な建物であった。

シャワーから出て、身支度を整えた後、外の郵便受けから新聞を取り、食堂兼台所の食卓に座る。

新聞を食卓の上に置いて、椅子の背もたれに寄りかかり、天井を見上げた。

(ひさしぶりに、おばあさんの夢を見た)

もう自分の頭の中にしかない祖母は、7年前、ゼンが中学を卒業した次の日に亡くなった。

祖母は、ゼンが5歳の年に母親を亡くしてから、ゼンを育ててくれた人であり、唯一アレルギの発現しない女性でもあった。

ゼンが泣いていると背中を優しくさすってくれた。冬には甘酒、夏にはカルピスを作ってくれた。

何年たっても、どんなに会いたくてももう会えない。

祖母の夢を見た翌日は、嬉しいようで哀しい。

「やだ、あんたなにこんなところで寝てるの？」

気付けば晃が食堂の入り口でゼンを怪訝に見ていた。

もう大分日が昇って明るい。うたたねしてしまったようだ。晃が

起きてきたという事は、もう8時か。

「ごめん、すぐご飯つくるから」

「いいわよ別に」

鼻歌を歌いながら、晃は洗面所へ向かった。

ゼンとは対照的に、晃は今日は朝から機嫌がいい。低血圧な晃には珍しいことだ。昨日、仕事が終わってから飲みにかけたようなので、ほとんど寝ていないはずだった。

「なにかいいことあったのかな」

ひとりごちて、ゼンは鍋に水を汲んで、火にかけた。

師も走るといふ言葉どおり、年の瀬はまたたくまに過ぎ、お正月を迎えた。

店は4日から通常営業だった。とはいえ、休日の関係で6日までお休みの企業が多く、混み合うランチタイムでも客足はまばらだった。

うららかな昼下がり、カウンターを拭いていると、ドアが開いた。

「いらつしゃいませ」

反射的に笑顔を作りドアの方を見る。

そして、口元をゆるめて、「こんにちは」と言った。

あの日、ゼンを助けた少女であった。今日も制服に、学校規定のバックだ。

少女はぺこりと頭を下げた。

「あけましておめでとうございます」

「あつ、あけましておめでとうございます」

ゼンもつられて頭を下げる。

「カフェオレと、ホットサンドをください」

メニューを指差しながら言うのに、ゼンは値段を告げた。

カウンターに代金を置く白い指に、あの日女性の背中をさすっていた情景をゼンは脳裏に蘇らせた。

「今日も、学校なの？」

注文品を作りながら問う。少女は頷いた。一般の学校は冬休み中なのではないだろうか、やはり進学校ともなると違うのだろうかと思いをめぐらす。

「あの、」

少女が、ゆっくりと口を開いた。

「この間は、すいませんでした」

ゼンは、目を瞬かせる。

「え？」

「触ってしまって、苦しい思いをさせてしまいました」

「え？」

ゼンは少女をまじまじと見た。一瞬何のことだかわからず、沈黙する。

ちん、とトースターが鳴り、慌ててホットサンドを取り出した。

「何言ってるの、きみがとっさに気付いてくれたから、あの場がすぐに収まったんだよ。アレルギーなんて、慣れてるからいいんだ」
凜とした少女の目が気遣わしげにゆらいだ。

ゼンはホットサンドを切り分けて、盛り付ける。

「ほんとうに、あのときはありがとう。またきてくれて嬉しいよ」
微笑むと、少女は一瞬眉間に皺を寄せたが、少しため息をついて、かすかに笑った。

これおまけね、とゼンはクッキーをトレイに載せた。

少女はぺこりと頭を下げ、いつもの奥の席についた。

しばらくして、少女が食べ終えた頃に晃がやってきて、すんなりと少女の向かいの椅子に座り、楽しげに話をしていた。

静かな店内とはいえ、少し距離があるので話の内容はよくゼンには聞こえなかったが、無表情なその少女に、年相応の笑顔が広がる

のをみるにつけ、晃ってすごいなと思わざるをえないのであった。

晃が仕事に戻り、少女も去る。

その後、また少女は数日おきに来るようになった。晃がいるときには、晃はその向かいに座って話をしていくようになった。

「女の子は嫌いじゃなかったの」

そんなある日の帰り際、ゼンが問うと、晃は猫のように微笑んだ。
「あたしが嫌いなのは女。子供はかわいいから好きよ。賢い子とは
くにね」

「へえ」

「なに？妬いてるの」

からかわれて、ゼンは目をむく。

「なんで妬かなくちゃいけないんだよ」

「一人だけ仲間はずれだから」

「子供じゃあるまいし」

しかし、凶星を指されると人は怒るのだということを知り、ゼンも重々承知していた。

少女は、晃には敬語ではあるもののうちとけた様子であるのに、ゼンにはまだ少し固いところがあるのだ。話す機会がほとんどないということもあるだろう。

晃と違って、店のことをほとんど一人でやっているような状態だから、小さな店とはいえカウンターを空けるわけにもいかない。

すると注文を受けるときくらいしか話す機会がないのだが、その一瞬では天気の話くらいしかできない。

そういえば、と思い返すまでもなく、女性アレルギーであることも手伝って、ゼンは女性にあまり自分から話をしたことがないことに気付いた。晃が女性らしいといえばそれまでであるが。年頃の少女の感覚などわからない。

（なれなれしすぎるのかな）

お客様には勿論敬語で話すようにしているが、少女に接する時に

は助けてもらったときの騒動で仕事とプライベートの垣根が崩れ、少女に対してはつい地が出てしまう。

(名前も、教えてもらったわけじゃないし、聞かれてもいない) 晃經由でそれぞれの会話でお互いに知ってはいるけれども、名乗りあつたわけではない。

(いやべつに、いまさら自己紹介もないけど)

本人から聞いたわけでない本人の情報ばかりが積もっていくと、それはそれで尻の座りの悪い気持ちができるものだ。

たとえば、お嬢様学校に通ってはいるが奨学生で学費が免除であることや、生徒も全員が全員お嬢様というわけではなく、成績優秀者は学費一部、もしくは全額免除の制度があることとか。少女の住まいも都心も都心のこのお店近所のマンションではあるが、勉強の傍ら家事をこなしていることとか。知れば知るほど感心することしきりである。

ゼン自身は、公立の中学を出て、全校生徒のほとんどが男子ばかりの、勉強しなくても入れる高校に入り、荒くれ者の多い校内で身を守るために喧嘩ばかりが強くなり、料理の専門学校で調理師免許をとったはいいものの、修行先でトラブルがあり従兄弟の晃の店に身を寄せている状況だ。状況もスペックも何もかも異なるので己とひき比べるつもりは毛頭ないが、いままで周囲にいたことのないタイプなので、単純に興味があつた。

興味。

(俺が、女の子に)

単純に人間としての興味ではあつた。

性別は関係がない。だが、いままで周囲にいた祖母以外の女性といえは、奔放だったり乱暴だったり自分中心だったりすることが多かったので、そういう意味では、女性の種類もいろいろあると認識できたという点で、目新しさを感じていたのだった。

ゼン、猫を飼う

暖かさと寒さを繰り返して、木の芽も花のつぼみも色づいていく。

梅の花が目立つようになったころ、澄んだ青い空の下、ゼンは職場近くの公園でタバコを吸っていた。

晃はタバコを吸わない。家も職場も禁煙であるので、タバコを吸いたくなったとき、ゼンは喫煙所のある広場でタバコを吸うことにしていた。朝や昼時には周辺のサラリーマンで混みあうが、昼過ぎの時間帯だと人はいない。

喫煙の習慣があるわけではない。むしろ料理人としては舌の鈍るタバコは吸わないようにしていた。それでもときどき、疲れたときなど吸わずには入れられないときがある。それでまた、完全な禁煙ができないことに落ち込むのではあるが。

（ばかだな、俺）

春が近づくと、この季節になると落ち着かなくなる。

なぜだかは、わかっていたけれど。

何が起きたかは知っているけれど、自分の身に起こったことを、思い出すことができない。

それは思い出さないほうがいいことなのだ、と自分でもわかっただけはいたけれど。

ぼんやりと煙を吐き出して、流れる雲を見ていると、どこかで赤ん坊の泣き声がした。

それはじよじよに近づく。

（いや、）

声のする方を見ると、少女が広場の前の道路を通り過ぎるところだった。

「理ちゃん」

タバコを消して呼びかける。少女が、怪訝そうに立ち止まり、こちらを向いた。

（そうだまだ、）

本人に名前を聞いたわけではなかった、と思いながらも、少女理に走りよる。

「こんにちは」

理が立ち止まり、お辞儀をした。

しかし、一瞬顔を歪めて、パーカーの前を少し開いた。

するとそこから、ひょこりと子猫が顔を出した。

「かゝわいい」

まだ顔がピンポン玉くらいしかない。やっと目があったばかりの、本当に小さな子猫だ。

みいみい言いながらパーカーの下に着た理のTシャツをよじ登ってくる。

「猫、お好きなんですか」

問われて、ゼンは思い切り頷いた。

「触りますか？」

「えっいいの？」

しがみつく爪を丁寧にはがして、理はゼンに猫を差し出した。

受け取ると、てのひらにちょこんとのってしまふ。真っ白な毛玉のよう。

慎重に、指の腹で頭を撫でた。

猫は目を細めてみいと鳴いた。

「いいなあ、俺も猫ほしいあ・・・」

つい口にする。すると理が淡々と言った。

「飼いますか？」

「え？」

「この猫」

ゼンは一瞬、息を止めた。

「理ちゃんの猫じゃないの」

「飼いたかったんですけど、父が猫アレルギーで」

とつとつと語ることによれば、一週間前に道で衰弱した様子のこの猫を拾い、獣医にも見せてなんとか快復してきたのだが、先ほど出張から帰ってきた父のくしゃみやみが止まらなかったのだという。

それで、とりあえず出てきたところだということだった。

無表情ながら、睫は伏せられがちで、落ち込んでいることがわかるくらいには、ゼンも理のことを見ていた。

晃ほど会話をしていなくとも。

「お家は、一軒家ですか」

理は少し黙った後、そうゼンに問うた。

「うん」

「猫を飼ったことは、ありますか？」

「ずっと昔に」

祖母が生きていた頃に飼っていた。ゼンが中学校にあがる前に、亡くなってしまった猫。

真っ白で眼光するどく、大きくて勇ましい猫。

ゼンはその猫が大好きだった。

「家族の方に、猫アレルギーの方とか、いらつしゃいませんか」

「いまは晃と二人ぐらしかけど、晃も大丈夫だよ」

「でも、そうすると、昼間面倒を見る方がいなくなりますよね」

「大きくなれば、大丈夫だろうけど」

理は唇に拳を当てて、しばらく考え込んでいるようだった。

つり目がちの大きな目は、そういえば猫に似ているな、とゼンはその顔を見ながら思った。

「では、あと少しだけうちでお世話をしますね。トイレのしつけとか、大丈夫になったらお渡しします」

「お父さんは？」

「明日からまた出張で、しばらく帰ってきませんから」

理自身もすでに春休みで、特に出かける用事もないということだ

った。

赤外線で連絡先を交換する。

ひまわりがたけのこ
日向理。

というのが理のフルネームだった。

「かつこいい名前だね」

思わず呟く。外見は小柄で細身であり、どちらかといえは少年のようになりりしい少女だ。理という名前はよく似合っていた。

理はとくに何も言わなかった。

(クールだしね)

晃といるときはそうでもないようなのに。それは晃の世話焼きのおばさんのような性格がなせるものなのかもしれないが、単純に晃には子供の顔を見せるように思った。

「それでは、お渡しできるようになったらメールします」
理は事務的に言った。

「うん。うちも準備しておくね」

自然に、顔がほころんでしまうのを、ゼンは感じていた。

「なあに、あんた気持ち悪い」

休憩を終えて仕事に戻り、その仕事も夜になって終わった一日の終わりの閉店作業時、晃に指摘された。

「なにが？」

「笑顔が普段の五割り増しよ。不必要に愛想をふりまくのはやめなさいと言ったでしょ。また変なのひくわよ」

「え？」

晃がため息をついてポケットから手鏡を出し、ゼンの前に出す。

たしかにしまりのない、ゆるみきった顔だ。もう仕事も終わったのに、自然と笑顔になっている。

「そんなに猫が好きだったかしらね」

「好きだよ」

の「だ」に力をこめて言った。過去形ではない。いまも猫は大好きだ。

しかし晃はにやりと笑ってふうんと思わせぶりに言った。

ゼンは気にしないふりをして、話を続けた。

「でも、理ちゃんてまだ中学生だったんだね」

「4月から高校生でしょ」

「そうだけど、中学生で喫茶店にひとりで入るなんて、やっぱり落ち着いてるよね」

晃が呆れたように息をついた。

「そんなの普通じゃない？ あたしだって入ってたわよ、中学のとき」

「晃は中学生の時には、もう大人みたいなものだったんじゃないの？」

「あら、何言ってるの、あたしの背がのびたのは高校に入ってからよ。あんたもいたはずだけど、覚えてないの」

「だって晃、高校の頃にはほとんど家にいなかったじゃん」

「中学のときのあたしときたら、もう紅顔の美少年ていうの？ 華奢で小柄で礼儀正しくつつましくおしとやかでそりゃあかわいいものだったわよ」

おしとやかだとかは少年に対する形容としておかしいのではないかとゼンは思ったが、黙っていた。

晃が祖母の家で暮らし始めたのは、高校生になってからだ。

晃が高校二年生のときに、5歳のゼンが引き取られた。そのときにはゼンの父親も一緒に住んでいたので、4人暮らしであった。しかし、ゼンの父親も晃もあまり家にいなかった。

ゼンの父親は、いま、九州に単身赴任している。

「いちおう、お父さんにも伝えたほうがいいのか。名義上はいまお父さんの家だし」

「言わなくていいんじゃない、章二さんてあの家にぜんぜん愛着ないもの」

そういう晃は、祖母の家に大変愛着心を抱いている。レトロなところがたまらない、のだそうだ。

祖母が亡くなったとき、いい加減古いからと父が処分しようとしたときも、大反対したのは晃だ。

曰く、古いというだけで処分するのは非常に非文化的なことである。この建物の保存状態は建築史的にも非常に有用であり、いずれ市の文化財になる可能性もあると力説したのだ。

ゼンにはよくわからなかったが、祖母の思い出が染み付いていた家がなくなるのは寂しいと思った。だから、微力ながら晃の味方をしたのを覚えている。何と言って味方したかはあまり覚えていないが。

保存状態云々といっていた晃が、猫を飼うことに同意してくれたのは意外だった。しかし、以前にも飼っていたし、晃も猫が好きなだろうと深く考えなかった。あまり晃が猫と触れ合っているとるは見たことが無かったが。

晃は、かわいいものは好きだが、子猫だとか子犬だとか、あからさまにかわいらしいものには表立って感情を現さない天邪鬼なところがあつた。だって負けた気になるでしょ、というのがその理由だ。その気持ちは、ゼンにはよくわからなかった。

桜の花がちらほら咲き始めていた。

上空では雲の動きが早く、太陽は翳りがちだった。

(雨になるかな)

窓硝子を拭きながら、ゼンはぼんやりと見上げた。

今日は日曜日。ゼンの休日で、そして猫が来る日だった。

理がゼンたちの家まで届けに来てくれるというので、ゼンは朝から掃除に励んでいた。

猫砂や猫のトイレ、餌入れなど必要なものは揃え、受け入れ態勢は万全である。

「あ、そろそろ出なきゃ」

時計に目を走らせるなりひとりごちて、雑巾をしぼった手を洗って上着を着込む。

最寄駅の改札で理と待ち合わせをしていた。

ゼンの家から駅までは、徒歩3分。ゼンたちの家とは反対側の駅前には商店街が広がっているが、ゼンたちの家の側にはスーパーがひとつあるきりの住宅街だった。

駅に着くと、すでに理は改札にいた。

今日は制服ではなかった。

藍色の薄手のコートに駱駝色のマフラー、色の薄い細身のジーンズに白いコンバース。

(いつもと違って、でも似合ってるなあ)

大きな二白眼気味の吊り目と耳の下辺りまでの短髪、薄い唇は中性的な印象を与える。

「理ちゃん」

呼びかけると、うつむいて手に抱えたバスケットを見ていた理は、顔を上げた。

「こんにちは」

律儀に頭を下げた。

そして、ぐいとバスケットをゼンに差し出した。

勢いに押されるかたちで、ゼンは受け取る。

蓋を開けると、眠っていたらしい猫がぱちりと目を開けて、ゼンの顔を見てにやあとないた。ゼンは、つい微笑んでしまう。

「移動中に寝ちゃうなんて、肝の据わった猫だね」

「最初は暴れたんですけど、電車に乗っているうちに寝てしまったみたいです」

理はバスケットを覗き込まない。

「もう赤ちゃん用の缶詰なら食べられます。トイレも大丈夫だと思いますけど、環境が変わると慣れるまで粗相をするかもしれません」
「大丈夫」

「これも、よかつたら」

紙袋に背負っていたリュックから紙袋を出して、ゼンに差し出した。

中には赤ちゃん猫用の缶詰と猫のおもちゃが入っていた。

「ありがとう」

片手にバスケット、片手に紙袋を提げたゼンは、荷物を手放して手持ち無沙汰そうな理を見た。

「よろしくお願いします」

理は頭を下げて、くるりと踵を返した。

「え、帰っちゃうの？」

つい声に出してしまう。理は振り返り、怪訝な顔をした。

たしかに、理は『お届けに伺います』とはメールで言っていたが、それはもう改札で済んでしまったことだ。以前、家の様子を聞かれたからと言って、勝手に家に来ると思いついていたのはゼンのほうだ。すこし恥ずかしくなって、ゼンは顔が熱くなるのを感じた。

「せっかく来たんだから猫がちゃんと家に慣れるか、とかどんな環境か、とか見るのかな、って思ってたから」

以前の経緯を覚えていたのか、理の顔から不審感は消えた。しばらくバスケットを見ていたが、うつむいて少し首を振った。

「ふんぎりがつかなくなるので、今日は帰ります」

(ふんぎり?)

今度はゼンが一瞬ぴんと来ずに理を見る。そして、すぐに合点がいく。

「このこに会いたくなったら、いつでも遊びにきてね。俺も、晃も大歓迎だから」

「ありがとうございます」

また、理は深々とお辞儀をして、改札の向こうに消えていった。

ゼンは家に戻り、玄関で猫をバスケットから出す。

真っ白で、右目は青、左目はグレー。子猫だが、少し目つきが悪い。

抱き上げたゼンの手からするりと抜けて、とてとてと廊下を歩き回り、ゼンを見上げてみゃあと言った。

その様子に、しっかりとゼンは胸を掴まれていた。

ゼン、招く

それから、ゼンはユキと名づけたその子猫に夢中になった。

ユキは育ての親に似たのか非常に頭のいい子猫であり、環境が変わってもすぐに慣れた。トイレもすぐに覚え、たまたに悪戯することはあってもそのかわいさで免除されるレベルの悪戯。ティッシュを全部出してしまふ、摘んであつた本を崩すなどであつた。

なにより家に帰ってきたときに玄関まで迎えに来てくれる様子は、ゼンの一日の疲れを一瞬にして吹き飛ばす。

「それはおながすいたつて言いにくてるのよ」
と昇などは呆れ気味に言うが、ゼンは自分とユキは相思相愛であると信じて疑わない。

写真を撮り、友人知人にメールで送りつけたが、反応が薄いのが物足りず、唯一律儀に返事をしてくれる理に対して毎日メールを送りつけてしまふ有様であつた。

頭の片隅では自重しようと思うのだが、かわいい姿勢を見ると理性が飛ぶ。誰かこのかわいさを共有したい、と思ってしまうのである。

理は高校生になった。相変わらずたまに店にもやってくる。そのときも混み合っていないければカウンターでユキのかわいさを語ってしまう。

「ブログとか、されたらいいんじゃないでしょうか」
とつとつある日そう理に言われた。

それは遠まわしいいい加減にしろつて言われてるのよ、と昇は後で言ったが、ゼンはあまり気にしていなかった。

毎日メールのやりとりをしているおかげか、理のゼンに対する垣根は大分低くなったように感じられた。

「ブログ、なんて誰が見るかわからないのはちょっとこわいなあ・・。ユキのかわいさによからぬことを考える輩が出てくるかもしれないし・・。」

「よからぬことってなんですか？ 三味線の皮にするのは三毛猫だから大丈夫ですよ」

「理ちゃん・・！ 育ての親がなんてこと言うの」
心底シヨックを受け、目が潤む。

言い過ぎたと思ったのか、理がとりなすように微笑んだ。

「すいません。わたしでよければいつでも聞きますので」

「だめよ理ちゃん、ゼンを甘やかしちゃ。理ちゃんだって本当は飼いたかったのを泣く泣く手放したって言うのに、自慢話ばかりされてさ、ゼンはデリカシー無さ過ぎよ」

たまたま通りかかった晁に背後から指摘され、ゼンは確かにそうだと、と一瞬息を止める。

自分が理の立場だったら、ゼンをぶん殴りたくなるだろう。

おそろおそろ理を伺うと、理は眉を下げて苦笑していた。

「いいんです。かわいがってくれてることがわかるから」

（大人だ・・！）

ゼンはいよいよ理への尊敬の念を増した。

「ほんと、今度遊びに来なよ。電車で15分くらいだしさ、駅からも近いし。遠慮しなくていいから」

「ええ、では近いうちに」

そんな話をしながら2ヶ月がたった。

いつの間にかもう梅雨である。

ユキも成長してきて、虫やらなにやらをとってくるようになった。理へのメールの頻度も三日に一度くらいにはなったが、それでもまだかわいさは新たに発見され続け、理も律儀にメールには返してくれる。

(でも、いい加減うっとおしいかな・・・)

少し最初の熱も落ち着いてきて、あらためて考えると少し恥ずかしくなってくる。

反省してきたところで、理からメールがあった。

『今週の日曜日、もしお暇でしたらお伺いしてもいいでしょうか』

ゼンは、毎週日曜日が休みであることを以前から伝えていた。基本的に顧客層はサラリーマンが多く、休日は客が少ないからだ。

『もちろん!』

反省した矢先だったので、少し安心しつつゼンは理に返事をした。

その日曜日は梅雨の晴れ間。夏を感じさせる日差しの中の暑さに、辟易しつつもゼンは待ち合わせの20分前に改札にたどり着く。

(さすがに来てない)

と思いきや、それから5分後には理は改札の向こうから現れた。

白いTシャツに黒いパーカー、黒い細身のズボンにアウトドアブランドのサンダル。リュックを背負い、手には小さな紙袋を提げていた。

改札を出てゼンを見つけた理は、目を少し見開いた。

「早いですね」

「理ちゃんこそ」

「これ、お土産です」

「いいのに気を使わなくて」

そう言いつつ紙袋を受け取る。

(気を使う)

気を使うといえば理はいつも、ゼンに触れないよう気を使ってくる。

紙袋を渡すときも、底を支えて持ち手をゼンに向けていた。

「今日暑いですね」

改札から日向に出て、理はパーカーの腕をまくる。白い細い腕が陽に映えて眩しい。

「すぐだから」

駅からまっすぐ続く道から、すぐに左手の小道に入り、さらに家と家の間のようやく2人すれ違えるくらいの道を歩くと、四方を家に囲まれた空間に、木々と少しばかりの庭を備えたゼンたちの家が見えた。

「話には聞いてましたけど・・・」

口を開いて見上げる理の顔をのぞきこみ、ゼンは微笑む。

「古いでしょ」

理は首を振る。

「レトロで素敵です」

目が輝いているように見えた。晁と話が会はずだ、とゼンは思った。そういえば晁が理は若いのにいい趣味をしていると評価していたことを思い出す。

上部にすりガラスのはまった玄関の、焦げ茶のドアを開き、中に入る。

「お邪魔します」

理の声に呼応するようには、二階からユキが下りてきた。ゼンの足にからみつく。

ゼンはユキを持ち上げて、理の目の前に掲げた。

「ユキ、理ちゃんのこと、覚えてるかな？」

「無理でしょう」

言いながら、理がユキを受け取り、ぎこちなく抱えた。

ユキは一瞬だけおとなしくしていたが、すぐにとたと飛び降りてしまう。

「大きくなりましたね」

「そう。よく食べるんだよ」

ゼンたちを先導するように、ユキは台所へ歩き出した。入り口で振り返って鳴く。

「はいはい。いまあげるから」

まだご飯の時間には早いので、煮干を台所のユキの餌皿に置く。夢中で食べる様子を、理はしゃがみこんで覗き込む。猫は見られていると食べるにいと云うが、ユキは気にせず食べ続ける。

(なんだかかわいいな)

と横目で見ながら、ゼンは氷の入ったコップに用意していた麦茶を注いだ。

ユキが食べ終えて、ふらりと台所を出て、どてりと廊下に横になった。日が差さず、なおかつ板張りの床が冷たくて気持ちいいのだろう。

ユキが寝ている場所の正面には開け放しのドアから居間に通じていた。八畳ほどの居間は、下宿時代は食堂も兼ねていたというのが、いまは客間として利用していた。

入り口こそ外開きのドアであるが、中は畳の和室である。

くすんだ茶色のちゃぶ台と、藍色の座布団、茶色の簾状のロールカーテンが日差しを遮る。

木陰でもあるので、いまぐらいの季節ならばカーテンの後ろを網戸にしておけば風も入って涼しい。

理を座布団に座るように勧め、ゼンはコップをその前に置いた。

「今日、晃さんは？」

「急に仕事が入っちゃって。理ちゃんと遊べなくて残念がってたよ」「そうですか」

晃は、le matinのほかに、もう一つ新宿に小さな飲み屋を持っている。

今日の夜はそこで今日はイベントを行うらしい。準備は終わっているが細かな調整があつて、責任者として立ち会わなければならぬいらしかった。

理は、カーテンの隙間から外を見ているようだった。ゼンも視線を追うように外を見る。木々の緑が光にきらめく。日差しは強いが湿気はまだ夏場ほどではなく、涼しくていい日だと思う。

入り込む風に吹かれていると、少し眠くなってくる。理が来ると思つて朝早くから掃除をしていたせいでもあるし、少し昨夜寝つけなかつたせいでもある。

(いい年して、子供じゃあるまいし)

「いいお家ですね」

風に、理の短い黒髪がなびいた。

それを見て、ゼンは一瞬答えが遅れた。

「なんか、貴重なんだってね。古いだけじゃなくて、保存状態もいいとか」

「大事に使つてこられたんでしょうね。それに、いまも、きれいに掃除されていて。ゼンさんがされているんですね」

「う、うん。おばあさんに、結構掃除については厳しく言われてたんだ」

「ゼンさん、おばあさん子なんですか」

「うん。小さい頃に母をなくしてからおばあさんに育てられたようなものでさ」

理の目が少し大きくなる。

晃から聞いているかと思つていた。しかし、考えてみれば、そんなことを晃が理にわざわざ言うわけがなかった。

「そうでしたか」

静かに、理が言った。睫が伏せられる。

話し声につられるように、とすとすと畳みを踏み分けて、ユキが廊下から居間に入ってきた。

そして、理の傍にやってきて、正座した理のふとももを強度を試すように前脚でたたき、そのままそつと載った。

「珍しい。ユキはあんまりお客様に近づかないのに。やっぱり覚えてるのかな」

「どうでしょう」

言いながら、理は嬉しげに口角を上げた。

細い指がユキの頭を、背中をなだらかに撫でていた。ユキは喉を

鳴らす。

指が、てのひらが、からだを伝う。

小さくて暖かいだろうそのてのひらが、あの女性の背を撫でていたことを、ゼンは思い出していた。

(いいなあ)

と、いまもあるときも、そう思ったのだと、ゼンは唐突に自覚した。

(やさしいあのとてのひらに、撫でられたいな)

ぼんやり見ていると、理が嬉しいような困ったような顔でこちらを見上げた。

「ユキちゃん、眠ってしまいました」

「動けないね」

ふふ、と理は笑った。

「わたしもユキちゃんと、一緒にこの家で暮らしたいなあ」
呟くように言ったのを、ゼンは聞き逃さなかった。

「暮らしたらいいよ」

「軽いですね」

「え？」

一瞬意味がわからず、ゼンは目を瞬かせた。

理は苦笑する。

「いいんです。ゼンさんは軽くて」

「え？」

「最初は愛想よすぎてかえってこわかったんですけど、そういう人なんだなってわかったから」

「え？」

「わたしのお母さんに、似てるんです。王子様みたいで」

「え？」

一気に、何を言われているかわからなくなった。

(お母さんに似てる？のに王子様？)

ほめられているのかけなされているのかわからない。

けなされてはいないだろうけれども、お母さんと王子様は結びつかないし、だいたい二十代半ばの男がお母さんに似てるってどういうことなのか、と頭の中は疑問符でいっぱいだった。

その様子がありありと顔に出ていたのだろう。理はおかしそうに笑った。

「すみません。わけがわからないですよね」

「うん」

ひとしきり笑って、理は少し息をついた。微笑みながら、ゼンをまっすぐに見た。

「うちの母、すっごいさわやかで明るくて、強引なんだけどそれが当たり前みたいで。女の人に優しくてすぐもてて、ひょうひょうとしてて、王子様みたいなんかじだったんですけど、最初にゼンさんを見たとき、そんな母とだぶったんですよ」

「俺、そんなにかっこよくないよ」

「まあ、よく知ったら違うっていうのはわかったんですけど、遠慮がちだけど、ひょいひょいいろんなことを軽く言って、でも全部それが本気だっていうのが、やっぱり似てるなあって、いま思いました」

そう言われても、よくわからない。

「軽くって、俺ふつうに話してるだけだけど。そんなに軟派なかんじ?」

「いえ、そういう意味の軽いではなくて、猫のこともそうですけど、大事なことをさらっと決めて、それを覆さないのってすごいなと」

「ええと、ばかにしてる?」

「いえいえ」

そういつつも、なんだかつぼにはまったように笑っている。

たしかに、馬鹿にしている様子は無いし、理が楽しそうなのは嬉しいけれど、ゼンはなんだか複雑な気持ちだった。

「たしかに俺は結構行き当たりばったりで後悔することはたくさんあるけど、でも猫のこととかさ、理ちゃんがここで暮らしたらいい

のについてこととか、そういう楽しそうなことは全部本気だよ」

「楽しそう・・・?」

理が繰り返した。

ゼンは勢いのまま頷く。

「だって俺、理ちゃんのこと好きだし」

理の目が、大きく瞬いた。

その瞬間、ゼンは自分の鼓動が大きく鳴り響くのを聞いた。

(軽い)

それこそ軽い気持ちで、言ったことなのに、思った以上にその言葉は自分の芯から出てきていたようで、ゼンは急に耳まで熱くなつて俯いた。

(な、なんで心臓がこんな、触ったわけでもないのに)

アレルギーのときと似ているようで違う。なんだか無性に恥ずかしい。

「ほんとうに、この家の子になれたらいいのに」
理が呟いた。

その声音に、固いものを感じて、ゼンは一瞬に頭が冷えて理を見上げる。

しかしそのときはすでに理はやわらかい微笑みを浮かべて、ユキを撫で続けていた。

理、呆然とする

はじめて見た父は、怒れる人。

事故で突然亡くなった理の母の葬儀は、遺言どおり自宅でひそやかに行われた。

仕事関係、友人知人。

挨拶も受け答えも、ひとりのこされてかわいそうにという言葉のやりとりも、理の頭を素通りしていく。ただ機械的に遺族としての口上を繰り返すだけだ。

(突然の事故だったのに、法的に効力のある遺言を残していたなんて)

母が亡くなり、母の一番仲の良かった友人である珠子が弁護士と連絡をとった。母は天涯孤独であったので、自分になにかがあったときに同じく天涯孤独となる理の身の上を案じて、理が生まれてから遺言を毎年更新しながらしたためていたのだという。

(そういうことじゃ、ない)

それよりも、母が亡くならないことが一番大事だったのだ。

(事故じゃ、しかたがない)

何度も何度も頭の中で繰り返した。

それでも、頭の中が麻痺してしまって、うまく動かなかった。

通夜に葬儀に精進落とすと次々に起こる慌しさに、体をなんとかついていかせるだけで精一杯だった。

理は思う。これら一連の儀式は衝撃で動けなくなるのを防ぐために、先人が考えた手法だろうと。

精進落としての席には人は少なかった、それは、単純に家が狭かったせいもあるが、近親者がごく少なかったためだ。

残っているのは、理と珠子、母の恩師である滝川という髭の老人、

それに、山縣やまがたという弁護士だ。

それぞれ、以前からの知り合いであり、理にとつても気のおけない人たちであることに違いは無かった。けれど、理は口を開けなかった。口を開いたら泣いてしまいそうなのに、きつと泣く事はできないから。

訃報から一度も、泣いた事はなかった。

それぞれにグラスと助六寿司の詰折が渡った。しかし、あと二人、来客があるようだった。

「少し、遅れているらしいわ」

珠子と山縣が小声で会話を交わしていた。

そのときだった。

だん、と衝撃音と重ねて、ピンボン、とチャイムがなった。

近くにいた理が玄関に向かう。鍵が開いていたために、理がたどり着いたときには、来訪者はドアを開けたところだった。

思い切り正面から見合う。

黒いコート。そう背は高くないのに、鋭い眼光からは人を圧倒する熱量が発せられているようだった。

目だけが大きく、やせている男。

(どこかで、見た?)

理が思い当たるよりも早く、男は靴を脱ぎ、理を押しつけてどかどかと奥へ行った。

「ああ、お待ちしてましたよ、藤井さん」

山縣の声が聞こえる。

理が靴を揃え、振り返ると、男が遺影の前の壇に拳を振り下ろした所だった。

きゃあつと珠子が声を上げた。

理は男に後ろから掴みかかり、何度も拳を振り下ろすのを止めさせようともがいた。

「やめっ」

しかし、男は小さいからだのどこにそんな力があるのかと思うほ

どの怪力で理を突き飛ばした。

取り押さえようとした山縣のことも殴り飛ばす。

そして壇に蹴りを入れた。

白い糸で刺繍がほどこされた布で覆われた壇に灰が散りた。

「やめてください！」

力のかぎり理は叫び、また男にしがみ付くが、振り払われる。理はぎり、と音がするほど強く、奥歯を噛んだ。

そのとき、大丈夫、と理の肩に手を置いて、頭を撫せていった手があった。

黒いスーツの長身の男が軽々と、暴れる男を羽交い絞めにする。

「はなせ、糸」

「子供が泣きます」

言われて、はじめて気付いたように、乱暴した男は理を睨んだ。

理はあまりのことに放心していたが、負けじと不躰な侵入者を睨み返した。

その瞬間、二人の男はそれぞれに、奇妙な顔をした。

「どういうことだ珠子」

乱暴した男は、長身の男の手を振り払い、どっかと円卓の前に座りそう言った。

「さっき電話で説明したとおりよ。お兄ちゃんと別れた後、凜はこの子を産んだ」

「俺の子供なのか？」

「そう、遺言状には書いてあります」

山縣が吹っ飛ばされた眼鏡をかけなおしながら言った。

「日向凜さんの遺言はおおまかに分けて三つ、日向理さんの父親は藤井勸さんであること。自分の死後は藤井さんが理さんの保護者たること。そして、葬式は自宅で行うこと」

「なんだそりゃ」

乱暴した男は、かってに卓上のビール瓶を開けて、空のコップに注ぎ、ごくりと飲み干した。

だん、と音強くコップをテーブルに置く。

「ふざけやがって、あの阿呆」

ぎりぎり歯をかみ締める音がした。

目を剥いて、まるで般若のようだと理は思った。

しんとした一瞬をやぶつたのは、滝川翁が男の握るグラスにビールを注ぐ音だった。

「とりあえず、飲みなさい」

滝川翁のふさふさの白い眉毛の下の目の強さに押されたのか、男は黙って、ビールを飲み干した。

飲み干す都度、わんこそばのように滝川翁がビールを継ぎ足していくので、あつという間にビール瓶が空になった。

その調子で黙々と空にして、5本目のビールで男は電池の切れるようにぼったりと後ろに倒れた。時間にして15分。

急性アルコール中毒か、と山縣が慌てたが、長身の男が覗き込んで、眠っているだけです、ね、と言った。そのまま乱暴した男をひよいと肩に担ぎ上げ、長身の男は深々とお辞儀をした。

そして、片手で器用に、三人へそれぞれ名刺を差し出した。

「珠子さんはご存知ですが、この藤井のマネージャーをしております糸田と申します。今日はご迷惑をおかけし申し訳ございませんでした。とくに理さん、お母様に無礼な言動がございましたことを、深くお詫び申し上げます」

藤井という男を抱えたまま、糸田はもう一度、理にお辞儀をした。謝り慣れている人だと、理は思った。

「遺言の件はまた後日、あらためて本人が検討の上うかがいます。今日のところは取り急ぎこれで失礼いたします」

と去りかけて、糸田は振り返り、藤井を荷物のように下ろしてきちんと座った上で理の母に焼香をし、ふたたびお辞儀をして、まるで気付かずに寝ている藤井を抱え上げた。

「それでは」

低い深みのある声でそう言って、糸田と抱え上げられた藤井は去

っていった。

しばらく、場はしんと静まり返った。

「嵐のような、人たちでしたね」

山縣が遺言状をしまいながら言う。珠子が山縣にお辞儀を繰り返した。

「すみません、うちの兄が乱暴をいたしまして。後でお詫びにいかせますので」

「いえいえ、こんなのは慣れっこですから」

人の良さそうな笑顔でそう言って、山縣は会釈をして帰っていった。それをしおに、滝川翁も腰を上げた。

理は、預かっていたコートを滝川翁に渡す。

目を細めて、理の頭をぼんぼんと撫ぜた。

「もつと泣きなさい」

それだけ言つて、滝川翁は家をあとにした。

後には、珠子と理だけが残った。

二人で、ほとんど手のつけられていない助六寿司を冷蔵庫にしまい、グラスを洗う。

「珠子ちゃんは、知ってたの？」

グラスを洗う珠子の隣で、水切りに置かれた食器を拭きながら、理は口をひらいた。

珠子はちらりと横目で理を見て、「ええ」と答えた。

「そうなんだ」

理は呟いて、食器を拭くことに専念した。

泊まっっていく、という珠子の申し出は断った。

珠子は母が亡くなつてからずっと理の傍にいた。各所への連絡だとか、葬儀の準備だとか、そういったことを一手に引き受けて、疲れているはずだった。だから、自宅でゆっくり休んでほしかった。

去り際に、珠子は靴を履きながら言った。

「遺言にはあああるけど、わたしと暮らしたほうがいいと思うわ。理ちゃんさえよければね。兄は人の親になれるような人間じゃないわ。見たでしょう。兄自身に保護者が必要なくらいなんだから」

それは、なじみ深い珠子と暮らしたほうが、理にとっても願ったりかなったりではあった。

しかし、そんなことは母自身だってわかっていたはずだ。珠子は単なる母の友人であるだけでなく、理の叔母でもあるのだから。

だいたい、ずっと父はいないと言われていたのだ。

『理はね、わたしが単体生殖で産んだ子供なんだよ』

まだ物心ついたばかりのころに、お父さんはどこにいるのと聞いたときに、母は晴れやかにそう言ったものだった。

単体生殖など知るわけもない当時の理に、アメーバの分裂の絵を見せて、こういうかんじで分裂したんだよ、と教えた。

『でも誰にも言っちゃだめだよ、普通の人にはできないことだから、もしばれたら秘密のこわい組織につれていかれて、人体実験とかされちゃうからね』

まったく具体性はなかったが、母の声音から理はいろいろな子供なりの恐ろしい想像をして、そんなことになってはいけないと母に必死にしがみついたものだった。

母は、そんな理を見て微笑みながら人差し指を理の唇に置いた。

『だから、これはわたしと理の間だけの秘密だよ』

こくこく、と強く何度も頷いたのを覚えている。

長じるにつけ、そんなわけがないと思い始めたのではあるが。

ふと気がつくと、円卓の上でつぶつぶしていた。

円卓を拭いた後、一休みするつもりが眠ってしまったらしい。電気がこうこうとつきっぱなしなのがかえって痛々しい気持ちになった。

いつもの家なのに、まったく違う空間になってしまった。簡素だが遺影と花のかざられた壇。そして、骨壺の入った白い包み。

まだ熱い、骨を拾って詰めた。この世のどこからも失われてしまった肉体の残滓が、そこにある。

つい一週間前には、その書斎のドアから『おなかすいた〜夜食つくって〜』と頭をかきながら出てきたというのに、それがもうどこにもない。

喉がつまり、うめいた。けれど涙は出なかった。理は耐え切れず、外に飛び出していた。

寝起きだからか、半分眠っているようでも半分は妙に理性的で、雨が降っていれば傘を持っていく。それは理性的というよりも体に刷り込まれた習慣的行動なのだろうと理は傘に落ちる水滴を眺めながら思った。

夜の住宅街は、灯りがぼつりぼつりと灯るほかは、ひたすら暗い。アスファルトにたまった水に街灯の明かりがはねる。

この辺りに引越してきたのは三年前だ。

理が中高一貫の緑奥女学院に合格し、母も別の大学で教授職に就いた。引越した理由としては、緑奥と大学の間地点がこの辺だったこともあるだろう。

理は、安売りスーパーが近くにないからと反対したのだが、母は一目見て現在のマンションを気に入ってしまったのだという。その気持ちは、わからなくもない。

白い外壁と植物を模した装飾、黒い鉄柵がついたアールデコ風の建物。

中身こそは新しく、普通のマンションと変わりなかったが、ただその風情だけで、母は引越しを決めたのだ。

(でももしかしたらここに引越さなければ、事故は起きなかったのかもしれない)

いまさら考えても仕方が無いことだとは、自分でも思う。母が亡くなったのは職場近くで居眠り運転のトラックにひかれたからだ。けれど、人生は選択の連続だ。もしかしたら、何かが違っていたかもしれないのに。

考え続ける理の目の前に、橙色の灯りが飛び込んできた。控えめな光量。

傘を持ち上げ中を見ると、それはカフェだった。

Le matinと硝子扉に書いてある。

昔、母が何度か中にいるのを見かけたことがあることを、思い出した。なんとなく、近寄りがたくて素通りしたものだっただけけれど。気がつけばふらりと、そちらに入ろうとしていた。

ポケットには五百円玉。おつりでもらって財布に入れ忘れていた分だろう。

ドアを開けるとからん、と音がした。

「いらっしやませ」

晴れやかな笑顔の青年が、カウンターにいた。

黒縁の眼鏡越しにもわかる、整った顔立ち。

色白だが軟弱なかんじがしないのは背が高く体格もいいせいだろう。色素の薄い髪を後ろに撫で付けている。

(お母さんに、似てる)

反射的に思った。

顔立ちではなく、母といい、この青年といい、一目で人の目をうばう爽やかさがあった。

なんとなく落ち着いた気持ちで注文をし、席について暖かいカフェオレを飲む。

カフェインが含まれるはずなのに、体が温まったせいかわんだかぼんやり眠くなる。

理は席を立ち、家に帰ると倒れこむように自室で眠った。

理、困惑する

けたたましいチャイムの音で目が覚めた。
どんどん、とドアを叩く音。

(近所迷惑・・・)

制服のまま眠ってしまった。
皺になるな、と思いながら、騒がしいドアの方へ近づき、魚眼レンズから外を見る。

すると、いきなり大きな目玉。

「いるんだろうが、開けるやこら
まるきりヤクザである。」

理はゆっくりと思い出していた。

(ほんとに、これが父親、なの・・・?)

知らないふりをしたかったが、あまりに騒がしいので諦めてチェインをはずし、鍵を開ける。

「少し静かにしてもらえ・・・」

言いかけたとき、藤井は大きなポストンバックを勢いよく理に押し付けた。

重い。よろりとよろけてへたりこむ。

「これ、運んどけ」

理を見下ろしてそう言い、藤井は踵を返した。

あまりのことに声も出ない。とりあえず床にバックを置くと、次から次へバックが運ばれてきた。

合計5個。それが荷物のすべてだった。

「何ぼんやりしてんだよ、早く運べよ。どこなんだよオレの部屋は」
「は？」

思い切り眉間に皺を寄せて聞き返す。

藤井も同じように眉間に皺を寄せる。

「遺言じゃしょうがねえだろ。ひきはらって来たから、今日からここに住む」

「はあ？」

思い切り力をこめて尋ね返すと、藤井は音をたてて壁に手をついた。乱暴な動作には慣れていないので、一瞬思考停止しそうになるが、なんとか踏みとどまる。

しかし、一瞬ひるんだことを見抜いて、藤井は理をせせら笑った。「恨むんなら頭のおかしい母親をもったことを恨むんだな」

理は、奥歯を噛み、拳を握り締めた。

怒りが、沸点に達すると、かえって気持ちは冷たく冷えていくことを、理ははじめて知った。

足をしっかりと踏みしめ、藤井の人相の悪い顔を静かに見上げる。

「いまの言葉、取り消してください」

「はあ？ あいつの頭がおかしいのなんて、子供なら一番よくわかってんだろ。会ったこともない男と親子だから一緒に暮らせだなんて娘に遺言残すようなやつだぜ」

「何か考えがあつてのことでしょう。これ以上故人を愚弄するなら、警察を呼びます」

「は？」

「朝からの騒ぎは、近所中に響き渡っていると思います。このマンションは、古くからの住人も多いし、母を亡くして天涯孤独になつたわたしのことは皆、気にかけてくれている」

タイミングよく、ぎい、と外でドアが開く音がした。

ピンポン、とチャイムが鳴る。

「理ちゃん、なにかあつた？」

隣の隣の部屋に住むおばさんの声だ。編集者の夫と二人で住むルポライター。

藤井は舌打ちした。

「おはようございます。どうかされましたか？」

外で男の声がした。深みのある声。藤井の顔が緩む。

「いえ、なんだか騒がしかったものだから」

「それはいけない。理ちゃんが心配だ」

「お知り合い？」

おばさんが安心しつつある。

「ええ。親戚です」

もう一度チャイムが鳴った。

藤井が、これ以上ないくらい邪悪な微笑みを理に向けた。

おれの勝ちだな、とささやくと、踵を返しドアを開ける。

「おはようございます。お騒がせしてすみません」

理は目をむいた。別人のように人当たりのいい声。廊下へ出て行く藤井の顔は、普段の胡散臭さのかけらもない、一般小市民の顔。それも、悄然とした中年男の顔だ。

「騒がしくて申し訳ありません。私は凜の別れた亭主です。このたびこちらに引越すことになりました。本当は私の家に理を引き取ろうと思ったんですが、理のやつがここから離れたくないって言うものだから、私が引越してこよう」と

「あらそうでしたか。このたびはご愁傷様です」

「お気遣い、いたみいます。しばらくは引越しやなにかで騒がしくしてしまうかもしれません。改めてご挨拶に参りますので。」

「いえ、そんなかまいませんよ」

和気あいあいと談笑して、おばさんは自室に帰ってしまった。

帰ってきた藤井は、また人相の悪い状態に戻っていた。

「なにぼんやりしてんだよ。いいからとっとと荷物運べってんだよ」
威嚇する藤井の頭を、後ろから糸田が拳で殴った。ドアが閉まる。

「私が行くまで待っていると言ったでしょう、あなたって人は！」

「なんだよ。オレひとりでうまくやっただろうが」

「結果論でしょう」

そう言い捨てると、糸田は理からバツクを取った。

「すみません朝から。驚いたでしょう。引越しは全部私とこの人でやりますから、理さんはゆっくりしてくださいっていいですよ」

「甘やかすなよ」

藤井が茶々を入れて、糸田にバツクを押し付けられていた。

「自分のものも自分で運べない人が偉そうに言わないでください」

「ちげーよ。オレはどこがオレの部屋なんだかわからねえからよ」

「ちよつと待つてください」

理が、二人のやりとりになげないよう声を振り絞る。

二人が、理を見下ろした。

「わたしは、この人と一緒に暮らすのは嫌です」

藤井の片眉が上がった。

「何を考えているのか知りませんが、こんな乱暴な人と暮らすのなんてお断りです。母の遺産だつてそれほどないと聞きました。あるのはわたしが大学に行くまで、母が残してくれた分だと」

にやり、と藤井が笑った。

「金目当てじゃねえよ」

「じゃあ何ですか」

「何だと思う？」

この二人の風貌からは、およそいい想像ができない。

じりじりと後退すると、藤井はけたけたと笑った。糸田は額を押さえて深々とため息をついた。

「子供をからかうのはよしなさい。あのねえ、理さんも、警戒するのはよくわかりますし、もう何の説得力もないと思いますけど、意外にこれでも悪い人じゃないんですよ。ただ悪ぶってるだけです」
「そうそう、ほんとに悪い奴っていうのはこういう奴のことを言うんだぜ」

と糸田を指差した。

どうも、遊んでいるようにしか理には思えない。

どうでもよくなって、理は半眼になった。

「だからよ、オレの部屋はどこなんだよ」

手当たり次第近くのドアを開ける。
そして、立ち止まった。

藤井が開けたドアは、玄関脇の6畳。そこは、母の書斎だった。
両脇の壁を埋め、床にも積みあがる本。
ドアの向かいの窓際には大きな机と椅子。

机の上にはデスクトップパソコン。

その傍らにある苔色の、猫足のソファに寝転がって本を読んだり
仮眠をとっていたことを理は思い出す。

藤井は、無言でドアを閉めた。

理はその部屋の、隣のドアを開けた。母の寝室だが、ほとんど書
斎で寝ていたこともあって、ここで寝ているの見たのは越してき
た三年間でも数えるほどしかない。無用の長物であり、主に珠子が
泊まりに来たときの寝室として使われていた。

「こちらに」

糸田が黙って荷物を運び入れた。

藤井の荷物は、本当に少なかった。

次にチャイムが鳴ったとき、来客を迎えたのは藤井だった。

「なにしてるのお兄ちゃん」

「よう珠子」

片手を上げて、まあ上がれよ、と言う藤井の口調は、もうこの家
を棲家と決めている様子だった。

理は藤井と糸田にお茶を淹れているところだった。

珠子の分も増やし、リビングダイニングで4人は円卓をかこむ。

昨日の騒動から、まだ24時間もたっていない。

遺影の母だけが相変わらず晴れやかだ。

「あれだけ大暴れしといてけろりと引っ越してくるなんて、神経を
疑うわ」

緑茶をすすりながら、珠子は辛らつに言い放った。

基本的に穏やかで冷静、優しい珠子が、ここまで棘のある物言いをするのを、理ははじめて見た。

「疑うなら凜の野郎の神経を疑えってんだ。勝手にオレの前からいなくなつたくせに、自分が死んだら子供を頼むだあ？　むしがよすぎるのもたいがいにしるよ」

「お兄ちゃんがいつつも違う女の尻ばかり追いかけてたからですよ。あいつには煩惱しかないので、凜はいつも馬鹿にしてたわよ」

「何言つてやがんだ。あいつこそいつつも違う女をはべらせやがって」

「変な言い方しないで。友達よ」

藤井は鼻を鳴らした。

「どうだか」

目をすがめて珠子を見た。

珠子はまたお茶をすすった。

「とにかく、理ちゃんはお兄ちゃんに任せておけないわ」

「勝手に決めてんじゃねえよ。それにもう引越してきちゃったからな」

「ここに住んだらいいでしょ。理ちゃんは私の家につれていくから」

「お前のゴミ屋敷にか？　それは理がかわいそうってもんだぜ」

珠子の白い頬にさあつと赤味がさした。

「失礼ね！　いまはきれいよ。比較的」

「嫁にいけねえわけだよなあ。整理整頓、掃除洗濯全然だめだもんなあ」

「いまそれは関係ないでしょう」

しかし藤井は理の襟首をぐいとつかんでひきよせる。

「お前考えとけ、まず珠子の家に行ったら掃除からはじまるぞ。しかもやってもやってもきりがねえ。片付ける端からこいつは散らかすからな。整理整頓って部分が頭から抜けて生まれてきたんだ。母

ちゃんがどんなに怒ってもちつともなおりやしなか・・・」

珠子が藤井を蹴り飛ばして、言葉は知りきれトンボになった。

理は目を丸くする。珠子が人を蹴るなんて。おしとやかで聖母のような穏やかなひとだと思っていたのに。

(でもしょうがない。この人が相手じゃ、蹴りたくもなる)

「はいはい兄妹けんかはそれくらいにして、どうせ明日からこの人は仕事でしばらく戻りませんから」

「なに？ ロケ地遠いの？」

珠子が口を挟んだ。

「北海道です」

「牛と抗争でもするのかしら」

「珠子さん、誤解しているみたいですけど、藤井はヤクザ映画にはかり出ているわけじゃないんですよ」

「でもヤクザの役でしょ？」

「まあ・・・そうですね」

けつと片膝をたてて藤井は吐き捨てた。

理は、藤井を見る。そして、糸田に視線を移す。糸田は視線の意味するところを汲み、微笑んだ。

「理さん、お父さんはね、役者なんですよ。聞いたこと無い？ ないですよ。脇役悪役専門だし。芸名も本名も同じ藤井勧っていうんです。今度見てみてあげてください」

「はあ、と理は気の抜けた返事をした。どちらかといえば、糸田の方が背も高く見栄えもするし声もよいので役者のようだった。

「私はお父さんのマナージャーです。ていうかまあ、腐れ縁ですね。昔は役者仲間だったんですが、私は廃業して、マナージャーになったわけですよ」

「誰もそんなこと聞いてねえだろ」

藤井が口を挟む。糸田はそちらを見ずに続けた。

「あなたも、まあ凜さんもそういうところがありましたけど、言葉が足りないんですよ。このままじゃ理さんだって判断材料が少なす

ぎるでしょう。あなたの風貌で何も言わずに乗り込んでいったら、ヤクザ以外の何者でもなかったでしょう。ちよっとは安心させてあげないと」

「うるせえよ」

吐き捨てて、藤井はまたそっぽをむいてしまった。まるで子供である。子供というよりは野生児か。野人か。

とりあえずその日は、二人きりにさせるのは心配だという珠子が泊まり、ことなきを得た。

昼ごはんを皆で食べた後、藤井は台本を読むといって部屋にこもってしまい、夕食時もほとんどしゃべらなかった。

ただ翌朝でかけるときに、よく考えておけよ、と理に向けて言った。

偉そうな物言いにも慣れてしまい、理は無言で少し頷いた。

ひとりにするのは心配、と珠子がしばらくこの部屋に泊まっていた。

しかし、何週間かたち、珠子の仕事の資料がなくちよくちよく家に帰るのを見るにつけ、理はだんだん申し訳なくなっていくた。ただでさえ、葬式や様々な諸整備はすべて珠子がやってくれていた。

藤井にこの家に乗っ取られるようで癪だったが、このまま、珠子の家に行こうかと考えた。

話をすると珠子も喜んでくれ、荷物をまとめようとした矢先だった。

「ごめん理ちゃん、頼まれている仕事で、どうしてもすぐに向こうに行かなくちゃならなくて」

珠子は翻訳家である。現地で調べなければわからないことがあるのだという。

「たぶん、一ヶ月くらいかかると思っただけど・・・」

「大丈夫ですよ。ひとりには慣れていきます」

家事はいまでも一人でやっているので、とくに変わりはない。

「お兄ちゃんには、勝手なことしないように釘をさしていくから。困ったことがあつたらすぐに言っつてね」

そう言つて、あわただしく珠子は出かけて行つてしまった。

もう年の瀬。店の前にはクリスマスツリーを見かけるようになった。

ひとりだと家事も手を抜けるので、なんとなく気の抜けた思いで駅からビジネス街を通り抜ける。

日の暮れるのが早くなり、学校から帰るころには、もう暗い。

（あたたかい、光）

いつもと違う道を通ると、葬式の夜に行つた店の前を通りかかった。

ふらりとまた、店に入つていった。

黒縁眼鏡の晴れやかな青年は、またカウンターにいた。

「いらつしゃいませ」

満面の笑み。ここまで晴れやかだとかえつてうそくさいなあ、と失礼なことを思いながら、カフェオレを頼んだ。

また、以前と同じ店の奥の、壁際の席に座る。

店は以前よりも賑わつていた。制服の学生は理だけだが、誰も理のことなど気にしない。けれども光は暖かく、居心地がよかつた。

そのため、なんとなくよくよく訪れるようになっていた。

カウンターにはいつも同じ青年がおり、いつも光放つように無駄にきらびやかだった。

何度か通つうちに、どうもこの青年の愛想のよさに、誘蛾灯のよくに寄せられる人間がいるらしいことがわかつた。

そつという人は、老若男女、席に着きながらもちらりちらりと青年に目を走らせるからだ。

(なるほど)

これも集客技術だと理は思った。青年が自覚しているのかいないかはわからないが。

そういえば、母もどこに行っても人気が高かった。葬式はひそかに行われたので、葬式の後にも弔問客が幾人が訪れた。

その中でも、好きでした、と告白していく者が何人かいた。

その様子を見るにつけ、珠子は深々とため息をついていた。

そんな珠子に、子供の頃、理は尋ねたことがある。どうして母はあんなに人気があるのかと。

珠子は苦笑しながら考え、『人の心にするつと入ってくるのよね。それで、なんか気持ち軽くしていくの。花火みたいだね。花火を見たら、みんな「わあっ」て思ってたきれいだなあって楽しいなあって思うでしょう？いやなことそのときはみんな忘れちゃう』

そういう、麻薬性があるのだと言った。

子供として一緒に暮らしていて、特に自覚することはなかったけれど、うまく言えない心のもやもやを、いつのまにか軽くしてくれるのは確かに母だったと理はいまさらながら思い出す。

そんな風に青年を見ている間に、ひとつのことに気がついた。

接客していると、ときには手が触れることがある。そういったときに、すこし笑顔が固まるのだ。

(接触嫌悪?)

しかし、仲間の店員とは気軽に触れ合っている。

それから興味を持って観察していると、女性と触れ合ったときには笑みが固まる、ということがわかった。

女性に接客するときにはいつもよりもこころもち慎重なようだ。もちろん理に接するときも。

(女性嫌い?)

そういう人もいるだろう。

店員仲間であるらしい男性の仕草は過剰に女性的で、もしかした

らふたりは恋人同士か、もしくはそういった嗜好の友達同士のなのかもしれない、と理はなんとなく思った。

そんな風に、暇つぶしがてら観察を続けていたある日、女性が青年をなじっている現場に遭遇した。

約束をしていたのになかったとか、もてあそんだとか、そんな内容である。たしかに、よく見る顔ではあった。彼目当ての客はよくわかるので、理にも記憶があった。

対する青年は笑顔ではあるが、弱りきった顔をしていた。

女性のヒステリックな様子や、その一方的な物言いから、真実はさておき、青年が少しかわいそうだった。

しかし、女性の言動はエスカレートし、青年の腕をつかんだ。その瞬間だった。

青年の顔から、いつさいの笑みが消えた。

ただ冷たい目になって、つかんだ手を振り払って、つかまれたところを押さえた。

うつむいたが、さっと肌に赤みが差す。

振り払われた女性は、傷ついた様子で泣き出す。

先刻からの騒動で、客は理以外いなくなっていた。

しゃがんでまるまってしゃくりあげる女性の背中。

とっさに、理は駆け寄って、女性の背中をなでていた。

(好きでした)

そう告げて位牌の前で泣き崩れた人。

(わたしも泣きたい。)

けれど泣けない。

何を言ったか、あまり覚えていない。

けれど理は立ち上がって、青年の手を握っていた。

青年の体を、赤い発疹が覆った。

震える。

汗。

死ぬ前の鳥のような、呼吸困難。

（女性嫌悪）

にしては度がすぎている。

「女性アレルギーなのよ」

と青年を守るように現れた女性的な仕草の店員は言った。

理、順応する

(アレルギー：外部からの抗原に対し、免疫反応が起こる疾患)
理は、家に帰ってから辞書で調べてみた。

(つまり、ばい菌が入って熱が出るようなものかな?)
しかし、女性は体の内部に入るわけでもないし、結局心因性の症状なのだろう。

ぼんやり考えていると、ばしゃんと玄関の開く音がした。
もう22時である。騒いでいい時間ではない。

鍵を持っているのは、珠子と藤井だけだが、珠子ではないことは間違いない。

「帰ったぞ〜」

という雄たけびと共に、静かになった。

怪訝に思い部屋のドアを開けると、玄関先で藤井が伸びていた。

近づくと、猛烈に酒臭い。

理は手を口で覆いつつ、反対の指で頭をつついてみる。

ぱっちりと目を開いた。しかし、焦点が定まっていない。

「水」

節くれだった手が宙をかく。

しぶしぶコップに水を汲み、持って来る。

しかしそのまま眠っているの、理はそのコップの中身を頭にぶちまけた。

「っ、おま、なにしてくれてんだ」

「水がほしいといわれたので」

「かけるやつがあるか」

そつ言いながらぶるりと震えた。濡れた犬のようだ。

「寒かったら着替えてとりあえず部屋で寝てください。風邪ひかれ

ても迷惑なんで」

「お前、徹底的に冷たいな」

「よっばらいにかけける温情は持ち合わせていません」

「あと、こないだから思ってたけど、お前言葉がかたつくるしいよ。女子高生つてのはもつと「まじやばだし」みたいなあほみてえな喋り方するもんじゃねえのか。そんなんで学校で浮いてないか？」

「うるさい」

一語一語はつきりと区切って言う。

酔いがまわって力が入らないのをいいことに、藤井のコートの襟を持って廊下を引きずっていった。

軽い。理より少し大きいくらいだから、慎重も160cm少ししかないだろう。男性としては小さい。さらにやせている。

首がしまる、苦しいなどと騒いでいたが、理は気にせず母の寝室で、いまは藤井の荷物が置いてある部屋に放り込んだ。

「おやすみなさい」

ばたんとドアを閉じてから、思い立って台所に行き、冷蔵庫を開ける。ミネラルウォーターのペットボトルを置きに戻ると、藤井は部屋の床ですやすやと眠っていた。

その顔は、普段と違って妙にあどけなく、理は少し毒気を抜かれた。

（そついえばお母さんも、よっばらいだった）

学生と飲み歩いて、帰ってくることも多かった。あまり強くないのお酒が好きなのだ。手に負えない。さすがに玄関でねることまではなかったが、次の日はかならず二日酔いだった。

（結局世話をやいている）

理はそう思い、自分も布団に入って目を閉じた。

念のため、朝は味噌汁とおにぎりを作ってテーブルの上に置いた。

学校に行つて家に帰ると、それらはきれいに平らげられていた。そつと寢室のドアを開けると、藤井は高いいびきをかいて大の字になつて眠つていた。

起こさないようにドアを閉めると、チャイムの音がして、理は驚いた。

レンズから覗くと、向こうには糸田がいた。

なんとなくほつとして、ドアを開く。

「こんにちは」

あいかわらず通るいい声だった。声優かナレーションをしたらいいのに、と理は思いつつ頭を下げる。

「藤井は、いますか？」

「寝てます」

そつ言つと糸田は苦笑した。

「やっぱり一杯ひつかけてから帰つたのか」とひとりごちる。

理は首をかしげると、糸田はおもしろそつに笑つた。

「なんでもありません。ちよつと様子を見に。あと、これは私からのお土産です」

紙袋の中には、お菓子が何種類か入つていた。どれも北海道の銘菓だ。学校の友達が休み明けにくれることがあるので、知つていたひそかに好きだったものだ。

「ありがとうございます」

そつてはつと気付く。

「どうぞ、おありがとうございます」

自分としたことが、母の仕事相手であればきちんと対応していたのに、どうも気が抜けている。

しかし糸田はゆるやかに首を振つた。

「近くまで来たついでですから」

そつ言つて、さわやかに去つていった。

(絵に描いたような大人の男のひとだなあ)

理は寢室にいる藤井と比べてしみじみと思った。

それから、藤井は家にいたりいなかったりだった。

一日中家にいることもあれば、ふらりと出かけて数日戻らないこともある。

仕事なのかなんなのかわからないし、ご飯を作る予定もある。

余った分は翌日に食べればいいのだが、理一人であれば、簡単に済ませられるものも、藤井もいるのであればある程度のもを作らなければならぬと思うってしまう。

仕事や外食の予定を知らせるように言うが、右から左へ抜けていくようにある。

(人と暮らすってことがどういうことか、わかってないんだろな)

母は、当然だがその辺がすっかりしていた。

自分が出張のときなどは、小学生までは珠子に泊まってもらえるようにお願いしていた。

母の助けになろうと家事を覚え、もともと家事が不得意だった母の技量はすぐに抜かしてしまったのでたいがい一人ではできた。

しかし、それでも珠子の都合がつかず、一人で家にいるのは時々不安だった。

一人きりで置いていかれてしまったのではないかと、子供の頃はありえない空想にひたり寂しくなったものだった。母は少しふらりとしたところがあったからだ。

(その辺も、似てる)

母と藤井は、いい加減なところがよく似ていた。これは長続きしないだろう。收拾がつかなくなる。

しかし、理はそのころにはもう気付いていた。

誰と母が似てる、ではなくて、誰かに母の面影を、見出そうとし

ていることに。

藤井や、喫茶店の青年や。

(それは失礼だって、わかっているけれど)

ただ、それは自然に行ってしまうことなので、どうしても止めることができなかつた。

街はクリスマス一色になった。

理は友達の家のカリスマスパーティに誘われていたが、喪中なので丁重にお断りした。

その友達は真正正銘のお金持ちのお家であり、中学一年生するとき小学校までと同じ気持ちで出かけて度肝を抜かれたことを思い出す。

都心にもかかわらず、何坪あるのか検討もつかない、森も池もあるような広い敷地。門から5分ほど森の中を自動車であつて、ようやく白い洋館が現れるという、おとぎの国の話だ。

パーティーも、背広やイブニングドレスを着た大人たちが談笑するような立食形式のもの。一緒に行つた友達も、幼稚舎から緑奥に通う同規模の資産家に生まれた数人は慣れてるようだったが、理のように奨学金で通っている成績がいいだけの庶民としては、ただぼかんとその様子を眺めた後、壁際の椅子でとつてきたご飯を食べるのが精一杯だった。一体あの友達は何を思つて庶民の子供を連れて行つたのだらうと思つた。

だが、それ以降も都度都度モルジブに行く、だとかこの週末はカナダにスキーに行くなどとスケールの違いを軽々と見せられると、その子にとってはそれが普通なのだと思うようになった。資産をひけらかすのではなく。

これが、旧家の家柄などだと一歩線をひいているところがあるのだが、その子の家は祖父が一代で財を為した、いわゆる成金であつ

たので、垣根がゆるいところもあった。元々の性格かもしれないが、ともあれ、友達の誘いを断って他の友達の誘いを受けるわけにも行かず、理はどこにもでかけずにクリスマスを過ごす予定だった。

学校はキリスト教系であり、授業の一環として宗教の時間などもあったが、理は洗礼を受けていないし特にクリスマスになにかしなければいけないわけではなかった。

去年までだって、フライドチキンとケーキを食べたくらいである。母と一緒に過ごしたたわいない思い出が、ひとつひとつ胸の中に灯り、すぐに消えていった。

そのころには、理は糸田と連絡先を交換し、藤井のスケジュールを教えてもらえるようになった。

撮影中は帰ってくる時間もまちまちなのですぐに食べられるものや常備菜を常に1、2品残しておくことにした。

クリスマスイブまで仕事、クリスマス当日は休みだったが、仕事で長引いたとかでクリスマスイブは帰ってこなかった。

家に帰ってきたのは、クリスマスの昼だ。

ヘッドホンをして勉強をしていたが、疲れたので一休みしようとして台所へむかっただころ、前日に作って残しておいた唐揚げを台所でたっただまま手づかみでもそもそ食べているところを発見し、理は大変おどろいた。

「泥棒かと思った」

理が思わずぼそりと呟くと、耳ざとくききつけた藤井はぎろりと目をむいた。

しかしなにも言わず、皿を流しに置いた。

「ごっつそさん」

それだけぶっきらぼうに言って、藤井は寝室に入ってしまった。

そのまま、丸一日出てこなかった。

一瞬見たただけだが、少しやせていた。

仕事のたびに、少しやせる気がした。

(そんなにハードなんだろうか、役者って)

はじめて理は、自分から藤井のことをインターネットで探してみ
た。

情報を総合すると、劇団上がりの俳優で、端役が多かったが、V
シネマでチンピラ役を演じたのが本人の風貌と合ってほかの作品で
もチンピラ、ヤクザ役を多く依頼されるようになる。しかし、最近
になって高名な監督の作品で子供を母親の元に送り届ける元ヤクザ
役を好演しその名が地味に知られるようになったそうだ。

中には熱烈なファンもいるようで、非公認のホームページまで作
られていた。

(この人たち、本気かな・・・)

演じているところを見たことが無いのでなんとも言えないが、普
段の様子を見ていると酒好きでいい加減でだらしない中年でしかな
い。

そう考えると、いつそう演じている藤井に興味がわいてきたが、
元々日本の映画やドラマは好きではなかったので、とうとう手がだ
せないまま日々が過ぎていった。

大晦日や正月の藤井はいたりいなかったりまちまちだった。

糸田情報によると仕事ではないようだ。酒臭いときもある。人並
みにつきあいだってあるだろう。しかし、理と藤井はほとんど実の
ある会話をしなかった。口を開けばけんかになるからだ。

(一言多いんだよ)

もっとおしゃれをしろだとか、母といっしょで女らしさのかけら
もないだとか、そんなだから家にこもってばかりなんだとか、料理
がしょっぱすぎるだとか、文句しか言わない。

普段は落ち着いているといわれることが多い理だが、藤井にはペ
ースを崩されることが多かった。

しかしおかげで、寂しさが少しまぎれることにも気付いていた。悔しいので気付かないふりをしていたが。

正月は4日に学校で卒業生の講演会があり、強制的に出席させられた。

そうだった場ではいつも以上に制服の着方をチェックされるので、念入りにシャツにアイロンをかけ、上着にブラシをあてていった。

教育評論家だという卒業生は、春色のスーツをきて高らかな声で、独唱するかのように丸まる三時間の公演を終えた。

終わったときには、おなががぺこぺこだった。

今日は藤井は帰ってこないはずだ。

(寄り道しよう)

久しぶりに、青年のいる喫茶店に足を向ける。

そういえば年末、もう一人の店員 実はその店の店長であるらしいー晁に近所であったり会った。

夕飯の買出し帰りだったので、なにかと尋ねられた。夕飯を用意しなければならぬときは、一駅前を下りて、商店街の安売りスーパーで買い物をして帰ることが多い。

いままでも、一歩入れば住宅街だとしても、ビジネス街に制服の女子とスーパーの買い物袋は不似合いで、それは興味的になることが多かった。特に気にしていなかった。

そんな理を気にかけてくれて安売り情報やレシピを教えてくれたスーパーのおばさんや主婦たちと晁は通じるころがあった

晁は、自分と青年ゼンは従兄弟同士で、いまは同居していることや、主にゼンが料理を担当していることなどを理への質問を挟みつつスムーズに語っていった。

喫茶店に足を踏み入れて、そういえばしばらくこの店に来ていな

いことに気づいた。

もしかしたら、あの騒ぎ以来かもしれない。

そう考えて、青年　ゼンの眼鏡を見た

眼鏡の奥の目が、細まる。その笑顔に、いつものような光るほどの威力がない。

(なにかあつたのかな)

そういえば、最後にあつたときにゼンのアレルギーを発現させ、つらい思いをさせてしまったのだと注文をしながら思い出した。

いまさらかと思つたが素直に詫びると、ゼンは一瞬目を丸くして、それからまた破顔し、慣れているから平気だと言つた。

いくら慣れていると入つても、平気なはずが無い。

そう思つてみると、いつものまぶしいような笑みでゼンはまたきてくれて嬉しいと言つた。

太陽を直視したときのようなまばゆさに、理はおもわず眉をしかめて、それから諦めたように笑つた。

ホットサンドを食べながら、もしかしたらあの眩さは、誘蛾灯だけじゃなくて、防壁なのかもしれないな、と思つた。

まぶしくてやすやすと近寄れないようにするための。

だいたい、誘蛾灯だつてすいよせられた蛾はそのまま落ちて死んでしまうのだ。

それから、その店に寄ると晃と話をするようになったし、ゼンの笑顔は理に対して、まぶしさが減つていった。それは慣れたせいなのかどうかわからなかつた。

「気の毒な子なのよ」

以前、晃は声をひそめてそう理に言つた。

アレルギーのせいで女性とはほとんど付き合えないし、かと言つて男が好きなわけでもない。

「恋だつて、したくないんじゃないかしら。好かれるばかりで、でもゼンは女の人が苦手。とくに好かれるとね」

「好かれるなんて、ありがたいことじゃないですか」

しかし晃は首をふった。

「なんか、真面目な子に好かれやすいのかしら。思いつめやすいって言うのか、こないだみたいな騒ぎも、一度や二度じゃないのよ」

そう言つて、深々とため息をつく。

きつと従兄弟というよりは姉のような気持ちで、晃はゼンを見守つてきたのだろう。

「どういう経緯で二人で住むことになったのかは知らないが、そんな二人はいいな、と思った。」

理、諦念を抱く

そんな日々を過ごすうちに、季節は春に向かう。

持ち上がりなので受験勉強の必要はなかったが、奨学金のためのテストがあり、勉強に忙しかった。

梅の香も香る3月、理はスーパーからの帰り道で、猫を拾った。

東京の都心で捨て猫は珍しい気がした。

ダンボールには一匹きり。てのひらに座れるくらいの小さな猫だ。やせほそって目やにで目も開かない。死んでいるかと思っただが、かぼそい鳴き声で命を示す。

理はとっさに、携帯で動物病院を探した。幸い、近くに見つかったので連れて行った。

あまり長くは生きないだろう、というのが医者判断だった。

栄養失調だし、免疫機能も弱っていると。

それでも、理は、諦めずに赤ん坊用のミルクをつくって、かいがいしく世話をした。

医者を目薬で、固くこびりついていた目やにはとれた。

よたよたと歩いて理の後をついてまわったり、好きなところで寝たり、興味のあるものにじゃれついたりした。

トイレはなかなか覚えず、夜など理の布団に粗相することも度々だったが、根気よく教え、覚えるのにそれでも4日ほどかかった。

落ち着いて世話が出来たのは、中3であまり授業がなかったことと、藤井がしばらく仕事で留守だったためだ。

しかし、そんな幸せな生活も、一週間目までだった。

騒々しくくドアを開けて、藤井が帰ってきた。

理は自室で勉強を、猫はその傍らのベッドで眠っていたが、驚いてびっくりとして、眼を覚ました。

理が外の様子を覗くと、藤井は珍しく上機嫌で、鼻歌を歌いながら自分の部屋に荷物を放りこんだ。その瞬間だった。

紙袋が破裂するような音が響いた。

「えつくし、つくし」

猛烈なくしゃみだ。

理の足元から猫がちよろりと這い出してきた、藤井は、その猫を見て目をむいた。

そして、玄関を指差す。

「つく、そいつを、外に、出せ！」

理は最初なんのことだかわからず、目をぱちくりさせていたが、くしゃみをしながら体をかきはじめるにあたって、はたと猫が原因なのかと思いだった。

たしかに猫アレルギーの人もいると聞いたことがある。

しかし、この撃たれても死にそうに無い藤井が、よりによって。

『あれ、言ってませんでしたか？ 藤井は猫アレルギーなんですよ』

軽やかに携帯越しの糸田が言った。

「聞いてません」

『それは失礼』

糸田はついででもあったのでこちらに向かっているという。

理は子猫を抱えて、しばらく外で藤井が落ち着くのを待った。そうしている間に、糸田が着いた。

『捨てて来い』

糸田越しに、そう書いてある紙が外にいる理の元に運ばれた。藤井の字は乱暴だが意外に達筆だった。

理は暖をとるためもあって、服の中に猫を入れていた。猫は理のお腹のあたりでちよろちよろと歩いていた。

この温もりが、理には愛おしかった。離れがたかった。

『嫌です』

そう書いて、糸田に紙を返す。

糸田は苦笑しながらも、藤井に渡したようだ。すぐに、紙が戻る。『じゃあ糸田に捨てに行かせる』

それを読んで、とっさに理は糸田を見上げる。

糸田は眉を下げた笑った。

しかし、理はすでに知っていた。糸田は、藤井の仕事を優先させるだろうことを。

理は無言で、外に向かって歩き出した。

「理さん？」

呼びかけには答えない。

マンションを出て、とりあえず歩き出す。あてがあつたわけではない。ただ、衝動的に飛び出したただけだ。

考えなければならぬ。

そのためには、ひとりになりたかった。

まだ風は冷たい。

上着も着ずに、パーカーとジーンズで出てきてしまった。お腹の辺りでもぞもぞしていた猫は、歩き出すと共に理が猫の下に手を添えたので、いつしかおとなしくなった。ただその暖かさだけが理を勇気付けた。

(珠子ちゃんの家へ、行くのかな)

珠子は猫好きだったはずだ。郊外の小さな一軒家に住んでいて、昔は猫を飼っていた。

ただ、珠子は年末以降、帰れる見込みがないという。当初は一ヶ月の調査ということだったが、向こうで他の仕事をお願いされ、忙しくなったのだそうだ。

珠子は、留守宅でも理が入ることについてはかまわないだろう。元々、耐えられなくなったら逃げなさいと鍵を貰っていたのだ。

しかし、なぜ自分が思い出の詰まったあの部屋から、出なければならぬのだ。

だいたい、聞くところによれば母はあの部屋を自分のために残し

ておいてくれたらしい。

(アレルギーなら、自分が出て行けばいいんだ)

母の遺言だからって拒否する権利はあるはずだ。

だいたいなぜ、藤井がおとなしくそれにしたがっているのかわからなかった。

歩きながらだんだん怒りがつもってきた。

生活が一変したことや、初対面の、しかも破天荒な人間と生活しなければならぬのは、もともとストレスではあったのだ。

しかし、理はそういったストレスを認識するのが鈍い性質であったから、ただ淡々と日々を過ごしていた。

「理ちゃん」

黙々と歩いていると、自分の名を呼ばれた気がした。

辺りを見回すと、公園から青年が走ってきた。眼鏡をかけていないが、それはあの喫茶店のゼンだった。

「こんにちは」

挨拶をし立ち止まると、猫はパーカーの中を登り始めた。

少しパーカーの前を空けてやると、猫はひよこりと顔を出した。

「わ〜かわいい〜」

ゼンはすっかり猫に目を奪われていた。

「猫、好きなんですか」

青年は思い切り頷いた。

「触りますか？」

「えっいいの？」

と尋ねつつ、手はすでにこちらへ伸びていた。

理は、しがみつく猫をそっと離し、ゼンの方へ差し出した。

ゼンは恐る恐るのひらにのせて、指の腹で頭をなげた。

顔が、とろけている。いつもの威力のある笑顔ではなく、すっかり参ってしまった目尻もさがりまくりの笑顔である。口元もゆるみっぱなしだ。

「かわいいなあ・・・ちっちゃいなあ・・・」

ゼンがしみじみ言うのに、理はついふきだしてしまう。

しかし、ゼンはすっかり猫に夢中だった。

「いいなあ、俺も猫ほしいあ……」

うっとりと言うのに、理はつい口を開いていた。

「飼いますか？」

「え？」

「この猫」

ゼンが、長い睫を大きく一回、またたかせた。

「理ちゃんの猫じゃないの」

「飼いたかつたんですけど、父が猫アレルギーで」

苦々しく思い出す。

折れる気などなかったのに、ゼンがあまりに猫をかわいがるから、いいかと思っただのだ。

家の条件などこまごまとしたところを伺い、猫がもう少し大きくなつてから渡す約束をした。

明日から、父はまた2週間ほど撮影で帰ってこないときいていた。連絡先を交換する。

青年のフルネームは松谷ゼンと言った。名前がカタカナなんて珍しいな、と理は思った。

家に帰ると、すぐに猫を自分の部屋に入れた。

「おかえりなさい」

奥のリビングから、糸田が顔を見せた。ワイシャツを腕まくりして、フローリング用のシートモップを片手にしている。

「傍に行かなければ大丈夫だと思うので、理さんのお部屋の中で飼えばいいと思いますよ」

しかし、理はふるりとかぶりを振った。

「もう、貰ってくれる人、見つけたから」

糸田が眉を上げた。そして、父のこもる寝室を見たが、そちらからは何の反応もなかった。

「いいんですか？」

小声で糸田が問う。

理は苦笑した。

「いいんです」

猫の目薬もいらなくなり、缶詰を食べるようになり、トイレも覚えた頃に、理は猫をゼンに届けに行った。

名前に迷っている間に譲ることになったので、結局猫には名前をつけていなかった。

電車で20分ほどの、郊外のゼンの最寄駅で猫を渡す。

よろしく願います、と言って、理は足早にとつてかえす。

ゼンは、理が自分の家まで届けに来ると思っていたようだったが、理はかぶりを振った。

心は決めていたはずだったが、いざとなるゼンの手から猫を奪ってしまいそうで、早く立ち去りたかったのだ。

「いつでも、見においでね」

その声が聞こえた。理は振り返ってお辞儀をした。

理、激怒する

桜が咲いて、いそいで散った。

理は今年から高校生になった。

高等部からの外部入学者が、特に理の在籍する特進クラスは半数以上を占めるため、新鮮な気持ちになった。

そして、家でも変化があった。

「おかえりなさい」

につこり笑って台所で迎えるのはサナエという女性。派手な顔立ちの美人だ。

台所が似合わない。実際料理はあまりうまくない。けれど、家に来てきて料理をしていく。掃除洗濯は、理が学校に行く前に済ませていくからか、手を触れた形跡はない。

やってくるのは午前中、理がでかけてから。

帰るのは夜、理が帰ってから。

最初に、理が学校から帰ってサナエが台所で料理をしていたときは非常に驚いた。藤井が在宅していたので、泥棒だとは思わなかったが、謎だった。

問いたださそうとする前に、「いつもお父さんにはお世話になっているの。カレー作ったから食べてね」と紅い唇を引き上げ、微笑まれた。何から聞こうか迷っている間に、サナエは流れるように帰ってしまった。

代わりにソファで寝転がっていた藤井に問うと、藤井は理のほうを見もせず、「ともだち」と答えた。

「なんであなたのもとであなたが人の家で料理をしていくんですか」

「あいつが勝手にやりはじめたんだよ」

何を聞いてもそんな調子で、のれんに腕押し。まったく要領を得ない。

サナエもサナエで、藤井との関係を聞こうにもにつきり微笑んで「お父さんに聞いてちょうだい」と言うだけだ。

「わたしのことは気にしないで。好きでしてるだけだから。理ちゃんも学生さんなんだから、せめてわたしが家にいるときくらいはゆつくり勉強してくれていいのよ」

理は、はじめ家政婦の方かと思った。しかし、藤井は首を振った。たしかに、時々泊まっていくこともあるようだ。帰ってきてサナエがいるとなんとなく気まずく、自室で勉強をしているが、気付けば遅くまでサナエの声がすることがある。けれども、そんなときも朝にはすでにいない。

藤井の恋人なのかと思った。

なんとなく藤井に尋ねづらく理は糸田に問うた。しかし、一笑に付された。

「藤井に特定の女性はいません」

ではどういふ関係か問うと、「ともだちっていうならそうなんですようね」とはぐらかされただけだった。

糸田は最終的に藤井の味方であり、けして理の味方ではないことを実感する。

泊まっているのだから、恋人云々は別として、男女の仲なのだと思っただけだし支えないだろう。見たくもないのであまり見ないようにしているが、藤井はサナエに気安く触れることもある。サナエも藤井が好きなので、二人でいるとまるでじゃれあっているように見える。

不安がつづる。自分の大事な家が、藤井の出現から他者に侵食されていく。ただでさえ、いままで母と二人で助け合って生活していたところで、急激に環境が変化していったというのに。

そんな中で、唯一心を暖めるのは、ゼンが送ってくれる猫 ユキと名づけたらしいーの画像だった。

最初るときから予感してはいたが、ゼンはユキを文字通り猫かわいがりしていた。

そのかわいさを誰かに見せたい一心でいろんな人に送りつけていたらしい。

しかし、律儀に返事をするのは理くらいだったので、そのうち理とゼンはメル友のようになってしまった。

普段、野人もかくやといった何をするかわからない藤井と暮らしている、晃やゼンは至極まつとうで落ち着ける相手に思えた。

学校の友達とも違う、気を張らずに話せる相手。

梅雨のころには、家にまで遊びに行った。猫を見るためだが、人の家に遊びに言ったのが久しぶりだったので理は少し緊張した。

しかし、ゼンはいつもどおりだったので、あっという間に緊張がとけた。ユキは理のことを覚えていないようだったが、すぐに懐いて、理の膝の上で眠っていた。

静かで、きれいな家。整った秩序。

「この家の子になりたいな」とつい呟くと、ゼンは軽い調子で「なったらいいよ」と言った。

ゼンのそういう、軽く飄々としたところに母の面影を見出し、理はついそのことを口にしてしまった。ゼンはとくにひきもせず、受け入れてくれた。それに、一緒にいたら楽しいといってくれた。理のことを、好きだから楽しいと言った。理は、素直に嬉しかった。

ひさしぶりに好きだよと言われた。

母はしょっちゅう理のことをかわいひ好きだと愛情を素直に表してくれたものだったが、そういう直裁なところもゼンは母に似ているのだが、藤井は何を考えているかまったくわからない。糸田もしかりだ。ほんとうに、この家で暮らせたらどんなにかいいだろうと思った。

けれど、理はいまでは、母と暮らしたあの家を守りたいと思っていた。

もはや意地だ。珠子が帰ってきてても、一緒に暮らすことは一旦白紙に戻してもらおうと思う。理の中では、これは譲れない戦いだっ

た。

その日の夕方、ゼンの家から自宅戻ると、サナエが炒め物を作っていた。

「おかえりなさい。もうすぐごはんができるから」
しかし、理はまっすぐサナエのところに行った。

「お話があります」
サナエは少し目をそらした。

「じゃあ、ご飯を食べてから」
理は頷いて、お皿や茶碗、味噌汁椀を並べた。

藤井は出かけているので、サナエと二人きりだ。
「いただきます」

手を合わせ、にんじんが固いままの野菜炒めをもくもくと食べ、早々と二人は片付けた。手早く理が洗い物をすませていると、サナエが出て行くところだった。

理は急いで手をふいて、玄関へかけつけた。

「お話があるって、言いましたよね？」

「えっと、急いでて」

「ご飯を食べてからって、言いましたよね？」

「急用が・・・」

言いつつ、ずっと一緒にいて携帯も見ておらず、急用の連絡が入った隙がないことは理にもお見通しだと思ったのか、サナエは困ったように笑った。

思えば、ずっとそうだったのだ。

勝手に藤井の恋人だと思い、なんとなくの気まずさでサナエともあまり話をしていなかったが、サナエの方でも、それほど理と積極

的に話をしようとはしていなかったのだ。

「ここがいいです」

玄関先で、理はサナエの来ていたワンピースの袖を捕まえた。

「サナエさんは、藤井の恋人なんですか？」

「・・・ちがうわ」

「じゃあなんで、うちにきてたまに家事をしていくんですか？」

サナエは、諦めたようにため息をついた。

そして、着ていたワンピースを捲り上げて脱いだ。

ブラジャーとパンツだけの姿になって、はじめて理にもわかった。

肌を覆う青黒い痣。一つや二つではない。おなかや腿など、見えないところに執拗についた痣。

理は、目を離せなかった。

吸った息が痛かった。

サナエはワンピースを着た。

「旦那から、逃げてるの。最近、接近禁止令も取れたんだけど、しつこくて。ともだちの家を転々としてるのよ」

「じゃあ、わたしのうちも、そのひとつ？」

「藤井さんは本当は大先輩なんですけど、社長と懇意だから、事情を聞いてかくまってもいいって。わたしも女優なのよ。あんまり知られていないけど」

理は目をまたたかせた。

「本当に、藤井さんとは貴方が心配するようなことはないわ。仲良くさせてもらっているけど、男女の仲ではないし。貴方のお母さんになるようなこともない。わたしもう子持ちだしね。いまは実家に預けてるけど。・・・いやだったでしょうね、お母さんを亡くしたばかりで、ほかの女が家にいたら」

「というかそもそもこの家は理と母の家で、藤井の家ではないのだから、そんなことをいちいち言うのは面倒なので黙っていた。」

「内緒にしるよって、言われてたんだけど、藤井さんがあんまり不

器用だから、黙ってられなくなっちゃったわ」

サナエはそう言つと、つかつかと寝室に入り、クローゼットを開けた。

そこには、たくさんのお菓子、ぬいぐるみ、が詰まっていた。

北海道土産、各地のお土産に、ユキにも似た猫のぬいぐるみ。きれいに包装されたプレゼント。

「糸田さんからきいたの。藤井さんは、娘さんにお土産を買っていても渡せないで押入れにしまつてばっかりなんだつて。本当だつたのね」

ふふ、と可笑しそうに笑つた。

「今回だつて、わたしをかくまうよりも、理ちゃんを家事から解放させてあげたかつたんじゃないかしらね。お礼の代わりに晩飯作つて理ちゃんに食べさせとけつて、藤井さんから言われたのよ。実際、理ちゃんは家事万能で、かえつて迷惑だつたかもしれないけど」

サナエは自嘲気味に笑つた。

しかし、理は、一瞬思考停止していた。

それが本当なら、いままでの自分のストレスは一体なんだつたのだ。

事情を最初から教えてもらえれば、こんなに苛立たずに済んだのに。

理は、クローゼットを閉めた。

そのとき、玄関が開いて、鼻歌を歌いながらほろ酔いの藤井が帰つてきた。背後には糸田。

「おお、なんだ二人して。オレの部屋になにか用か？」

理はずかずかと歩き、藤井の前で足を止めた。

「なんだよ」

言いきつた瞬間、藤井の頬に理の拳がめり込んだ。

酔っていたこともあるが、まともにくらつた藤井はふらりとよるけ、糸田に支えられる。

「つてめ、なにしやる」

しかし理はあくまで仁王立ちで拳を握り締めている。人をなぐった痛みには拳はしびれている。

「あなたは、言葉が足りなすぎる」

静かに低く言うつと、藤井は目をぱちくりとまたたかせた。

「わたしは、ずっと、いやだった。知らない女の人が家に上がりこんで、どんどんお母さんのいた跡がなくなって、わたしの居場所もなくなって、この家がわたしの家じゃなくなるような気がした。わたしとお母さんの家なのに・・・！」

言いながら、目頭が熱くなってきた。

涙が、こぼれる

「わたしはずつと家事をしてきたし、家事が好きだった。勉強の息抜きにもなっていた。それなのに、蚊帳の外で事情もわからず、ただ不満を抱えてるだけの方がどれだけストレスになってたと思いますか？ そんなことも想像できないで、役者が聞いて呆れます。人の気持ちになって、演じるのが仕事でしょう」

自分でも無茶を言っていることはわかった。けれど、止まらない。涙腺が壊れたように、理の目からとめどなく涙が零れ落ちた。

一度泣くと、とめどない。

理は目元を押さえて、きつと藤井と糸田を睨み上げ、自分の部屋に入り込んだ。鍵をかけて、そして布団をかぶって思い切り泣いた。何度かノックされていたようだが、鍵を開けることは無かった。そして、いつしか理は、眠り込んでしまっていた。

気付けば、窓の外は薄青に染まっていた。

もう夏に近く、朝は早くから明るくなる。いまは朝4時だった。

(のど、かわいた)

鍵を開け、ドアを開ける。はだしで廊下を歩いていくと、カーテンのひかれたくらい居間で光が明滅していた。

そつと覗くと、藤井が、テレビを見ていた。
スーツを着た男達が銃を撃ち合ったり逃げたり撃たれたりしている。

それに見入る藤井の横顔は、いつものがさつさやだらしなさはなく、驚のように鋭かった。

ふいに、気配に気付いたのか藤井が理を見た。

「なんだお前、ひどい顔だぞ」

そういつてにやりと笑い、台所に行つて冷蔵庫から牛乳を出した。
「そこに、座つてろ」

顎でしゃくられ、理はおとなしくテレビの前のソファに座つた。

途中からなので、話はまったくわからないし、藤井も出ていないようだ。理は役者に疎いので、知っている役者は出ていない。

少しして、湯気の立つマグカップを置かれた。中には、とろりとしたココア。もう夏だし、正直水が飲みたい、と理は思ったが、せつかく作つてくれたものなので、素直に口にした。

温かい飲み物が喉を通り過ぎ、お腹の中にたまる。体の内側から、気持ちが悪く着く

「うめえだろ」

口角を上げて、藤井は笑つた。自分はビールを飲んでいる。
飲んで帰ってきて、又飲むのかと理は内心眉をひそめる。

「あいつも、好きだった」

意外な言葉に、理は目を上げた。

(知ってる)

そう、理は思った。

ずっと一緒にいたのだ。

藤井は、テレビの画面を見ていた。

それから、理が飲み終わるまで、ずっと言葉はなかった。

ただ、理が飲み終わって立ち上がったときに、はじめて「悪かったな」と言つた。

あくまで、テレビの画面から目は離さずに。

理はため息をついたが、すぐに微笑んで「ごちそうさまでした」と返した。

ゼン、自覚する

(あなたにのろいを)

絹糸のように細く美しく、けれどけして切れない声が耳の裏にそれを編みこんだ。

暗闇に、ほのかな光を集めて浮かぶあがる白い肌。

人形のようにつつくしいが、その肌は触ればたしかな血潮をもつて、指を跳ね返した。

そこにはかたいようなのに、そのうちはうるおいをみたしてつつみこむ。

眼の裏をよぎる上限の月。

それきり世界は暗転する。

冷たい指が体をさぐり、ひとつひとついていねいに、一点の昂ぶりへ向けて、導いていった。

ゼンはあまり夢を見ない。睡眠時間も少なくて済むほうだ。

寝つきが悪いし、ようやく寝入れれば寝起きも悪い。

あまり見ない夢を見てしまったときなどは、最悪だ。

「夢はいつでも見ているらしいわよ。ただ、自分が忘れてるだけ」
あるとき、晃にそう言われたことがあった。たしかにそうなのかもしれない。

もともと寝起きが悪いのは、忘れた夢の後味のせいなのか。

覚えているうちに、よく見るのは子供のころの夢だ。

祖母も晃も、父親も語らなかつたが、自分に残る傷跡や近所の大

人の噂話などから自分がここに来る以前に、虐待を受けていたことを知った。5歳以前のことであるし、ほとんど覚えていない。ただ、思い出そうとすると、母のぼんやりとした面影と、鼻の奥に痛みを感じた。

母はうつくしいひとだったと、皆が言う。

けれども父の女癖の悪さにまだ3歳のゼンを連れて家を出、実家にも戻らずに北の方の盛り場で働いていた。

ゼンはろくに育児もされず、ほとんど放って置かれたらしい。

母が薬物の過剰摂取で亡くなって、はじめてゼンは外に出ることが出来た。

そして祖母と、父、そして高校生だった晁の住むこの家に戻ってきた。

最初はほとんど喋らなかつたということだ。

がりがりに痩せていた。ほとんどご飯も食べていなかったようだ。もし母が亡くならなかつたなら、ゼンが死んでいただろうと、ゼンが中学生のころ祖母が晁に語っていた。ほとんど覚えていなかったゼンは、そのころはもうすっかりふくふくと丸っこく成長し、反して背は伸びるのが遅く大福のようだった。そのころの自分が、ゼンはけして嫌いではない。祖母の愛情に包まれていた、安心しきつた時代だ。

その後、祖母は臥せりがちになり、ゼンに家事を仕込むようになった。その指導は厳しく、ゼンはそれでも祖母を助けるために一所懸命覚えた。

そうして、すっかり一人前に家事をこなせるようになったのを見届けるように、祖母はひっそりと亡くなった。とくに持病があったわけではない。90歳近い高齢だった。

(そういえば、おばあちゃんにはアレルギーがでなかつた)

ほとんど唯一といってもいい存在だった。

祖母以外に、触れても平気な女性はいままでいない。

引き取られて、気がつけばもうすでに女性にアレルギーが発現し

ていた。

虐待が原因ではないか、と言われていた。

しかし、ゼン自身でも覚えていないのだから、直しようもない。つらかったことも、ほとんど覚えていないのだ。

祖母以外には、あらゆる年齢の女性に対して、アレルギーが発現した。

どんなにきれいに女装していても、男性ならば発現しなかった。性別探知機だと女装家の晃の友人に言われるしまつである。

アレルギーが出ることもあって、女性には基本的に身構えがちで必要以上に仲良くなるうとはしない。密着する満員電車を避けるために、移動は基本的にバイクであった。

それで25歳まで過ごしてきた。

友人たちは女性のアレルギーということを理解はしているが、原因までは話していないので、心底不思議でならないという風だし、顔立ちが整っていて女性に好かれやすいため、勿体ないと口々に言われる。宝の持ち腐れだと。

丸々太っていたゼンは、中学卒業とともに縦に伸び始め、気付いたら180cmをとうに越していた。

高校時代にはたまたま家から一番近い高校を選んだところ荒くれものたちが多く集う学校であったために日々を生き抜くために自然に体も絞れていったし、力も強くなり、自分の身くらいは自分で守れるようになった。

しかし、自分の外身がどんどん立派になっていくのに反して、自身は子供の頃からあまり変わらなかった。

律儀に家事をこなし、学校にかよって料理の腕を磨き、なんだかんだあった拳句に晃の店の客商売で完璧な外面を身につけてからも、なんとなく引け目をかんじていたことといえば、それは恋である。

ゼンはいままで恋というものをしたことがなかった。

映画やドラマや漫画など頻繁に目にするし、友人たちや晃がそれ

について悩んでいるのも知ってはいるが、まったく気持ちが悪くならなかった。晃や友達を好きなのと、どう違うのだろうと思っていた。もともとゼンは人懐こく、それでいて好きになった人間にはことんずつと好きという犬のような性質があった。

ただ慕う。

「そういうことじゃないのよね・・・そういうものいいと思うけど」

酔っ払いながら晃が言ったことを思い出す。高校時代にみんなにバカにされて悔しく、恋とはいったいなんなのか、ともだちを好きなのとどう違うのかと聞いたときの返答である。

「ほんとよく言われることだけど、気付いたら落ちているのよね。気付いたときにはもう遅いって言うか。もう離れがたくて、ずっと一緒にいたくて、くっついていたくなるの」

磁石じゃないんだから、と呆れ気味にゼンが呟くと、晃はもつともげに頷いた。

「昔からよく言われることよね。惹かれ会う二人の間の磁力っていうか、S極とN極のようについていうか・・・」

その辺りで、晃のろれつがややしくなってきたので、ゼンはもうその場を離れようとした。

しかし、晃に服の裾を掴まれて引き戻された。

「でもね、恋をするばかりが人間じゃないのよ。恋をするために生まれてきたわけじゃないと昔の人も言ってるわ」

じゃあなんのために生まれてきたのか、と問うても晃にはわからないだろう。

(じゃあなんのために生きているのか)

のうぼうが正しいかもしれない、とゼンは悪夢の余韻にひたる。

母の死と引き換えに自分が助かったことが、なんの意味になるのかと。

そもそもはそういった状態が引き起こされないことが大事だったのだと、母が悪いのだと、皆が口をそろえて言うのは知っている。

けれど、ほとんど虐待の記憶も死に掛けたという実感もないゼンにとつては、ただの事実として、母の死がなければ自分が見つかることもなく、そのまま死んでいただろうという事実だけが、前提として目の前に横たわり、けして離れようとはしないのだ。

日差しは苛烈に肌を焼く。

バイクで通勤していると、日焼け止めを塗ってもすぐに火傷したように赤くなる。だから、長袖は必須だったが、いかんせん梅雨も明けた夏の最中では暑い。

(オレも晃みたいにきれいに日焼けできればいいのになあ・・・)と毎年思うことを今年も思いながら、汗だけで控え室に着いた。すでに晃は事務室にこもって仕事をしている。

汗をぬぐい、ワイシャツと黒いズボン、腰周りだけのカフェエプロンに着替えると、気持ちが落ち着く。

眼鏡は、ここでかける。

本当は、視力は悪くない。ただ、自分を営業用に持つていくための道具だ。

最初に接客がうまくできなかったときに、晃にむりやりつけられた。

『あなたはゼンじゃない。ただの一店員』

そう、目を覗き込んで言われると、すっと楽になったものだった。

黒縁の眼鏡はそうして、自分を無くす効果がある。

けれど最近、うまくいかないときがある。

「こんにちは」

理が、微笑んでカウンターの前に立っていた。今日は土曜日。学校は休みなのだろう。私服はいつもシンプルで、今日はTシャツとジーンズだった。

理は吊り目で、三白眼なので一見して鋭い印象を受けるが、表情

は柔らかだ。そのギャップに、いつもゼンは見入ってしまう。

精一杯いつもの仕事中の気持ちを出して、笑顔を作ろうとするが、なんだかうまくいかない。

笑顔は笑顔なのだが。

「にやけてるわよ」

たまたま厨房にいた晃につつかれ、ゼンはどきりとする。

カウンターの前で珈琲とトーストを待つ理は少し微笑んで、店の外を見ている。

光を受けるその滑らかな頬の稜線だとか。

「お待たせしました」

注文のものが載ったトレイやおつりを受け取るときに、手が触れないように気をつける、さりげなく落ち着いた動作とか。

（変に意識してるな、俺）

それはもう一ヶ月も前のこと、理が家に遊びに来て、軽く好きだと言ってしまった後からだった。

自分から軽い気持ちで言っておいて、その好きという言葉に心臓が重くうめいた。

恥ずかしかったのか、と思う。たしかにそれは本気だったけれども、本気だからこそ恥ずかしい。

理は、ゼンについて本気のことを軽く言ってくつがえさないと行って笑っていたが、自分はそんなに飄々とした人間ではない。

（本当の、本気じゃなかったからなんだ）

いまではそれがわかる。

営業用の上つ面の笑顔や、お客様を不快にさせず、必要以上に近寄らせないための耳障りのよい言葉が、いかに心無いものであったか。それが自分なりの必死だったとはいえ。

（本当の、本気で好きだというのは、じゃあどういう）

そこまで考えると、いつも脳が追いつかず感情がヒートアップして動かなくなつた。

そうして、いままでのどおりに特になんの実のある会話もなく理

は去ってしまう。

去った後、ゼンはもつと何か話せたんじゃないかといつも後悔するのだ。

そして、身軽に理と話をしている晁を恨めしげに見たりする。逆恨みもいいところである。

ユキの写真も、意識してから送りづらくなった。

自分が落ち着いてきたと言つのもあるが、理にどう思われるか、いままでどう思われていただろうかと考えると、恥ずかしさに気が遠くなる。

（猫について一日2通以上メールしてくる男って、気持ち悪いよね！）

そう自分でもいささか冷静になり自覚したためである。

そうして煩悶しつつ、日々は過ぎてもう8月になっていた。

理は学校の課外授業があるのだということで、週に2日くらいの割合で現れた。

腕に校章の刺繍のついたワイシャツと、膝上の丈のチェックのプリーツスカートの上に、たいてい群青のベストを羽織っている。

髪は相変わらず耳よりも少し下くらいの短さで、延びてきた今は耳にかけていることもある。

そうすると、少し大人っぽく見えた。意思の強そうな釣り目が、猫のように静かにゆらめいて、本の文字を追う様子や、ゼンを見上げておもしろげに細められる様子は、いまままでおり幼さをかんじられるのとアンバランスで、目が離せない気がした。

「ゼンさん！」

お世話になつた先輩の屋台を見に来たお祭りの雑踏の中だった。できるかぎり人にふれないように注意して歩いてきたゼンは、声をかけられて振り返った。

同じように先輩に呼ばれた知人がいてもおかしくはなかった。けれど、自分をさん付けで呼ぶのはそう多くない。

雑踏を掻き分けて現れたのは、藍色に白い花が散った浴衣。

「理ちゃん・・・？」

一定の距離で理は手招きして、人気のない脇道にそれた。

「偶然だね」

つい緩む口元を、微笑みでごまかした。

理もにこりと笑った。

「本当ですね」

つい二人でにこにここと見合ってしまい、ゼンははたと恥ずかしくなって目をそらした。

「でも、こんな人込みにできて大丈夫なんですか？ このお祭りって、結構混むことで有名ならしいですよね」

大使館の多い土地柄のため、各国の屋台が出たりして人気の高いお祭りなのである。

ゼンはしかたなげに笑った。

「そうなんだ・・・。先輩が屋台を出すって言うから、ちょっと見ようと思ったんだけど、まさかこんなに混んでるなんて知らなくていまのところ、そんなにひどいことはないけど」

「よかった」

「理ちゃんは・・・」

ひとりできたの、と聞きそうになってそんなわけはないだろうと思いなおした。

浴衣まで着て、よく見れば唇もほのかに色づいている。女性の化粧にはうとかったが、それでもいつもと違う、ということくらいわかる。

「父の友人ときたんですけど、はぐれてしまっ」

こまったように笑った。

「でも、ゼンさんと会えて、ほっとしました」

どっと、急に汗が噴出す気がした。

顔が熱い。心臓が、高鳴る。まるでアレルギーのときのようなのだが、息苦しくは無い。むしろ、ずっとこうしていたいような、すぐにも逃げ出したいような気がした。

「俺も、ほっとした」

かろうじてそれだけ言うと、理はおかしそうに笑う。

「大人なのに」

「あのね、俺は見た目ほど大人じゃないよ」
胸を張る。

「偉そうに言うことじゃないですよね」

言いながら、理は鈴を転がすように笑う。

(ひさしぶりにこうやって、話す気がする)

自分が意識していて、うまく話せずにいたのが、こうして二人になったとたん、軽口だったたけるようになる。

理は礼儀正しいようできて、意外にずばりと切り込んでくるので話していて楽しい。

「なんか、おかしいんですね」

「え？」

問い返すと、ちらりと理はゼンを見上げた。

「ゼンさんと話していると、落ち着くのおもしろいっていつか。学校の友達よりも、なんだか素で話せるというか」

一瞬、胸が震えた。

涙が出るかと思った。

ただ理は思ったままを言っただけなのに、それだけがこんなに心を揺らすなんておかしい。

(絶対、俺はいまおかしい)

「おっ俺も、理ちゃんと話していると楽しい、よ」

かなり間を空けて、それだけをゼンは言った。

理は一瞬目を丸くして、おかしそうに、また笑った。

「なんだか告白みたいですね」

そう言う理の方が、ただ軽やかに、ゼンには感じられた。

右往左往する自分なんて遠いところで、涼やかに笑っているような。ひたすら高みにいるような。自分はその足元にもたどり着けない気がした。

近いようで、とても遠いような気がした。

少し寂しくなった。

理がふと真顔になって、ゼンの顔をのぞきこむ。

口を開きかけたそのとき、理のもっていた巾着が震えた。

「ちょっとすみません」

断って、理は携帯を取り出した。

「うん。ごめんなさい。いま、」

話はじめたとたん、「いた！」と声が聞こえ、大通りから少年がかけよってきた。理よりも少し大きいくらいの、やせてよく陽にやけた少年だった。手足の成長に筋肉などの発達が追いついていない、曖昧な年頃。

少年は理をかばうようにゼンの前に立ち、睨んだ。

「こいつに何か用かよ」

「陸くん、」

理の呼びかけを無視した。

「警察呼ぶぞ」

ゼンは少し傷ついて、しかし10も年の差のある女の子とこんな脇道で話していたら、怪しく思われてしかるべきだろうと思った。

それよりも、理をこいつと呼ぶ少年の存在のほうに、ゼンは傷ついていた。

「陸くん、話を聞いて」

理はずいと陸とゼンの間にふたたび割り込んだ。

「ゼンさんも、失礼しました。こちらは宮野陸くん、父の友人のお子さんです。陸くん、こちらの方は近所の喫茶店で働いている松谷ゼンさん」

はじめまして、とゼンはとっさに微笑んだが、陸はただ胡散臭げにじろりと見ただけだった。

「行こうぜ。サナエがすげえ心配してる」
そう言って、ぐいと強引に理の手を引いた。
「ゼンさん、またお店にうかがいますね」

つかまれているいないほうの手を振って、理は雑踏の中に消えて言った。

(あの、手を)

優しく女性や、猫の背をなせた細い指に触れられることが、ゼンにはひどく、うらやましかった。

知りえないはずの、温もりを知っている。
肉体の歓びも。

この年齢であればとうに知っていておかしくはない感覚を、ゼン
はもちろん一度も経験した記憶はない。

女性に触れる。深くまじわる。想像もできないのに、それでも頭
のどこかではそれを知っている気がして、その感覚にまた吐きそう
になる。

自家中毒。

少しでも、自分のそういった感覚がよびさまれそうになると、そ
れはいつも吐き気を齎した。

理と祭りで出会った日の夜、ゼンは家に帰って吐いた。

理と別れてから、気分が悪くなり、結局先輩の屋台には行かずに
帰った。

思春期を迎え、周囲で女性の裸体が映った扇情的な写真誌などが
出回るようになり、友人の集いでそういったビデオなどを見る機会
があるたびに、ゼンはひそかに吐き気をこらえていた。

触れないだけでなく、性的な事象には自覚する前に吐き気が先に
来た。

周囲の友人には、つとめて感づかれないように振舞った。けれど、

勘のいい数人には気付かれていた。

ゼンのいる場で、そういったものが目に入る頻度が、不自然でない程度に減ったことから、ゼンも気付いた。

（俺は健康ではないのかもしれない）

潔癖、というのとは違う。

すでに知っていて、それを嫌悪する気持ちはなかった。

なぜかそう、ゼンは確信していた。

けれどその理由については、思い出せなかったのだった。

ただときどき夢に見る、胸苦しい悪夢が、それを思い出そうとするときの感覚と、吐き気はいつも同じだった。

（問題は）

なぜ今日、その吐き気を覚えたかということだ。

性的なものなど見ていないのに。

ゼンは、布団の中で目をつむった。

本当は知っていた。

自分でも口にした。

それが本当になったただけの話だ。

そう自覚すると、不思議と落ち着いて、ゆっくりと眠りの淵に引き込まれていった。

ゼン、治る？

お盆休みを経て、8月も後半に入った。しかし、まだまだ暑さが弱まる気配はない。

店の中は空調がきいて涼しいが、店の中と外の気温差と快適さのバランスに晁は苦慮しているようだった。

あの祭りの日から、今日でちょうど一週間目。土曜日の夕方だった。ちらほらいた客が途切れて、いまは誰もいない。

理は、あれから現れていない。

祭りの日のうちに、非礼を詫びるメールが届いた。翌朝返事をしたが、それ以降特に用事もなく、向こうからの連絡もない。

もともと、猫のことがなければ連絡をとることもなかったのだ。

もしこの気持ちを理が知ったら、理の父の友人の子供だという少年あのように、ゼンを不審なものだと、醜いものだと見なすだろうか。

少女を愛する性癖の人間だと疑念を抱くだろうか。距離を置くだろうか。

(俺、けっこう後ろ向きだったんだな)

仕事中だというのに気持ちが暗くなり、考えないようにするが考えてしまう。

理と自分の年の差は10年。夏前に誕生日を迎えた理は、2月生まれの子とまではいまは9歳差だが。

(俺が高校生のとき、幼稚園・・・)

考えると、ますます落ち込んだ。

けれど、ゼンは少女一般が好きなのではない。むしろ苦手だ。

虐待は覚えていないし、アレルギーを差し引いても、祖母以外の女性にはあまりいい思い出がない。自我ばかりが発達したいびつな存在に見える。

それはゼンが女性性を強くアピールされやすいからであり、また女運も悪すぎるのだと晃には指摘されたが、どうしても女性は苦手だし、自分から触ろうとも思えない。

性的なことは考える前に吐き気がする。

けれど理には

(撫でられない)

以前、ゼンに詰め寄って泣き出した女性をあやす姿をみたときから、ずっとそう思っていたのだ。

触られただけで発疹痒み動悸息切れの現状では夢のまた夢といった話ではあるが。

「こんにちは」

急に眼前に理の顔があつて、ゼンは心臓が止まるかと思った。

その様子を見て、理は笑う。

「仕事中にぼんやりしちゃ、だめですよ」

「ぼんやりなんかしてないよ」

「わたしが入ってきたのに、気付かなかったでしょう。いつもはドアが開いた瞬間にいらっしやいませって言うのに」

「ちよつと考え事」

「ふふ」

信じていない。理はメニューを見て、でも結局いつものとおりカフェオレを頼んだ。

「この間は、すみませんでした」

カフェオレを作るゼンに、理は少しうつむいて言った。

「陸くんが、失礼なことを言って」

「気にしないで」

陸の懸念どおりなのだ。たぶん。けれど、それは言えなかった。理にきらわれたくなかった。

つとめて明るく笑った。

「俺のアレルギーのこととか、話せばみんな安心するでしょ」
しかし理はきょとんとした。

「話してませんよそんなこと。だって、病気って個人情報でしょう?。」

「そ、そうなの?」

「というか人道的にもですね。わたしはたまたま知っただけであって、ひとのことを他の人にいいふらすのってよくないでしょう」

(潔癖だなあ)

ゼンはべつに構わなかったのだが、というかむしろ疑惑が晴れるのでそのほうがよかったのだが、その気遣いが嬉しくもあった。

自然に顔が緩む。

「あら、理ちゃん。今日のご飯の仕度はいいの?」

事務室から出てきた晃がゼンの背後から声をかけた。

「今日は食べてくるって言ってたので」

「じゃ、よかつたらうちにご飯食べにこない? さっき友達から蟹を貰ったんだけど、二人じゃ食べきれないし」

「でも、お店が終わるのって・・・」

「土曜は18時閉店よ」

あと30分ほどだった。

そういえば理は土曜はあまり来店しないな、とゼンは思い出していた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

逡巡した後、理は答えた。

じゃあお店が終わったら一緒に行きましょうと晃は行った。

ゼンは心の中で快哉をあげずに入られなかった。

電車よりも早く、バイクのゼンはひとり家に着いた。

ユキにご飯をあげ、鍋の仕度をしていると、電車の晃と理がたどりついた。

「もう少しでできるから、居間のテーブル拭いておいて」

晃に言ったつもりだったが、気がつくとなりがコンロの前に立つゼンの隣にいたので、少し驚く。

「台拭き、どれですか？」

「あれ？晃は？」

「汗かいたからお風呂に入るって」

「お客様がいるっていうのに自由だなあ」

呆れつつ、すぐ近くに理がいることにごきまぎしながら水切り籠の近くにあった布巾を渡した。

「おいしそう」

鍋を覗き込んで理が言う。

「俺が作るものはなんだっておいしいよ」

胸を張ってというと、理は笑った。

「蟹ですしね」

「蟹のおかげだけじゃないってば」

まあ、蟹はおいしいけどさ、と呟く。理は笑いながら居間へ向かった。

満腹になったはずのユキがゼンの足元にまとわり着いたので、食べるのか疑問に思いつつも、蟹を少し分ける。

「猫も蟹、食べるのね」

頭を拭きながら、湯上りの晃が現れた。Tシャツにスウェットのシンプルな格好だ。

「自分だけさっぱりして。理ちゃんに手伝わせちゃだめだろ」

「あら、えらそう」

ふんと鼻を鳴らして、晃は居間へ向かった。きやきやと楽しげに話す声がある。そうやってみると少し寂しい。

だいたいもともと理は晃とのほうが仲がよかった気がする、とゼンはまた寂しくなってみる。

またぼんやりして拭きこぼれそうになったので、あわてて火を止めた。

食卓は蟹すきと作り置きのかんぴら、オクラともやしナムルだ

った。

「あ、ほんとにおいしい」

口にした理が言うのに、晃がビールのグラスを傾けながら笑った。「偉そうなこと言ってたもんね」

「聞いてたの」

「聞こえてくるわよ。自分の庭だとまあ、途端に偉そうになるんだから、内弁慶つたらないわ」

「うるさいな」

理がくすくす笑った。

いつそう恥ずかしくなつて、ゼンは晃を睨んだが、晃は蟹に夢中だ。

ゼンと晃はふたりともよく食べるほうだ。理はその様子をおもしろそうに見ていた。

食べ終えて、片付けを終えた頃にはもう22時を過ぎていた。

「あら、もうこんな時間。理ちゃん、今日はもう遅いから泊まっていきなさいな」

時計を見上げて晃が言った。

ときどきゼンは晃がなにもかもお見通しなのではないかと思うことがある。

理は眉を下げる。

「さすがにそこまで甘えるわけにはいきません」

「まあ、そうよね。ゲイと女アレルギーとはいつでも私たちも一応男だしね。だめね。つい理ちゃんには親戚の子供みたいない気持ちになっちゃって」

「いえ、ありがとございます。嬉しいです」

堅苦しいようでも、それが理の本心だとゼンは知っていた。たぶん晃も。

「また来てね」

晃が微笑んで玄関まで見送った。

ゼンが駅まで送ることを名乗り出たのだ。晃もついてくるかと思っただ、アルコールのせいで眠いと言っただけで眠る態勢だった。

まだ外は蒸し暑かったが、昼よりは大分ましに思えた。

どこかで、虫の音が聞こえた。

「まだ暑いけど、ここの虫の声をきくと、秋になるんだなって思いますね」

理は気持ち良さそうに夜の風を受けた。

ゼンはいまいに返事をしながら、なんで自分の家はこんなに駅に近いらうと思った。

すぐ駅についてしまう。もう駅舎の光が見える。

「理ちゃん」

つい立ち止まって呼びかける。

「なんですか」

「あのさ」

呼んだ方がいいものの、なにも話すことがない。

否、ほんとうはたくさん話すことがあった。

たくさん聞きたいことがあった。

自分のことをどう思っているのか。

恋とはどんなものか、もう知っているのか。

あの少年は、恋人ではないのか。

けれどこわくて、どれもこれも口に出せなかった。

理はゼンに近づいて、見上げる。

「ここまででいいですよ。もう駅も見えだし」

「いや、駅まで送ってくよ」

そう言いつつも、動けない。

言葉も出ない。

理はじっとゼンを見上げる。

緊張して、冷や汗が出る。Tシャツが張り付いて気持ち悪い。

「大丈夫ですか？顔、真っ白・・・」

といわれた瞬間に、ゼンは猛烈な吐き気を感じ、こらえ切れずせめて道の端に向かって嘔吐した。

「ぜ、ぜんさん?!」

これがいつもの吐き気なのか、緊張が最大限に高まった結果なのかかわからなかった。

胃が痙攣するようで、なかなかおさまらなかった。

(なさけなさすぎる・・・)

泣きたかったがもう吐き気のせいで顔を伝うのが涙なのかなんのかわからなかった。

吐き気がおさまってきたので、近くに公園があったことを思い出してそこで手を洗い、口をすすぐ。

ハンカチを差し出されて、素直に受け取る。

「後で洗って返すから。ていうか買って返すから」
くすりと笑う気配がした。

「大丈夫ですよ」

促されるままに、公園のベンチに座った。

住宅街の狭間の、街灯がひとつきりの公園だ。遊具も、砂山と滑り台しかない。

はあ、とゼンは大きくため息をついた。

「ゼンさんはお酒、飲んでませんでしたし、わたしは平気だし、蟹にあたったわけじゃなさそうですね。単なる食べすぎかな」

理がたんたんと言った。

「ごめん」

「気にしないでください」

理は微笑んだ。

アレルギー云々よりも自分が臭い気がしてゼンは距離を置いて座っていた。だから、かえって顔がよく見えた。街灯の下で。

(全部写真にとっておきたい)

そう思ったが、しかしそんなことをしたら今日の情けなさと恥ずかしさまで同時に思い出されるのだと思った。

「情けないなあ、俺」

ベンチによりかかり、空を見た。街灯越しなので、ただでさえ霞みがちな星はほとんど見えない。

「泣かないでください」

理の声が近い。

「泣いてないよ」

理から顔を背けるように、ベンチの反対側を向いた。

くすりと笑った気配があった。

「ゼンさん、気付いてます？」

言われて、ゼンは気付いた。

背中に触れる温もり。

銀杏形の、手の形。

「わたし、さつきからゼンさんの背中をさすってたんですけど」
どっと、心臓が鳴った。

痒みが訪れるのに備えて身構えるが、それはいつまでも訪れなかった。

おそろおそろ、ゼンは理のほうに向き直った。

背中から温もりが消える。

「湿疹は？」

「出てません」

理はただ穏やかに、微笑んでいた。

ゼンは、いつもとは違う血流のうねりを感じていた。

動悸は激しいのだが、苦しくない。

胸は痛い、呼吸はできる。

ゼンは、そっと手を伸ばし、理の手を自分の手で包んだ。

目をつぶってしばらく待ったが、なんの変化もあらわれなかった。ただ、鼓動だけが、どくどくと耳の裏で鳴った。

もついちど、目をうつすらと開ける。

理が、口角を上げて、ゼンを見上げていた。

その目に映る自分を見た。

「な、おった？」

手を離し、自分の両手を見る。そして、理を。

「やっ」

「やりましたね！」

理が笑う。ゼンは思わず抱きつく。

しかし次の瞬間、後頭部に激しい痛みを感じて、ゼンの意識は暗転した。

理、謝罪に向かう

理は、非常に怒っていた。

思えば昨年末から、いままでの人生の何倍も怒ったり呆れたりしていた。

それはすべて、目の前の男のせいだ。

糸田の運転する車で、藤井が助手席に乗っている。

後部座席から、理は藤井の後頭部を睨んだ。

思えば昨夜は、奇跡的な夜だったのだ。

理が触れても、ゼンの女性アレルギーが、発現しなかった。

一度アレルギーを起こしたところを目の当たりにしているだけに、理は素直に一緒に喜んでいたのだ。

しかし、突如現れた闖入者に、その喜びも一変した。

「人目もはばからずいちゃついているやつらがいるぜと思ったら、お前かよ」

そう、ゼンの後頭部を殴った藤井は言った。

ゼンは衝撃で理によりかかったが、藤井に髪をつかまれ、理から離された。

「あれ、のびてやがる」

藤井は、鼻で笑って手を離れた。支えを失って、ゼンはそのままベンチから下に落ちた。

「ゼンさん!!」

理は駆け寄ってぺちぺちと頬を叩くが、反応がない。

しかし藤井は、ゼンには一瞥もくれず、理の腕を掴んだ。

「寝てるだけだ。ほっとけ」

そう言っつてゼンを地べたに寝かせたまま、理を連れて行くところ。

理は、思い切りその腕を振り払い、ぎつと睨んだ。

「放っておけるわけ、ないでしょう！この野蛮人」

「まったく、返す言葉もないですね」

陰のようにひっそりと糸田が藤井の背後から現れた。

「暴力沙汰は控えてくださいと言ったばかりでしょうが」

糸田は地べたに寝転んでいるゼンの様子を見て、ズボンのポケットから財布を抜き取って免許証を見た。

「なんだ、この近くに住んでるんですね」

連れて行きましょう、と糸田は自分と同じくらいの背丈はある、けしてかるくはないであろうゼンを軽々と肩に担ぎ上げた。

「案内します」

理が糸田を先導しようとして、藤井に引き戻される。

「お前はもう帰れ。遅いから」

理は無言で藤井を睨み、それを無視して、糸田の先に経って歩き出した。

糸田は片方の眉を上げ、藤井を伺うように見たが、藤井は犬を追い払うように、しっしと手を振った。

ついていこうとはしなかった。

しかし、理はそれに気付き、少し行ったところで引き返した。

藤井の腕をぐいと掴む。

「あなたも一緒に来てください。加害者なんですから」

「知るかよ。俺は俺のしたいようにしただけだ」

「素直に理ちゃんを助けたつもりだったんだって言いなさい。話がややこしくなるから」

糸田が割って入った。

「まあ、実際は馬に蹴られてしまったわけですが」

理は一瞬、糸田の言うことがわからず目を瞬かせた。

しかし、あることわざに思い至り、思い切り否定した。

「違います！　そういう関係ではなくて、」

「家に行くくらい親しいんでしょう？」

「親しい、と言ってもそういう意味の親しさではありません」

糸田は表情を変えずに理を見たが、これ以上議論を続けても仕方が無いと思ったのか、ゼンを抱えたのとは逆の手で、藤井の腕を引いた。

「いてえよ」

藤井は文句を言いながらも、とりあえず糸田についていく。

「事情はどうあれ、加害者なんですから、お詫びはきっちり。警察沙汰になったら問題です」

インターホンを鳴らすと、しばらくしてドアが開いた。

「鍵は持っていったはずでしょう」

ゼンだと思い込んでドアを開けた晃は、舞い戻ってきた理、二人の怪しげな男、担がれたゼンを順に見て、目を丸くした。

理は晃の方に歩み寄った。

「ごめんなさい、晃さん。うちの父が、ゼンさんに乱暴を」

糸田はゼンを背負ったまま、ずいと進み出て、片手で晃に名刺を差し出した。

「夜分遅く申し訳ありません。うちの社員がご迷惑をおかけいたしました。こちらの方を失神させてしまったので、お連れしました。どちらに運んだらよろしいですか？」

晃は名刺をまじまじと見て、糸田と、そして背後の藤井を見た。

「藤井、勸・・・さん？」

糸田は猫のように笑った。

「よくご存知ですね」

「ええ。もうご存知もご存知。筋金入りのファンだもの」

少し呆然としながらも、とりあえず玄関先にゼンをおいてもらうように言った。

その間も、晃はまじまじと藤井を見ていた。

その目が、いつもと違う。いつもは、二重まぶたの分少し眠そうに見えるのだが、今日はらんらんと輝いて食い入りそうである。

対して藤井は、いつもの威力がない。少し俯き加減である。

「藤井は非常に早とちりでして、この二人がいらっしやる所を、女性が悪漢に襲われていたのと見間違えたようでした、助けたりもなかったそうなんです」

「申し訳ありません」

藤井はずいと進み出て、丁寧に頭を下げた。

晃はぶんぶんと手を振った。

「大丈夫です。この子、丈夫だけがとりえだから」

それに割り込むように、玄関にゼンを寝かせた糸田が晃へ一歩進み出た。

「また、改めてお詫びに伺います」

「いえ、そんな」

「明日はご在宅でしょうか・・・」

諸々のやりとりを交わして、糸田は明日改めて様子見がてらお詫びに伺う約束を取り付けた。

「俺はいかねえぞ」

帰りの車中で、加害者は助手席でふんぞり返って言った。

糸田は声をにこらせた。

「禍根になってもつまらないですから、そこは我慢してください。」

それに、ファンは大事にしなければ」

ふん、と藤井は窓の外を見た。

理は後部座席でむつつりと黙り込んでいた。

それから一日もたたないうちに、理はまた同じ車の後部座席で、藤井の後頭部を睨んでいた。

傍らにはお詫びの品。糸田が朝一で買ってきた高級デパート地下

のスイーツであるらしい。

この車は糸田の車だとうことだった。藤井は車を持っていない。理と、ゼンと晃との関係性は説明したが、二人が正しく理解しているかどうかは疑問だった。

逆に未成年者に対するいろいろをでっちあげて藤井の罪を帳消しにしようとするのではないかと理は勘繰った。そのくらい、この二人は信用ならなかった。

偶然もいいところだが、事務所がゼンたちの家の近くにあるということだった。

事務所のあるビルの駐車場に車を預け、三人は徒歩で家に向かう。曇りの日で、日差しはないが、その分こもった湿気は逃げ場なく体にまとわりついた。

暑い、だるいとぶつくさいう藤井とそれを宥めすかす糸田を置いて、理はすたすたと先に行く。

松谷家の前の通りに出たときに、駅の方から袋を片手にやってくる見慣れた人影を見つけて、理は思わず小走りになる。

「理ちゃん」

藍色のシャツを着て、買い物袋を片手にしたゼンと、家の前で落ち合う。

「飲み物買い忘れててさ、間に合ってたよかった」

「大丈夫ですか？」

ゼンを覗き込んで問う。

すると、ゼンの笑顔が一瞬かたまり、頬に赤みが増した。

「昨日はごめん・・・すっかりお世話になっちゃって・・・」

嘔吐のことを言っているのだろうか、その後にかさなる衝撃であり気にしていなかった。

「いえ、うちの父が乱暴を」

ゼンの顔が固まった。理が振り返ると、いつのまにか背後にいた藤井が眉根を寄せてゼンを睨みつけ、威嚇している。その横には愛想こそいい目が笑っていない糸田。

(なんでそんなに必要以上に人相悪いのかな)

加害者だというのに反省の色がまったくない。

理はため息をついてゼンを伺う。

しかしゼンは両手を組んで、身を乗り出していた。

「うわ、本物だあ・・・」

心なしか目がきらめいている。昨夜の晃を、理は思い出した。

藤井はその曇りない目にすこしひるんだ。

「テレビで見るよりかっこいいなあ」

(本気か?)

とついつつこみそうになる心を理は抑えた。

藤井はまんざらでもなさそうである。目つきはするどいが、すでに威嚇する気をなくしている。単純すぎる。糸田が隣のため息をついた。

「ちよつと、家の外で何騒いでるのよ、お客様と立ち話してんじゃないわよ」

玄関がばしゃりと開いて、晃が顔を出した。

「はい」

ゼンが間延びした声で返事をして、理たちをどうぞと促した。

居間に通されて、テーブルの片辺に藤井、理、糸田の順で座る。

向かいに晃と、麦茶を運んできたゼンが座った。

「ゼン、くんでしたか、藤井に殴られたところは大丈夫ですか?」

「はい」

糸田が口火を切ると、明るい顔でゼンは答えた。

「その前に体調を崩していたので、ちよつとの衝撃でも気を失ってしまったみたいで」

「でも、頭のことだから精密検査を受けたほうがいい。こちらで費用は持ちますから」

「いや、大丈夫です。慣れてますし。俺、とろいのでよく鴨居とかに頭ぶつけるんですよ」

「あ、そう」

ふん、と藤井が鼻を鳴らした。自分の背が小さいからと言って、いやみだとも思っただろうか。人間が小さいな、と理は思った。以前、引越してきたときの外面のよさはどうなったのだろう。松谷家ではまったくその様子を見せない。必要ないと思っただろうか。謝りにきたいまこそ、あの外面のよさは必要だろうか、と理は傍ではらはらした。

しかし、ゼンと晃には実際その心配は無用のようだった。

「でも、まさか理ちゃんのお父さんがあの藤井勸さんだったなんてねえ」

晃がしみじみとため息をついた。

「よかつたね、晃。ずっと好きだもんね。ホームページまで立ち上げてさ」

「ちよつ、やだ、ゼン、サイトのことはご本人の前では・・・」
「へえ」

糸田が身を乗り出した。手持ちのスマートフォンで、あるサイトを開く。

「もしかしてこのサイトですか？」

「やだ、ご存知でした？」

「ええ、ちよい役でも藤井が出てる作品を網羅して、それぞれに感想を書いているでしょう？ よく調べてるなあって、感心してたんですよ、ねえ」

と藤井に話を降る。

藤井は、グラスを片手に目を伏せがちにしていたが、おう、と低く答えた。

「やだ、うれしい」

晃が頬を染めて、テーブルにののじをかいている。

恥らうオヤジ達の集い。

(えっと、なにこの空気)

助けを求めてゼンを見るが、ゼンはゼンで理と視線が合うとまだ

昨夜のことを気にしているのか、頬をそめてうつむいてしまうので、孤立無援である。

「おい、お前」

いきなり藤井が身を乗り出してゼンを指差した。

「あ、はい」

ゼンが顔を上げて、藤井を見た。

「お前、こいつと付き合ってるのか」

ゼンを指した指で、理を指した。

ゼンは目を瞬かせた。

理はあまりの不躰さに、横目で藤井を睨む。

「昨日説明しましたよね、ゼンさんと晃さんは近所の喫茶店の店員さんで、仲良くしてもらってるだけです。あと、人を指差すのは止めてください」

「でも昨日抱き合ってたろうが」

「だから昨日はゼンさんの女性アレルギーがなおって喜びの抱擁だったんですってば。サッカー選手でも試合に勝ったら抱き合ったりしてますよね」

「でもこいつはお前のこと好きだと思っぞ」

「はあ？いきなりなに馬鹿言ってるんですか」

「オレに向かつて馬鹿とはなんだ、てめえ、ケンカうってるのか」

「はいはいはい」

ぱんぱんぱん、と手叩きして糸田が二人をいさめた。

「人の家でケンカしない。ファンのイメージを崩してどうするんですか」

晃は一瞬あつけにとられていたが、くすくすと笑い出した。

「いえ、イメージ通りです」

「どんなイメージだよ」

藤井がつつこんだがそれに対して答えはなかった。

「でも意外だね。礼儀正しい理ちゃんがこんなにずけずけ言うなんて」

「やっぱり親子だよな」

ゼンがうなづきつつ迎合した。

理は心底恥ずかしかった。

松谷家には長居しなかった。

糸田と藤井は次の仕事があるで行って、事務所に戻った。糸田は理を送っていくと言ったが、理は固辞した。そんなに遠くもないし、仕事が滞るだろうと思ったからだ。

その代わり、ゼンがついてきた。

(なんかデジャヴ)

松谷家を出てゼンと歩いていると、昨夜のことを思い出す。けれど、今日はまだ昼下がり。雲が途切れてきて、一気に日差しがまぶしい。

ゼンは家を出てからずっと黙っている。

暑いせいかと理は思う。暑いなら無理して送ってくれなくてよかったのにと。昨日吐いたのも、暑さで胃腸が弱っていたせいではないか。

昨日の公園を通り過ぎる。スポットライトのような街灯に照らされていた夜と違って、昼に通ると、気付かずに素通りしてしまうような小さな公園だ。

理はゼンの横顔を見上げる。ゼンはただ前を見ている。顔色は、あまりよくない。やはり、体調がよくないのではないか、と心配になる。

「ゼンさん、体調、本当に大丈夫ですか？ 顔色悪いですよ」

話しかけられて、ゼンのはっと理を見た。そしてなにかを取り繕うに、笑った。

「大丈夫」

「昼間だし、送ってくれなくても大丈夫ですよ。すぐそこだし」

「とか話してる間についたよ」

駅前の小さなロータリーについた。張り出した駅舎の屋根の下に

入る。昼下がりの駅は、休日でも人はまばらだった。反対側の改札は商店街に続くので、もつと賑やかだという話だった。

「理ちゃん」

改札の前で、別れようとしたときに、ゼンが先に呼びかけた。

そして、理の手を握った。

「俺が、理ちゃんを好きなことって、馬鹿なこと？」

「え？」

理は意味がわからず、ゼンを見上げた。

そして、さつき藤井が言ったことに対して、自分が否定したことを思い出した。

しかし、思い返してみればゼンは以前、自分のことを好きだと言ってくれていたのだった。

（いやでもあの人が言っていたのはそういう好きじゃなくて、なんかもつと生々しい男女の好きだったから）

だから否定したのだ。

でも、好きという言葉は、背後になにがあるうとも同じだった。

好きだといってくれたゼンの気持ちを否定するつもりはもちろんなかった。

まさか、そんなことを気にするとは思わなかったのだ。

以前だって、軽い気持ちで言ったことだと思っていたから。

だが、軽い風に言っても全部本気だと、そこが母に似ていると、言ったのは自分だ。

（あのときは、母のようにラテンな、自分の感情を出すのにてらいがない人だとおもったんだ。でも、ゼンさんは、母とは違う）

もつと繊細で、考え込む人だ。

繋がれた手が汗ばむ。それが、ゼンの汗なのか、理の汗なのかわからなかった。汗を感じられるのが恥ずかしくて、手を放したいと思う。だが、ゼンの手に握りこまれていて、離せない。ゼンの目が真剣だから。

つながれた手から鼓動が早まる。

「馬鹿なことじゃ、ありません。あれは、父が失礼な言い方から」

「でも本当のことだよ。俺は、理ちゃんが好……」
ぱつと、手が離れた。

ゼンの、呼吸が荒い。

あつという間に、ゼンの皮膚にビーズを流したように、湿疹が散った。

「な、なおつたはず……」

ゼンが呟いた。しゃがみこんで、呼吸を整えようとする。

理はゼンを触るに触れず、しゃがみこんで状態が収まるまで待った。

理、懐古する

結果から言うと、ゼンの女性アレルギーは治っていなかった。起こったり起こらなかつたりするようになった。

それだけでも進歩だと、ゼンは言った。

『晃の友達の水の人でも試してみたんだけど、アレルギーの起こる回数が10回中8回になったんだ。前は百発百中だったのに』
電話口でゼンが言う。一応頭をぶたれた件で病院に行ったけれども大事なかつたという報告がてら、理に電話が来たのだ。

藤井は留守で、理は居間でテレビを見ているところだった。

(友達の、女性)

自分以外にも、ゼンに触れてアレルギーの起こらない女性。

「それは、はじめからそうだったんじゃないでしょうか」

『え？』

「だって、一回アレルギーが起きたら触ろうとは思わないでしょう。同じ人に何度も触る機会なんて、そんなにありませんよね。試したこと、ありました？」

電話の向こうで、ゼンは黙る。

『そつえば、そうかも』

ゼンは感心したようにうめいた。

『俺のアレルギーって、なんなんだろう』

知りませんよ、と思ったが、理は口に出さなかつた。

なんだか気持ちさがさくれ立っている。

もうすぐ夏が終わるからだろうか。

季節によって、感傷的になるような性格ではないと思っていたが、理は、深く息を吸って、吐いた。

「立ち入ったことを聞くようですが、いつごろからなんですか、そのアレルギーって」

『えーと、5歳くらい、かな』

「そんなに早く？」

理が驚くのに、ゼンはははと乾いたように笑った。

『俺、5歳のときに母親を亡くして、こっちに戻ってきたんだけど、そのときにはもうアレルギーだったんだってさ』

原因に心当たりはないのか問おうと思うが、躊躇する。他人には踏み入っていい領域とそうでない領域があるからだ。

しかし、ゼンはこともなげに言った。

『俺ね、母親と暮らしてたとき、虐待されてたんだって。それが原因じゃないかって、言われてる。虐待しても、俺はもうほとんど覚えてないんだけどね』

ことさら明るく言う。本当に覚えていないのか、それとも暗くなるのが嫌なだけか。

「でも、もしそれが原因だとしたら、どうしたら治るんでしょう」

『うーん、優しくされたら？』

「優しくされたこと、ないんですか？」

おばあちゃん子だと聞いたことがある。祖母にはアレルギーが発現しなかったとも。すくなくとも祖母には愛情を受けていたのではないだろうか、と理は想像する。

『ある、けど・・・』

口を濁す。

『ばあちゃんは、厳しかったけどすごく優しくかった。でも、他の女の子は、優しくてもすぐ自分のものにしてしまうから、苦手』

ああ、と急に理は納得する。

優しくするだけではだめなのだ。その優しさが、ゼンを求める目的からでは。

ゼンが求めているのは、無償の愛。

(なんてぜいたく)

というよりもそれは。

(お母さんだ)

しかし母親はすでに自分の子供を自分のものだと思っているから、優しくするのではないか。

ゼンは安心して包み込まれたいのか。

『なんか俺、すごいうぬぼれたこと言ってるよね……』

恥ずかしげに言い訳する。

理はくすりと笑った。

小一時間ほど話して、電話を切った。

「虐待か」

「な、なんだお前いきなり」

背後から声がかかる。少し怯えた様子の藤井がいた。やましいところでもあるのだろうか。糸田に説教でもされたのだろうか。

理はため息をついて立ち上がった。

「帰ってきたなら、ただいまくらいいったらどうですか」

「言った。お前が電話してるから気付かなかったただだ。しかし名門女子高生は社会問題まで話し合うんだな」

虐待について言っているのだろうか。学校の友達と話していると思っていたのだろうか。面倒だからそのままにしておくことにして、理は何も答えなかった。

ただ、ゼンが電話をかけてきた本来の目的を思い出し、ゼンの頭に異常はなかったことだけを伝えた。

虐待と言っても、具体的にどういいうことか、理には本当にはわからなかった。

ニュースで断片的には聞いていたが、自分と結びつかず、ただ痛ましいと思うばかりだった。

それが、ぐんと身近になって、理はネットで調べてみた。

食事を与えず、部屋に閉じ込め、餓死させる親。

言うことをきかないと言って殴り殺す親。

ニュースの記事を探すだけでも、膨大な数。ニュースにならない虐待も、世の中にはたくさんあるだろう。

理は途中で読むのを止めた。読み進められなかった。泣きそうになったが、いま自分が泣いてどうなるだろうと思うと泣けなかった。

自分は親に愛されていたと、わかっている。それだけでも、本当に幸福なことだと、知っている。そんな自分が泣いて、何になるのだ。

ゼンは、死ななかったからいまここにいる。ここにいて、理と出会った。

心無い行いのせいで出会わなかった数多の人々。起こらなかった無数のしあわせ。

理は胸が痛くなって、ベットに寝転がった。

哀れんでいるわけではない。同情しているわけでもない。

ただゼンが覚えていないといった。それが本当だと思った。

新学期が始まっても、外気は温さをまとったままだった。

「まだ、暑いわね」

久しぶりに会った珠子は、そう言って苦笑した。理は、懐かしさに目の奥がつんと痛くなった。

珠子と会つと、否応なしに母と暮らしていたころのことを思い出させられる。

冬から仕事で長く欧州に滞在していた珠子だが、ようやく帰国できたと言って、理の家に立ち寄ったのだ。

「少し見ないうちに、ずいぶん大人っぽくなったわね」

そう言って微笑んで、理の髪を撫でた。眼鏡越しの目はとても優しい。子供の頃から見慣れた視線。

「そうかな」

理は少しはにかんだ。

「おう、なんだお前、いつ帰ってきたんだ」

その後ろから、パジャマ姿の藤井が声を響かせた。ちなみにいまは午後2時。昼下がりである。

藤井は明け方帰ってきて、ずっと眠っていたのだった。

「相変わらずね。あんまり理ちゃんに手間をかけさせないで頂戴」

「うるせえよ」

「パジャマでうるうるしないでくださいって、何度も言ってますよね」

理が眉を寄せると、藤井は子供のように顔をくしゃくしゃにした。

「おお、うるせえのが二人になった」

そう言って、しばらくすると着替えて出かけてしまった。

理と珠子とは、藤井のことは気にせず珠子のお土産を見ながらお茶を飲んだ。

「どうなるかと思ったけど、意外にうまくやってるみたいね」

珠子がため息をつきながら言う。

理は、紅茶の暗褐色の水面を見ながら、口を開いた。

「どうして、お母さんはわたしを産んだのか、珠子ちゃんは知ってる？」

結婚もせず、ひとりきりで、育てようと思ったのか。

妊娠したからか。墮胎するのは忍びなかったからか。

母が自分を産んだときには、すでに母の両親は他界していたと聞いたことがある。その段階ではまだ準教授だったという話だし、経済的にもきつかったはずだ。上司である研究室の教授に理解があったこととで復職し、のちのちは教授職に就くことができたというが、子育てをしながら論文を書いて発表して、学生の指導をして、という生活は並大抵の忙しさではない。

しばらく、珠子は黙っていた。

この家の居間には仏壇がない。遺影もない。四十九日が終わった段階で、母の部屋にしまった。理にとつては、携帯に保存されている画像で十分だった。

珠子は、玄関の方を見ていた。正確には、おそらく凧の部屋の方を、凧が出てくるのを待っているかのように。

「凧と兄は、出会ったときからとても仲が悪かったわ」

理は少し目を大きくした。

「同じ大学の、同じサークル。凧はわたしと高校時代からの同級生だから、兄の二つ下ね。凧はまあ、変な話だけどやさしいし紳士だったから女子に絶大な人気があったの。兄は、それがおもしろくなかったのよね。好きな子が次から次へと凧にかっさらわれたってばやいてたわ」

「はあ……」

「凧も凧でおもしろがって女子にちょっかいを出すものだから、兄は兄でやきもきして、でも、気付いたら二人はすごく仲良くなつたのよね」

「え？」

「なんで？つて思うでしょ。わたしも思ったわよ。まあ、なにかちやんと話をする機会があつて、同じ演出家が好きだとかで意気投合したらいいんだけど」

ちなみに三人とも同じ演劇サークルであつたらしい。

「お母さんと珠子ちゃんが演劇をしてたなんて、初耳だけど……」

珠子はふふと笑った。

「凧は後から主に脚本、演出に進んで行ったけどね。でも演技もうまかったわ。声がいいでしょう。女性にしては落ち着いた低い声だし、見た目も涼やかだから、ますます女の子にもてるのよね」

「へえ。見たかったな」

「誰かが記録してればいいけど……でももうかなり前のことだから」

そう言つて、珠子は、紅茶に口をつけた。

「仲がよくなつたと言つても、恋人つてかんじじゃなかつたわ。兄は根っからの女好きで、いろんな女性と交際があつたし、凜とはあくまで友達つていう感じだった。凜の側もそれは同じ。一時期別の男性と付き合つていたみたいだけど、すぐに別れた。それから二人に何があつたかはわたしにもよくわからないけど、卒業後も会つたりしてるみたいではあつたわ。で、何年かして気付いたら二人は仲違いしてた。もう二度と会わないつて、凜は私に言った。何があつたのかはけして言わなかつたけど。それで、でも兄の子供がおなかにいるつて言つてた。わけがわからなかつたわ。何が原因か知らないけど、認知だけでもさせるべきだつて言つたわ。でも、凜は頑として兄と会おうとはしなかつた」

珠子は目を伏せる。理は、また最初の疑問に戻つてしまう。

「それじゃあ、どうして、お母さんは藤井さんとわたしが一緒に暮らすように、遺言を書いたんだらう」

珠子は少し黙つてから、口を開いた。

「興味本位、じゃないかしら？」

「ええ？」

理は、つい目をすがめた。その顔を見て、珠子は笑つた。

「凜つて、そういう子供みたいなところがあつたじゃない？ 人のいやがることをわざわざしてみたり、嫌いな人同士を同席させてみたり。嫌われてる人の傍にわざわざ近寄つて嫌がらせしてみたり」

「軽いノリで遺言を書いたと」

「それに、まさか、こんなに早く死ぬつもりもなかつたんだと思うわ」

ほんとにばかね、と珠子は苦々しく笑つて、紅茶を飲み干した。あくまで、未成年の場合の保護者として藤井を指定しただけだ。長じてからはまた別の内容に書き換える予定ではあつたのだらう。ただし、もしもそうなつたらおもしろいだらうという珠子が言うところの興味本位があつたとは十分に考えられる。

「でも、なんで藤井さんは、わたしと暮らすことにしたのかな」
「遺言だからっていう、殊勝な考えは持ってなさそうよね」
しばらく考え込んだが、野蠻人の考えることとはわからないとい
う結論に達した。

「でも、少なくとも少し、寂しいのは紛れたかもしれませんが。あの
人のおかげで」

理が皮肉交じりに言うつと、珠子は苦笑した。

「それは、そうかもしれないわね」

そして、二人で顔を見合わせ、どちらからともなく笑った。

必死で子供を育てる親もいれば、育児放棄や虐待をする親もいる。

自分は母に育てられて幸せだったと思う。

こんな幸せな人間が、覚えていないにせよ虐待に起因する症状を
持つゼンに、何かできることがあるのだろうか。

そういう風に考えること自体が傲慢だろうか。

考えれば考えるほどわからなくなって、理は睫を伏せた。

ゼン、気付く

午後の眩い光が硝子越しにきらめいた。

店の前には日よけの屋根が張り出されているので直射日光は中に入らないが、残暑厳しい晩夏、さすがにテラス席に座る人間はいない。

そんな昼下がりに、遅い昼食をとるサラリーマンで賑わう店内に、派手なアロハシャツを身にまとい、パナマ帽とサングラスをつけたあからさまにあやしい男が現れた。

「いらっしやいませ」

どんな方でもお客様はお客様。とくに気にならないゼンは、営業用の笑みを振りまいた。

「よう。こないだは世話になったな」

軽く手を上げて挨拶され、ゼンは心の中で首をかしげる。それを見越したのか、男はサングラスをとった。

「藤井さん！」

少し声を上げてしまう。藤井は一応俳優であるという自覚はあまりないのか、気にせずアイスコーヒーを注文した。

「あとよ、お前この後時間あるか。ちよっと話があるんだけどよ」

「あと30分くらいで休憩ですけど」

「よし。じゃあ待つてる」

30分後、二人は近くの飲み屋にいた。昼時は定食を出しているらしい。

「この飯は多くてうまいんだよ」

そう言ってカレー丼を藤井は頼む。ゼンも同じものを頼んだ。

すぐに出てきたたしかに量の多いご飯を食べ終える。

藤井がタバコに火をつける。すすめられて、ゼンも一本口にした。しばらく吸っていなかった。煙が体に沁みる。

「お前さ、理のやつに惚れてんだろ」

いきなりそういわれて、思わずゼンはむせた。

「ごほごほとせきこむゼンを気にせず、藤井はふうと煙を吐いた。

「あいつ飯炊き掃除洗濯は完璧にこなすくせに、ぜんぜん女らしくねえんだよ。がりがりで胸だつてまっただし、けつもぺしゃんこだし、色気のかけらもありやしねえ。いや、体の問題じゃねえんだ。ようは意識の問題だと思っわけだ」

「い、意識？」

「そう。誰かにほられるだとか、誰かにほれるだとか、そういう色っぽい感情を覚えれば、次第に娘らしくなるんじゃないかねえかと」

「いえ、理ちゃんは十分かわいいと思いますけど」

ゼンが言つと、藤井は目を見開いて、からかうように口笛をふいた。考えなしに思ったまでを発言しただけだったが、ひやかされると恥ずかしくなる。

「まあ、あばたまえくぼっていうからな。そんなにかわいいと思ってんだつたら、アレルギーだかなんだかしらねえけど、早くやつちまえよ」

「は？」

顔が耳まで赤くなり、思わず立ち上がる。

「何言ってるんですか。仮にも父親でしょう」

「ほんとに、仮だけだな」

言つて、藤井はふうと煙を吐いた。

ゼンは少し落ち着いて席についた。

「理ちゃんと藤井さんは、まだ会って一年も経ってないって聞きませんでした」

「ん」

「なんで、会ったばかりの女の子と一緒に住もうと思ったんですか」
藤井は、眉根を寄せた。聞いてはいけなかったかと、ゼンは思う

が、ひけなかった。

藤井は藤井なりにかなり素つ頓狂な方向ではあるが、理のことをいろいろ心配しているようであることは、なんとなくわかった。会ったばかりなのに、どうしてそこまで思うことが出来るのか。それが親というものなのか。

ゼンにはよくわからない。4歳から5歳の間、一年離れただけだったのに、生まれたときから一緒にいたはずの父親とはあまり交流がなかったからだ。まだ子供であったゼンには、祖母だけが抛り所だった。いまでも、単身赴任中だし、心が通ったかんじはしない。

藤井はタバコを消して次のタバコに火をつけた。

深く吸って、吐き出す。

「あいつの顔が、昔のオレにそっくりだったからよ。こいつはオレの子供だろうって思ったんだ。それなら、一緒に暮らさなきゃならねえだろうと。まあ、最初は馬鹿言っつてんなと思っただけだな。子供ができたことすら知らせねえで、勝手にいなくなっつて勝手に死にやがって」

火をつけたばかりのタバコを灰皿に押し付け、藤井はうつむいた。ゼンは、藤井のつむじを見ていた。理のつむじと同じ場所にあった。

こんなささいなところで、親子だと感じる。

(いいな)

と思つてしまい、それから何が？ とゼンは自問した。

何がいいのだろう。なんだか最近、自分でもわからない「いいな」が多い。その「いいな」は「うらやましいな」なのか「好きだな」なのかときによつて違うことくらいはわかつていたけれども。

急にばつと藤井は顔を上げた。

「まあ、やるやらないは別として、ちょっとはあいつに女としての自覚をだな、持たせてやらねえと。けっこ薄着でふらふらしてるし、夜でも平気で出歩くし」

「え？夜?!」

「散歩だとかいってやがるけど、あぶねえだろ」
「本当ですね」

言いながら、なんだんかんだで本当に、藤井は理のことを心配しているのだなと思った。そして、その不器用さがほほえましかった。それは、ヤクザ役でもどこかコミカルで人情味溢れる魅力的な俳優であるところの藤井そのものだった。

(女としての自覚、とは言うものの)

ゼンは理に何度が好きだと言っているつもりだった。しかし、理はまるきり人間愛の一種としてしか捉えていないようなのである。

年の差がありすぎるのも、本気にとつてもらえない原因だろうか。それに、肝心なところでアレルギーが起こったりもする。

絶対に触れないわけではない、とわかったところで、それが何になろう。

ゼンは、少し吐き気を感じはじめていた。

おそらく性欲が変換されたのであろう吐き気。もし万が一、うまく言ったとしても、この妙な変換機能がなおらないかぎり。

自分がそういう意味で理を好きなのかどうかについては、ゼン自身でも混乱していた。

ただ理を思うと鼓動が早くなる。そのてのひらで頭をなでられた。自覚している面としてはそのレベルで、カマトトぶるのもいい加減にしなさいよと昇辺りに殴られそうな幼稚さだが、実際そうなのだから仕方が無い。

(幼稚、というよりも)

淫猥な悪夢。

夢は記憶を整理する機能だという。

それならば、繰り返し見るあの悪夢も、本当のことでありはしな

いだろうか。

自分がされたという虐待についての夢は見ないのに。

そこまで考えて、ゼンは慄然とした。

ひとつの可能性に思い至ったからだだった。

しかし、それは自分が餓死寸前まで育児放棄されていたという話と食い違うのではないだろうか。

(いや、それが虐待であったなら)

その可能性に、ゼンは自分でも恐ろしくなり、自分の体を引き裂きたい衝動にかられた。

(もし本当だったら)

自分の肉をそぎ落としてしまいたい。

理、指摘される

ゼンが姿を消したという知らせが、晃からもたらされたのは、理の登校途中のことだった。

『ふざけんじやないわよ。書置きよ。いまどき書き置き。しかも内容が「ちよつと出かけます。探さないでください」って、なんなのよ』

電話に出るなりそうまくしたてられた理は、おちついてください、と低いトーンで努めて言った。

「どこか心当たりは？」

『あたしが知ってるかぎりのゼンの友達には連絡とつたし、九州の章二さん、ゼンのお父さんね、にも連絡したけど、知らないっていうし』

「何か変わった様子は？」

『・・・そういえば昨日、藤井さんとお昼一緒に食べてたわね』

「・・・とりあえず、本人に聞いてみますね」
理は通話を切った。

藤井と糸田にかけるが繋がらない。

生徒の群れを逆走し、一路藤井の事務所へ向かった。

「おい、お前学校は？」

事務所の入り口で社員に止められたところで、藤井が通りかかった。小さな事務所でよかつたと、理は思う。

「電話が通じないから」

話しながら、個室に通される。応接室、とドアの前に書いてあった。小さなテーブルを挟んで、ソファが2台。それだけの簡素な場

所だった。

「打ち合わせ中だから電源切ってたんだよ。で、何しに来たんだよ」
「昨日、ゼンさんに何を言っただんですか？」

単刀直入に切り出す。

藤井はタバコを取り出し、火をつける。

「たいしたことじゃねえよ」

理は、藤井を睨んだ。

「ゼンさん、いなくなっちゃったんですよ」

「はあ？」

藤井はタバコを取り落とした。スーツに落ちたそれを、慌てて振り払う。

「ゼン公が？なんで？」

「それを聞きにここまで来たんですけど」

「なんでオレのせいなんだよ。オレはただあいつにハツパかけただけ」

「はっば？」

理の、眉間の皺が深くなった。

気にせず、藤井は言葉を重ねた。

「お前のことだよ。あいつお前に惚れてるみてえだから、お前だつてあんな男前に惚れられるなんて奇跡だぞ。これを逃したらもうないぞ。ちよつと情けないが、悪い奴じゃないし、はやいとこくつっいちまえよって」

がん、と理はテーブルに拳を振り下ろした。

「余計なお世話」

地の底から響くような低い声で言い、理は半眼になって藤井を見た。

藤井は一瞬虚をつかれたが、そんな自分を見とめたくないかのよう
うに、ふんと顔を背けた。

「ほかには？」

「何も言っただねえよ」

「嘘」

「嘘なんかついてどうする」

それは確かにそのとおりだが、と理は釈然としない気持ちで藤井をねめつけた。

藤井が気にしていないところで、ゼンの気にかかるなにかがあったのかもしれない。

しかし、これ以上藤井に聞いても無駄なようだった。

考えていると、藤井は気にせず言葉を重ねた。

「お前もさあ、いなくなったくらいでこんなに血眼になって探すくらいなら素直になっとけよ」

突然顔が熱くなった。赤くなっているかもしれない。

藤井が邪推するような意味じゃない。自分はただ、あの危なっかしい人が心配なだけだ。

「お邪魔しました」

ドアを開けると、お茶をお盆に載せた社員をはじめとして数人がドアの前から部屋になだれ込んできた。

「お前ら」

藤井が立ち上がる。

「だって藤井さんのお嬢さんなんてみんな興味深々ですよ
全員頷く。

理は、姿勢を正し、いつも父がお世話になっております。と深く頭を下げ、今度こそ部屋を出た。

藤井の怒声が背後から聞こえた。

晃に電話をする。

「とくに、家出する原因になるようなことは言ってないようでした」
『あらそう。少しゼンの様子、変だったけど』

「それは多分、父がわたしとゼンさんの中を邪推して、はっぱをか

けたって言っていたので」

『ああ』

なるほど、と電話越しに晃が微笑んだ気配があった。
ふう、とどちらからともなくため息をついた。

『まあ、ゼンもいい大人なんだし。何かひとりで考えたいことでもあつたでしょう。仕事を放棄したのは許しがたいけど』

「お店の方は、人手、足りてるんですか？」

『もう一個のお店のほうからお願いしたから大丈夫よ』

「そうですか」

『ごめんなさいね。学校も、いまからじゃ遅刻でしょう。わたしも気が動転して』

「大丈夫です」

（だって書置きなんて普通じゃない）

理もゼンに電話をしたが、電源を切っているようで繋がらなかった。
た。

なのでせめてメールを送信した。

ゼン、会いに行く

『いまどこにいますか。晃さんが心配しています。連絡ください』

電源を入れると、理からのメールが届いていた。あとは、怒り狂う晃のメール。

すでに日は落ちていた。ゼンは、指定された喫茶店に入る。レトロな丁度の店だ。店内にはクラシックが流れている。

すでに相手は奥の席に座って待っていた。

「ひさしぶりだね」

ゼンが目の前に立つと、そう言って読んでいた本を閉じた。

「座りなさい」

言われるままに、ゼンは向かいの席に座る。

店員がやってきたので、ブレンドコーヒーを頼んだ。

相手は、目を細めてゼンを眺めた。

「驚いたよ。まさか君のほうから僕に会いにくるなんてね」

ゼンは答えなかった。

頼んだコーヒーと伝票が置かれて、ゼンははじめて口を開いた。

「聞きたいことがあるんです、お父さん」

声は固い。

向かいに座ったゼンの父、章二は微笑んだまま、ゼンの言葉を待った。

豊かな髪はグレーに染まりつつある。彫りの深い顔立ちに、ゼンは祖母の面影を見いだす。

「俺の、母親のことです」

「世津子のことかい」

ゼンは頷いた。

まだ高校生の母と、会社員だった父は結婚した。しかし、わずかな数年で結婚生活は破綻した。

結婚と同時に勘当されていた母は、郷里にも戻れず知人を頼って東北にわたり水商売に身を投じた。そんな、絵に描いたような没落。「俺は、母に虐待されていたと聞きました。その、具体的な内容を知りたいんです」

「なぜ」

「覚えていないからです」

章二は首を振って、両手を広げた。

「覚えていないなら、思い出すことはないじゃないか。わざわざ自分がいたぶられた記憶を辿ろうなんて、悪趣味だよ」

正論だ。だが、その発言に感情が含まれているようには思えなかった。

章二の言葉は、いつもゼンにしらじらと響いた。

「俺の、女性アレルギーの原因が虐待だと、昔から聞いていました。俺は、アレルギーを治したいんです」

「思い出したからって、治るかな」

切り込むように、章二は言った。

「自分がされたことを知ったら、よけいに女性が嫌いになるかもしれない。逆効果かもしれないよ」

「嫌いになるのは「女性」じゃないくて「母」ですよ。松谷世津子本人です。女性じゃない」

「そんな理屈は、ずっとわかっていたことじゃないか」

「それでも、知りたいんです」

章二は、しばらく、黙ってゼンを見ていた。

ふうと、ため息をつく。

「僕だって、そんなに詳しく知りはないよ。知っているのは、ただ君が、過度の栄養失調であったこと。殴られた跡や、手首に縛られた跡があったことくらいだ。保護されたとき、君は意識を失っていた。目が覚めたときには、何も覚えていなかった」

「そこで何があったか、知る人はいないんですか」

「本人が死んでるからね。あとは君だけだ」

章二は、コーヒーを口にした。

「こんなこと、電話で十分だろう。なぜわざわざこんなところまで直に会った方が早いかと思って」

本当は、いてもたってもいられなかったただけだ。その可能性を否定したくて。

章二はしばらく考え込んでいたが、手帳を見ながら名刺の裏に何かを書き込んだ。

「ここに、世津子の妹が住んでいる。いまはどうか知らないが」

「母方の親戚とは、交流がなかったのでは」

「仲の良い姉妹だったからね。よく三人ででかけたものだった」

懐かしむような遠い目。離婚の原因は父が他の女性と関係を持っていたからだと、ゼンは知っていた。

自分で壊したものを、なぜいとおしいと思うのだろう。失ってはじめて大事だと気付いたとでも言うのか。

「忙しいところ、ありがとうございました」

それだけ言って、ゼンはお辞儀し、席を立つ。二人分の伝票を持つとうとしたゼンの手を、章二は押しとどめた。自分の分だけでも払おうとしたが、章二は二枚とも持って会計を済ませてしまった。

喫茶店の前で二人は別れた。

「晃くんは、元気かな」

「はい」

「よろしく言ってくれ」

そう言って、会社へ戻ると言った。もう夜だが、まだ仕事があるのだという。還暦間近だが、よく働く人ではあるのだ。

(同じくらい、女性にも熱心だけど)

ゼンが章二と暮らしていたのは5歳から14歳までの9年間。子どもながらに感じ取った女の影は、軽く両手を超える。

ゼンにはわからなかった。なぜそんなに目移りできるのか。浮気は男の性だ、勲章だと言うけれど、ただ不実なだけだと思う。

どのみち、25年間恋を知らずに生きてきた自分が言えることで

はないのかもしれないが。

たった一度の、はじめてのこの恋で、ゼンは自分の気持ちに振り回されて疲労困憊だった。

相手の動作にいちいち喜んだり悲しんだり、深読みしすぎたり、都合良く解釈したり、それで落ち込んだりの繰り返しだ。こんなのを何度も行う人の気が知れないと思う。

（恋、なのかな）

自分で考えておいてなんだが、まだ疑問が残っていた。たしかに自分の症状は世間一般で言われるところの恋そのものだと思う。けれど、はじめてなのでこれがそうなのかわからない。ただの執着とどう違うのだ。

（考え過ぎなのかな）

思いながら、ゼンは章二に渡された名刺の裏を見た。

『瀬谷貴世子 東京都 区・・・』

「店の近くじゃん・・・」

灯台下暗しだな、と思った。母に妹が居たこと自体初耳なのだから、その言い方はおかしいとわかってはいたが。

空港に向かい、飛行機待ちの間、晃に電話した。案の定、飛んできたのは怒号だった。しかし、とにかく早く帰ってきなさいと言われ素直に頷いた。

理には心配をさせたことを詫びるメールを返した。

ゼン、ほんとうのことを知る

その夜。またあの夢を見た。

翌朝、ゼンが瀬谷貴世子に電話をすると、落ち着いた声の女性が
出た。

「瀬谷さんのお宅でしょうか。あの、お、私は、松谷ゼンと言いま
す。世津子さんの息子です」

いささか緊張した声で名乗ると、しばらく沈黙したのちに女性は
「ゼン、くん」と言った。

「瀬谷、貴世子さんでしょうか」

「ええ」

「母のことで、伺いたいことがあるのですが」

貴世子は、電話ではなんだからと来訪を勧めた。ゼンは少し恐ろ
しい気がしたが、頷いた。

店の近くの小綺麗なマンションだった。

マンション全体の入り口で部屋番号を押し、中から開けてもらう。
部屋は6階だった。

ドアを開くと、短髪の小柄な中年女性が出てきた。ゼンを見上げ
て、微笑んだ。その笑みで、少しだけゼンは気持ちが悪くなった。

「よく来たわね。中へどうぞ」

貴世子はそう言うと、ゼンの先に立って歩き出した。そう大きな
部屋ではない。ダイニングキッチンに、二部屋。バスタイレくらい
のコンパクトな住まいだ。

「狭いでしょ。でも、二年前に夫が亡くなってから、ずっと一人だ
からちょうどいいのよ」

そう言ってふふと笑った。キッチンからお茶を持ってきて出す。
テーブルに向かい合って座る。手作りだというクッキー。カントリ

「調の部屋の調度といい、暖かい雰囲気の家だった。」

奥の開いたドアから、すらりとした黒猫がやってきて、貴世子の膝に乗った。

ゼンはつい猫を目で追ってしまふ。

「クロっていうのよ。ひねりがないでしょ。主人がつけたんだけどね。」

貴世子の指に顎の下を撫でられて、気持ちよさそうに喉を鳴らす。

「真っ黒い猫もいいですね。うちの猫は真っ白で」

「まあ」

写真を見せようとして、ゼンは思いとどまった。

今日は猫自慢に来たわけではないのだ。

一呼吸置く。

「あの、話しにくいかも知れませんが、今日は、母のことで」

「それは、電話で聞いたわ。姉さんの、どんなことが知りたいの？」

口調は柔らかいが、芯は強そうだった。微笑んで猫を撫でたまま、貴世子はゼンの言葉を待っていた。

「父と離婚してからのことです。東北の方で働いていたと聞きました。そのころ、貴世子さんは母と会っていましたか？」

「一度、お金の無心をされたことはあったわね。水商売が向いていなかったみたいで、ずいぶん苦労しているみたいだった。わたしはその頃大学生で、一人暮らしをしてた。姉さんが結婚と同時に勘当されてからも、連絡をとっていたから」

「父に聞きました。三人で、よく出かけたよ」

「ええ、そう、そうね」

貴世子の目が細まった。同じようにいまではないどこかを見ているようでも、章二よりも乾いた顔。

「そのとき、俺と会いましたか？」

「いえ。外で会ったので」

やんわりと首を振った。そして、眉を下げる。

「もしそのときに会っていれば、なんとかできたかもしれないよ」

わ。あなたのこと、助けてあげられたかも知れないのに」

「終わったことです」

それに、とゼンは言葉をつないだ。

「何があったか、覚えていないんです」

貴世子は目を見張った。

「元々、5歳頃の記憶なんて年とともに薄れていくものですけど、助けられた後、意識を取り戻した瞬間に、俺はそのことを覚えていませんでした。ただ、体だけが覚えているのか、いまだに女性が苦手で、さわるとアレルギー反応が出るんです」

「あら、まあ」

さらに目が大きくなる。

「俺は、そのアレルギーを治したくて、自分に何があったのか、知りたいと思っただんです」

「そうだったの・・・」

貴世子は瞳を伏せて、言葉を探しているようだった。

せっかく光明が見えたと思ったのに、やはり母と自分しか知り得ないのか、とゼンは絶望的な気持ちを抱いた。

疑惑を、はらす手段がない。もう、一生その疑惑を抱えて、生きるしかないのだ。

気付けば、ほろりと、貴世子の目端から涙がこぼれていた。

ゼンは、つい立ち上がった。

「ごめんなさい。あなたが悪いわけじゃないんです」

「いえ、わたしが悪いのよ。私の罪だわ」

「近所に住んでいたのならともかく、離れて住んでいて気付くのは難しいと思います。仕方のないことです」

そう、そうね、と繰り返し、貴世子は涙を拭いた。

貴世子が落ち着いたところで、ゼンは帰ることにした。

貴世子がエレベーターまで送ってくれた。

「近くの喫茶店で働いてるんで、よかつたら来てください」

そう言つて、店のカードを渡した。

「le matin、朝」っていうのね。いい名前」

微笑みを交わして、ゼンはエレベーターのボタンを押した。その流れで、思い立って貴世子の手を握った。

目をつむつたが、何も起こらなかった。

「近親者には、起こらないのかな」

突然すいませんでした、とお詫びして、手を離す。

貴世子は一瞬目を迷わせたが、すぐに笑った。

「年を取っていると、起こらないのかも知れないわね」

「いや、そうでもないんですよ。年齢は関係ないみたいで」

エレベーターが着いた。扉が開く。

「それじゃあ、今日は本当にありがとうございました」

ゼンがエレベーターの中でおじぎをする。

貴世子はひらひらと手を振った。

その手のひらに、斜めに白い傷跡が走っているのを、ゼンは見た。

ノイズは、次第に明瞭に会話を紡ぎ出す。

ゆっくりと瞼を開く、その視界にかかった霞が晴れゆくと同じ速度で。

言い争う二人の女。

二人とも髪が長く、よく似た面差したが、ひとりとは異常に痩せていた。

気付けば、部屋には痩せた女しかいなくなっていた。

本や食べ物の残骸が散乱した部屋。

頬がこけ、腕も足も皮ばかりとなった女は、腕に注射する。

そして倒れたまま、動かなくなつた。

女に近づく。

大きく見開かれた目。

ドアが開き、言い争っていた女が現れ、同じように、目を丸くした。

それがおかしくて、笑う。

気付くと視界が揺れていた。遅れて、頬に衝撃。

『悪い子、悪い子ね』

間断なくぶれつつける脳。

気付けば手首が痛い。両腕を高く上げて、手首を縛られている。

白い指が、体を這っていた。

異変を感じていた。指からもたらされるあきらかな変異。

もどかしく足を揺らす。

悪い子、と咳かれ続ける。

耳元に残る。

その赤い唇が弧を描くのはおそろしく、またうつくしく、全身に震えが走った。

それとともに、こらえていたものが放たれる。

気を失いそうになる。

耳元でささやかれる言葉が脳に焼き付く。

『悪い大人にならないように』

そうして、てのひらで目を塞がれた。寸前に目にはいるのは、上弦の月のような白い

(傷痕)

窓の外は薄明るい。コバルト色の空気が満ちる朝。

頭から水を被ったように、ゼンはびしょ濡れだった。

すべて自分の汗だ。

(のろい)

魔女の魔法。

本当にそのせいだったのかは知らない。

けれど。

「 違った 」

横になったまま、ゼンは天井を見つめ、呟く。

夢のことだ。自分の都合のいい創作かもしれない。しかし、繰り返したあの夢。あの白い傷痕は、捏造したものではないのではないだろうか。

「違ったんだ」

胸の震えるような安堵に、目の端から、涙がこぼれた。

理、実験する

空は高く澄み、風もようやく冷たさを感じさせるようになる。

理は、文化祭の準備でなかなか *le matin* に寄れずにいた。ゼンからは、いなくなった当日中に心配かけてごめんねとメールが返ってきた。

そして、その数日後に、電話がかかってきたのだ。

『忘れてたことを、思い出したんだ』

虐待の記憶を、か。

理は電話越しのもどかしさを感じた。

面と向かっていれば、その表情や仕草で、どういう気持ちかわかるのに。

声はただ淡々としていて、つかみどころがない。

わざとつかみどころ無くさせているのかも知れないが。

理は、しばらく黙った。

「アレルギー、治りそうですか」

『わからないんだよね。なんか、気持ちは軽くなった気がするけど』

「軽く？」

反芻すると、ゼンに少し笑った気配があった。

『思い出せないことがあるのって、やっぱり気持ち悪いじゃない』

それがつらいことでも、だろうか。

笑って言えるのならそれほどでもないのだろうか。

それとも空元気なのだろうか。

ゼンは素直なようで、肝心な時には心を隠す。人に心配をかけさせまいとする。それは、虐待から保護されて育った経験から、周囲を必要以上に心配させないように自然に身についた癖なのかも知れないが。

(でもそれは、本当に心配している人にはいらぬ癖だ)

心配している人は、心配したいからしている。けして心配される人のせいではない。

けれど、やはり理には踏み込めなかった。自分から話そうとしない限りは、知りたいけれど、無理をしてまで知りたいとは思わない。『治ったかどうか確認したくても、たいていの人はアレルギーの状態を見たらひくから、頼みにくいんだ』

「わたしは、別にひいてなんかいません。ただつらそうだなんて思っただけで」

『うん、ごめん。理ちゃんは別』

なんだか自分がむきになっていよう、でも止められなかった。ゼンの声がいつもと違って、おとなしいから。違っ。

距離を感じるから。

「だから、わたしが付き合います。その、実験に」

一瞬、間があった。

理は、はじめての家のドアの前に立ったときのように、緊張していた。

踏み込めないと思いつつ、踏み込んでいる。

『ありがとう』

その声は、うれしそうだと感じた。それは、希望的観測ではない、と信じたかった。

文化祭後の週末。

柔らかな雨の降る日曜の午後、理は松谷家を訪れた。

晁は不在。理を迎えたゼンは、いつもどおりにこやかであった。

居間に通される。座卓の端と端に座布団が敷いてあったが、奥の座布団にはユキが体を丸めて眠っていた。もうひとつの座布団に理が座ると、ユキはちらりと見たが、すぐにまた目を閉じた。眠って

いるのか目を閉じているだけなのか、猫ってわからないな、と理は思う。

「今日は少し寒いね」

言いながら、ゼンは理に緑茶を出した。温かさが胸に落ちて、少し落ち着く。

「さっそくなんですけど、一応、10分おきに5回。1回の接触時間は3分。接触方法は握手。っていう条件を作ったんですけど、どうでしょうか」

結果を書き込むために作ってきた表を出す。時間と、回数だけの簡単な表だが、ゼンは目を見張った。

「おお、本格的」

「せっかく実験するんですから」

「理ちゃんて、理系？」

「いえ、文系ですけど」

答えによらず、ゼンはひとしきり感心していた。ゼンは簡単に人に感服する。

「じゃあ、いいですか」

頷くゼンは手を出した。

「スタート」

理は右手でゼンの手を握ると同時に、左手で携帯のストップウォッチ機能をスタートさせた。

30秒。いまのところ、何も起こらない。

「ごめん俺の手、なんか汗ばんでるかも」

ゼンが気恥ずかしそうに言ったが、理は気になりません、と一蹴した。

「わたしかもしれません。なんだか少し、緊張しているので」

「え？ 何に？」

問われたところで、最初の3分が経過した。手を離す。10分後のアラームをセットする。

結果を書き込む。一回目は。

ゼンは手を閉じたり広げたりした。

理はお茶をすすった。

「10分て、長いですね。でも何かするには短いし。5分にしますか」

「いや、10分でいいよ」

「そうですか」

理は正座して、少しうつむいて待った。

改めて向き合うつと、何を話していいかわからない気がした。

「こないださ、九州に行ってきたんだ」

「え？」

「福岡。父親がいるんだ」

単身赴任中だと聞いていた。しかし、急いで会いに行くほどの何があったのだろう。電話もメールもあるのに。

「なんかさ、いやなこと考えついちゃって、打ち消したくてもたつてもいられなくなっちゃったんだよね」

そのせいで、迷惑をかけてすいませんでした。とゼンは殊勝に謝った。

「学校遅刻させちゃったって、聞いた」

「いえ、前日父がそちらに伺ったと聞いて、父が何かご迷惑をおかけしたのかと思って」

するとゼンは、急いで首を振った。

「違うよ、藤井さんは俺がふがないから元気づけてくれただけで父は理との仲を進めるよう助言したと言った。しかし、それはまったくの邪推だ。ゼンは好きだと言っているが、それは人間愛からだと知っている。大人の男性が、自分のような子どもを相手にするわけがないし、そもそもゼンは女性アレルギーだ。」

しかしふがないという自己申告をしたからには、別件でなにか相談があったのかもしれない。

「藤井さん、突拍子もないけど、いいお父さんだよな」

理は、つい思い切り眉間をしかめてしまった。

その顔に、ゼンは吹き出す。

「理ちゃんて、普段は落ち着いてるのに、藤井さんといるときはものすごく遠慮がないじゃない。そのギャップがおもしろいんだよね」
理の顔が熱くなるのを感じていた。

「あの人と暮らしてたら、そうならざるをえません」

「うん。まあ、そうなんだろうけど、いいなあと思って」

意外な言葉に、理は目を上げた。

ゼンは、間違えて電池を飲み込んでしまったときのような顔をした。
た。

なにか、致命的な。

しかし理にはわからなかった。

「ゼンさんのお父様って、どんな方なんですか」

「どんなって、普通だよ。普通の会社員。もうすぐ退職」

「かつこいい方だって、晃さんから聞きました」

「そうかな」

なんだか素っ気ない。ゼンにしては意外だったが、身内についてはそんなものかもしれない。

そのとき、10分間がたった。

2回目、3回目と回を重ねても、アレルギーは起こる気配を見せなかった。
表には

が続く。

「順調ですね」

ゼンがうれしそうに頷いた。

次で8回目。10回全部アレルギーが起こらなければ、後は他の女性で試してみる段階に移るっただほうがよいだろう、と理は話した。
話しながら、少しひっかかりを感じた。

順調であることにつれしそうなゼンの様子だとか。

8回目。同時に手を握る。

こうして触れる、少し熱いゼンの体温を感じることもなくなる。

あと2回で。

「アレルギーが治っていたら、女性とおつきあいされるんですか」
ゼンの手がぶれた。

「離れちゃいますよ」

理は注意する。ゼンは謝罪を繰り返した。少し顔が赤い。何を考
えたんだ、と理は心持ちひややかに思う。

「ゼンさんなら、よりどりみどりでしょうね。うらやましい」

「うらやましい?」

ゼンが声をうわすらせて言った。握った手に力がこもり、ぶんぶ
んと頭を横に降る。

「女性なんて基本魔物じゃない。一見きれいでいいにおいするけど、
頭の中は嫉妬とか競り合いたとかでどろどろだし、そんなにたくさ
ん来られても困るよ。いままでだって、アレルギーのおかげで助か
ってたようなところもあるし」

理は、自分の手が少し力なくなっているのに気付いた。しかし、
ゼンにしっかりと握られているので離れない。

「じゃあなんで、アレルギーを治したいなんて、思ったんですか」

ゼンは黙った。理には聞かなくてもわかる気がした。たぶん、触
りたいと思う誰かが現れたから。晁の友人だという女性かもしれな
い。アレルギーを見せてひかれたことがある、もしくはゼンのアレ
ルギーを恐れるような女性。

ゼンの手に、力がこもる。さつきからずっと、もう、理は手が痛
かった。

目を上げると、ゼンが理をしつかりと見ていた。

その視線に、理は急に恥ずかしくなる。

いまの気持ちこそが、ゼンの嫌う女性のどろどろに他ならない。

いつの間にか、日常の中の非日常として、ゼンに執着していた自
分をはじめて知った。

母を亡くし、初めて会う父と暮らす日々の中で、そんな日常を忘
れさせてくれる空間に属する相手。

(幼稚な執着だ)

理は手を離したいと思う。けれど、まだ3分たっていない。なによりも、大きな手で押さえ込まれていて、自分の手は小さすぎて抜け出せない。

「触りたい人がいるから」

その目がいつしか潤んでいる。泣きそうだ。

(表面張力)

泣かないで、と思った。祈るように、その目を見た。

その目が、だぶる。

母の遺影の前で泣いていた人に。届かない思いを伝えた人に。

「わかります」

だから理は、そう言った。ゼンが目を丸くするのを見た。その顔がおもしろくて、微笑む。

「アレルギーのせいだからって、あきらめるのはいやですもんね。

ゼンさんが後悔しないように、お手伝いできてうれしいです」

言いながら、少し目の奥が痛かった。

(いまごろ気付くなんて)

この暖かいてのひらのひとが好きだと思った。

弱さも、情けなさもすべて、愛おしいと思った。

放っておけないのは、好きだから。

けれど、もう遅い。

ゼンは、ほろりと涙を落とした。

「なんで・・・」

そう呟いたのはゼンだ。理こそ「なぜ」と問いたい。なぜ泣く。理はポケットからハンカチを取り出し、ゼンの涙を拭った。こんなことも、もうできない。それはゼンが触りたい人の役目。

ゼンは、握っていた理の手を離した。

アレルギーではなかった。けれど、顔は赤かった。ガラス玉のような目に、傷がついたように見えた。

「ごめん、俺、もう無理」

それだけ言って、ゼンは外へ走り出してしまった。急いで理は立ち上がり、それを追いかけてよとす。

しかし、玄関の先にでたところで、すでにゼンの姿はなかった。

家を鍵も掛けずに留守にするわけにはいかない。

引き返し、電話を掛けてみるが、居間のテーブルの上に置かれた携帯がふるえるだけだった。

晃に連絡するも、「電波が通じないところにあるか・・・」のアイコンが流れ、つながらなかった。

しかたなくメールを送信するが、電波が通じないのでメールに気付くのもいつになるかわからなかった。

見える範囲で鍵がないか探してみたが、見つからない。

いまは17時。

丁度今は藤井も長い口ケで不在だし、明日は祝日で休みだった。

長期戦の覚悟をして、理はもう一度居間に戻った。ユキが伸びをして、とことこと歩き出した。

「何が無理なの」

アレルギーが出そうだったのか。それともやはり女性が嫌いだと気付いたのか。

(それなら最初から好きな女性と実験すればいい)

しかし、名乗り出たのは自分だったと理は思い出した。

自分ならば、ゼンのアレルギーを見ても引かないし、ショックを受けたりももうしないので適任だと思ったのだ。

(なんだかむなし)

理は、座布団を枕にして横たわった。他人の家で家人の許可無く横になるには勇気が要ったが、緊張していた分疲れたのだろうと思いつつ、眠りに落ちていった。

理、告白する

『好きだよ、理。わたしのお姫様』

母の声。低く柔らかく、心地よい。夏の霧雨のように清涼。

理はその好きという言葉を、当たり前のように受け止めていた。けれど、あんまり言われるものだから、そんなに言ったら気持ちぐさり減らないかと質問したことがある。

すると母は心底おかしそうに笑った。

『減らないよ。むしろ、いとおしさは増すばかりさ』

砂を吐くような甘い言葉を連ねて涼しい顔をしている人だった。

理は、その直裁さに、正直少し辟易していたときもあった。その気持ちを露わにしたこともある。けれども母は意に介さずにごう言うのだ。

『相手にどう思われようといいんだ。好きだって気持ちはそのときに伝えておかないと、もう一生伝えられないことだってあるんだからね』

そう言う母の目がさびしそうだったので、理は黙って母の頭を撫でた。そのときはまだ小学三年生くらいだったろうか。母は頭を撫でられながら再び晴れやかに笑い『だから好きだよ』と言った。

そんな母にも、もう二度と会えない。

(もっと言うっておけばよかった。大好きだって。いつもありがとうって。お母さんがいなくなったら寂しいって)

子どもの理は、夢の中で泣きじゃくっていた。

そしてそれはいま目が覚めても、とうとうと流れて、座布団を濡らしていた。

部屋の中は、すっかり暗い。

いま何時なのか、鼻水をすすりながら携帯を探っていたとき、灯

りが付いた。

濡れ鼠のゼンが、廊下に立っていた。

ひどく驚いた顔をして、それは理の側でもたぶん同じことだっただろう。うつむいて、ごしごしと乱暴に目をこする。

これを言えば、自分もゼンを困らせるあまたの女性の一人になるのかもしれない。

そう思って、この特別な状況を終わらせることを、本当は一番危惧していた。だから動けなかった。年の差だとか、相手の状況が特別すぎることから、無視していた。

でも。

(もう一生)

頭の中でエコーする、記憶。母の声。

涙を拭って、立ち上がり、力なくぶら下がっていたゼンの両手をつかんだ。

「ゼンさんに、他に触りたい人がいるって、知ってます。でもわたしはいま、ゼンさんに触りたい」

ゼンが、目を瞬かせた。

睫から落ちた水滴が理の顔に落ちる。

勢いで、遠回しなことを言った。

理は恥ずかしさに逃げたい気持ちを押し切って、理はゼンの目をまっすぐに見る。

「わたしは、ゼンさんのことが、好きです」

優に一分は、間があっただろう。

ゼンはその間、何度か瞬きをした。

何か言おうとして、そのたびに口をつぐんだ。

しかし、ようやく口を開く。

「人類愛的な、意味で？」

理はかぶりを振った。

人類愛も間違っではない。けれど、もっと狭量で、さらに深い

気持ち。

なんと説明したらいいのか、理は悩んだ。

しかし、次の言葉を見つける前に、理は濡れた布に顔を押しつけられていた。

それがゼンの来ていたTシャツだと気付いたのは数秒後のことだ。冷たい布越しに、熱い体温を感じる。背中に回された腕。柔軟剤のにおいと、少し汗のにおい。

理は、恐る恐る、ゼンの背中に腕を回した。ゼンの背中思ったよりも広く、両指の先がやっと絡むくらいだった。

体から伝わる鼓動。速いテンポの脈動は、理にも伝わって、どんどん心臓が苦しくなる。

強い力で抱きしめられて、息が吸えなかった。

「ゼンさ、くるし・・・」

力が弱まる。顔を出すと、ゼンはぐったりと、目を閉じていた。寄りかかってきた重い体。

「ゼ、ゼンさん・・・?!」

なんとか支えながら、ゼンの額に手を当てると、驚くほど熱い。

(体が熱かったのは、単純に熱のせい)

抱きしめられたのも？

判断がつかなかった。都合のいい方に考えてしまいそうだったから、いざ違ったときのショックが大きくならないよう、自衛本能で考えるのをやめ、とりあえずゼンを居間に寝かせた。

ゼン、反省する

その秋の日曜日、ゼンは40度近い高熱を出した。

その場に居合わせた理が居間に布団を敷き、看病してくれたが、解熱剤でも熱はひかず、朦朧とした状態が続いた。

翌朝、晃が帰ってきて理と交代し、ゼンを背負って休日診療所に連れて行った。

インフルエンザであった。

「新型ですって。流行の最先端ね」

マスクをして晃はゼンの頭を冷やしていた手ぬぐいを取り替えた。喉が痛くて、声も出ない。

だが、さすがに医者のお薬だけあって徐々に症状は改善されつつあった。

3日目には熱が下がったが、数日は保菌しているとのことで、医者のおサインが出るまでは外出禁止だった。

意識が戻ってきたときに、速効で理にメールをしたが、返事はなかった。

「遊びに出かけて、携帯の電池切れちゃったけどまあいいや」と思って朝に帰ってきたら理ちゃんがいるでしょ？　そんであなたは赤い顔して寝てるし。何があつたのかと思つたわよ」

理が遊びに来ることは伝えていたが、まさか朝までいるとは思わなかった晃は、大変に驚いたらしいが、見るからに明らかなその状況を察し、理には深くお礼を伝えた。

「寝てなかったみたいで、ちよつとふらついてたわ。送っていいこうかと思つたけど、ゼンについてあげてほしいって。まだ熱が高いからって。ほんっといい子よね」

ゼンは深く反省した。

自分のアレルギーが治ったかどうか実験につきあってくれた優しさだけでもおつりが来るといふのに。

(だっていくら俺が好きだって言っても、信じてくれないし。しいには俺に誰か他に好きな人がいるとか言い出すし)

どうしてそうなるのだ!と思ひ、しかしうまく伝えられず、家を飛び出してしまったのだ。

晃などに話したら心の底から馬鹿にされそうである。あまりに幼稚すぎる。

雨の中あてもなくさまよい続けて、一時間くらいたった所で猛烈な寒気に身動きもつらくなり、なんとか家まで帰るも記憶は朦朧。

混濁した記憶に残るのは、目の潤んだ理と、自分の手を握って言われた言葉。

(好きって、好きって言った、よね?)

ゼンのことを。

息の根を止められたかと思った。

しかしさんざん翻弄されていたのも事実だったのでつい人類愛としてなのかどうか確認してしまったところ、黙ってしまったのであももういいやと思つて理性のたがはずれ抱きついてしまったのだが、そのまま意識が遠のいたという。

(なんか夏にも同じようなことがあったような)

理の前では、情けないところを見せてばかりである。

そんな、自分を。

好きだと。

(ほんとに?)

信じられない。高熱の作り出した妄想なのではないか。

なぜならメールの返信がない。

考えて、一気に落ち込む。

やきもきするが、しばらくは外に出かけて確かめることもできない。

布団の中できろくろ転がって煩悶しながら、ゼンはインフルエン

ザそのものよりもつらい日々を過ごした。

天気は快晴。

ゼンはようやく仕事に復帰した。

もう10月も下旬に入り、残暑もひいて正真正銘の秋である。

しかし晴れやかな天候とは裏腹に、ゼンの心は湿っていた。

返事が来ないのである。

あの雨の日曜日から二週間弱。熱が下がるなりすぐに出した謝罪のメールに返事がないのである。

(忙しいのかも知れない)

前後の経緯が経緯だけに気になるし、すぐにでも会ってあれが高熱の見せた幻ではなかったことを確かめたかった。

そんなことを考えながらぼんやりしていると、見たことのある顔が、店に入ってきた。

「先日は、藤井が大変失礼しました」

挨拶代わりにそう言って、糸田はアイスコーヒーを頼んだ。メガネをかけた女性連れである。女性にしてはすらりと背が高く、スタイルもよかった。女性もアイスコーヒーを頼んだ。会計は別だった。待っている間、糸田は女性に耳打ちをした。すると、女性はゼンを見て、微笑んだ。

注文品を手渡したとき、女性は口を開いた。

「いつも理がお世話になってます。理の叔母です」

「あ、えっ、どうも、こちらこそお世話になってます」

ゼンは、つい営業用の姿勢がはがれ、素でお辞儀をする。まったく、お世話になりっぱなしもいいところだ、と心の中で自分を責めた。

二人はゼンに会釈をして、注文品を運んでいった。奥の席に行く。いつも理が座っている席だ。

(理ちゃん、どうしてるのかな)

考えてみなくとも、あの日の自分の行動は奇行である。

お客様を放り出して、いきなり雨の中に走り出していたり、帰ってきたかと思いきやびしょ濡れで抱きついたり。そして熱を出して倒れてみたり。いくら理の心が広くとも、限度があるだろう。

考えるだに、背筋が寒くなってきた。

(あの、好き、とか聞こえたような気がしたのは本当に気の迷いで、もしも本当だったとしても、あれでもう付き合ってもらえないと思われたりだとか、そもそも本当に高熱による幻聴だったり。そういえば忘れてたけどあの祭りで会った親しげな男の子とか)

ぐるぐる頭の中が渦を巻く。

メールも返事が無い。

「ごちそうさま」

告げて、二人分の食器を理の叔母が置いた。

「あ、あのっ」

帰ろうとする二人を呼び止める。

「理ちゃん、元気ですか」

変な問いかけだと思う。自分で連絡を取れと思うだろう。それも、もう何か知っているかも知れない。理の側の気持ち。

理の叔母は、眉を下げて笑った。

「インフルエンザでね、しばらく寝込んでたけど、いまは熱も下がったわ。でも明後日くらいまでは外出禁止らしいので、家にいるわ。いまから様子見に行くんだけど」

ゼンは、目眩を感じた。

迷惑もど迷惑だ。よりによってインフルエンザを移してしまうなんて。

胸が痛む。眼が潤む。

ゼンは、力なく手を上げた。

「それ、俺のせいです」

「「は?」「」

二人そろって問い返す。

「お見舞いにいっても、いいですか」

すでにインフルエンザにかかって免疫もあるので、外出禁止の間と会っても問題ないだろうと話した。

「俺の看病をしてくれたから、理ちゃんに移ってしまったと思います・・・」

「すみません、と消え入りそうな声で告げた。」

ゼン、お見舞いに行く

理の保護者側である二人は、インフルエンザをうつしてしまったゼンに怒ることもなく、理の自宅の住所を教えてくれた。

店のすぐ近くだった。

2人が去ってしばらくしてから、予定していた1時間の休憩時間が訪れたので、晁に話をして出かける。

何を持って行ったらいいのかと悩んだ末に、近所の花屋で小さな花束を買い、コンビニで果物のゼリーを買った。

来訪の旨は、理の叔母 珠子が先に伝えてくれるとの事だった。自分でもメールをしておこうと思ったが、返事のないことが怖くてメールできなかつた。

(それなのに行くなんて、もし嫌われてたら大迷惑、だよね)
どんどん考えが後ろ向きになる。

でも、理はそんな子ではないと思っている。迷惑なら迷惑とはつきり言うだろうし、嫌いだからってメールを返さないことは無い、と思いたい。
信じたい。

悩んでいる間に理の住むマンションに着いた。

5階建てのこじんまりとした建物は、白い外壁に黒い窓枠の小さな窓の、欧州のどこかの都市にありそうな建物だった。理が住むのは4階。エレベーターで上がるのとともに、心拍数も上がっていく。インターホンを押すと、しばらくしてドアが開いた。

「そうだったわね」

珠子がゼンを見て、そう言うてから微笑んだ。

ゼンは首を傾げつつも、どうぞ、と言われるがままに靴を脱ぎ、

廊下を歩く。

中は思ったより広い。右手に2部屋。左手に1部屋と洗面所。奥に、10畳ほどのダイニングキッチン。その奥のソファに、頭から毛布を被ってテレビに見入っているのは理。

テレビで流れているのは、外国の映画のようだ。

「理、お見舞いよ」

「え？」

顔を画面から離し、珠子とゼンの姿を見止めた理の顔が一気に赤くなった。

「ぜ、ぜんさん・・・?!」

「ごめんね。移しちゃったみたいで」

これ、お見舞いです。と言いながらお花とゼリーをテーブルに置く。

珠子に促されるまま、理の向かいのソファに座る。

理はしばらく固まっていたが、毛布を被ったまま走り去ってしまった。

「あれ？」

「ごめんね、さっきまで寝てたものだから、あなたが来ること伝えてなかったのよ」

ふふ、と珠子は笑った。

いつもしっかりしている理にしては、いくら病気だからといって無防備すぎると思ったのだ。毛布を頭からかぶっていたのでよくわからないが、パジャマ姿だったようだ。藍色の細かいストライプの入った上下。

ゼンにお茶を出すと、珠子は予定があるからと上着を着込んだ。

「ごゆっくり」

微笑んで、珠子は玄関へ向かう。玄関の横にある理の部屋に何か声をかけ、玄関の扉が閉まった。

(ええ、と・・・)

意図せずして二人きりになってしまった。とお茶を飲んだ瞬間に

ドアがパタンと開き、ゼンはどきりとした。

黒いパーカーと細身のジーンズに着替えた、いつもの整った様子の理が現れた。

「お見苦しいところをお見せしました・・・」

俯いて、ゼンの正面のソファに座った。ゼンは首を振る。

「ううん。急に来た俺が悪いんだし、そもそも俺がうつしたせいだし」

その節は本当にごめんなさいとうなだれた。

気にしないでください、と言うも、理も基本うつむいている。

二人とも顔を伏せたまま、テレビではゾンビと人間の死闘が繰り広げられていた。

「あの」

声が重なった。二人は顔を見合わせ、苦笑する。

理が、立ち上がった。

「お茶、注ぎましょうか」

「いいよ、病気の人にそんなことさせられない」

手を伸ばし、ゼンは理の腕を掴んだ。

どつと、耳まで心臓の音が届いた。

ゼンは、理の手を引いて、自分の隣に座らせた。そのまま、手を握りなおす。

「9回目」

手を握ってしまったことをごまかすように、ゼンは理を覗き込んだ。理は眼を伏せ、頷く。

ゼンは時計を見る。

「いまから俺の話すことが、気持ち悪くなったら、手を離していいんだけど」

そう呟く。理は、伏せていた目を上げた。心配そうに、ゼンを見た。

その目線だけで、胸が痛い。

「俺、たぶん子供の頃に、自分の叔母と寝た、ことがあったみたい、

なんだ」

理の手は、動かない。

ゼンは理を見ない。

「忘れてたことって、そのことに関わることで、ほんの子供のころだから、ちゃんとしたさういう、ことになってたかはわからないんだけど」

しかし幼児にも精通に似た現象がある、ということは思い出してから調べた。子供を作る役割としては果たしていないだろうし、おそらくいじくられた程度のものだっただろうけれど。

「たぶん、叔母は父と関係があつたんだと思う。母はそれで苦勞して、薬に溺れて死んでしまった。叔母は、たぶんそれを最初に見つけたんだ。そのとき、俺は母の傍にいて、叔母は混乱して、たぶん・
・・」

のろいだと、彼女は言った。

このままだと父のように女を狂わすかもしれないと思いこんだ叔母は、混乱した意識の中で、ゼンを一方的に罰した。そしてのろいをかけたのだらう。

本当にきくはずは無かつた。けれど、暗示のようにそののろいはゼンの体に染み渡り、それからゼンを支配し続けた。

3分たつた。

ゼンは手を離す。

次の10分が、長い。

と思つた瞬間、理はゼンの手を両手で握つた。

驚いて、理を見ると、強い眼でゼンを見据えていた。こころなしか潤んで蛍光灯の光を跳ね返す。

(熱の、)

いや熱は、さがつたはずだと、聞いていた。手も冷たい。

「ゼンさんの、せいじゃありません」

握つた手に力がこもる。

「なにもかも、ゼンさんは悪くない」

ゼンは、胸の底から湧き上がる、なにか強い感情に揺り動かされた。それをどうしていいかわからず、気付けば目から涙が、こぼれていた。

理の姿が、涙で歪んでしまふ。

「わたしは、ゼンさんが、好きです」

人類愛だけじゃなくて、と理は付け加えた。

ゼンは、泣きながら笑った。

「俺も、好き」

呟くと、ほろほろと雨のように雫が落ちた。

ゼンは、ゆっくりと理の体に腕をまわした。

脆い細工の工芸品に触れるように、そっと抱きしめる

3度目の抱擁。

今度は、何の邪魔も入らない。

ゼンは腕の中の温もりに、静かに泣き続けた。

その間、背中を撫で続けたのはやさしいのひら。

青い絵具を水に溶かしたような空に、雲が一刷き。

唇からは、蒸気のような白い息。頬を刺す冷気。

枯葉が足元に溜まり、渦を巻いて風のままに流れていく。

「晴れてよかったですね」

風にゆれるマフラーを後ろに押しやりながら、理は口を開いた。

その様子を横目で見ながら、ゼンは微笑んだ。

「本当にね」

「まあ、室内なんで、天気は関係ないですけど」

2人は藤井の主演映画を見にでかけた。

単館上映なので、渋谷のはずれにある小さな映画館まで足を運ぶことになった。

映画の時間まで少し間があったので、周辺を散歩することにした。二人は街路樹の枯葉を掻き分ける。近くにキリスト教系の大学があつて、教会らしき建物の尖った屋根が見えた。

休憩時間にお見舞いに行つて、10分オーバーで泣きはらした顔で帰ってきたゼンに、晃はただ顔を洗えといったのみだった。

それから、ゼンはすぐに理に連絡したかったが、何を連絡していかかわからず、いつの間にか時間が経っていた。

それでいて会えないでいると、あのことが夢だったのではないかとゼンは性懲りもなく思い始めていた。

大泣きしてから三日目の夜、ゼンはもんもんと考え抜いた挙句、

電話してしまった。

「俺、理ちゃんのことを好き」

開口一番そう言うと、電話の向こうで理は、しばし沈黙した。

『それは、この前聞きましたけど。それに、わたしも、好き、です』
たどたどしい日本語。動揺しているのか、とゼンは想像した。

「あの、祭りのときに会った男の子は？」

『祭り？ 陸くんですか？ あの子はまだ小学生ですよ』

ずいぶん背の高い子だなとゼンは驚いた。

「でも、年の差なんてさ」

自分と理だつて、10年も離れている。そのことを思い出しなが
ら呟いて、黙る。

理は、電話の向こう側で深々とため息をついた。

『さっき言ったこと、忘れたんですか』

「さつき？」

『ゼンさんのこと、好きです』

ゼンは、心の中に花が咲いたように思った。

『でも、そういううじうじしたところは好きじゃありません』

咲いた花も一気にしおれるようだ。

泣きそうになって、しかしこれこそがうじうじしたところなのだ
と自覚して、ゼンはぐつと涙をこらえた。

「じゃあさ、理ちゃんは俺のどこが好きなの」

『少なくとも、そういう女々しいところは好きじゃないですね』

「女々しい？どこが？」

『どこが好きだとか聞くのは、相手の気持ちを信じていないみたい
に思えます』

今度はゼンが、ため息をついた。

「理屈っぽいなあ」

『嫌いですか？』

ゼンは、言葉に詰まる。

元々、口論は苦手だった。

「ずるいよ、それを言うのは」
「かるうじてそれだけ言う。」

理は、少し黙った。

『ごめんなさい。言い過ぎました』

少し深呼吸したような、呼吸音が聞こえてから、理は言葉をつないだ。

『一言で言えば、可愛いところですね』

ゼンは一瞬、息が止まった気がした。

「かわいい?!」

『放っておけないかんじがして』

「俺、そんなにあぶなっかしいかな」

『最初はしっかりしている人だとおもったんですけど、それも営業用なんだなってわかったので。でも、そういう仕事とプライベートが別れているところは、好きです。プロってかんじがして』

「そうかな」

へへ、と笑いつつ、少し照れる。

理も少し笑った。

「俺も言ったほうがいい? 理ちゃんのどこが好きかとか」

『いえ、いいです』

「なんで?聞きたくない?」

『そんなことを聞いたら、恥ずかしくて今度会うとき緊張してしまうので』

ゼンは笑みを漏らした。

「理ちゃんのほうが、よっぽどかわいいと思うけどな」

電話だと少し恥ずかしいことでもさらりといえるなあとゼンは思った。

理は、電話口で少し黙った。

『そういうところ、腹が立ちます』

「照れてるの?」

『照れるって言うか、恥ずかしいじゃないですか。ゼンさんって、

ラテン系なんですか？』

「え？ ガテン系？」

理は、深々と嘆息した。

『もう、いいです』

「なにが？」

『どこが好きとか、そういうのは、おいおい教えてくれれば』

ゼンはどこがどんな風に好きか、言いたくて仕方が無かったが、ユキのときのように、しかも今度は本人に辟易されては困るので、理に従った。

「今度、いつお店にくる？」

『明後日から藤井さんがまた遠出するので、早くて明後日ですかね』

「早く会いたいなあ」

『3日も連絡よこさなかった人が何を言ってるんですか』

理は呆れた風だ。ゼンは慌てた。

「だって、恥ずかしくてさ」

『それこそいまさらです』

たしかに、理にはアレルギーから嘔吐からインフルエンザから号泣から情けないところを散々みられている。

（本当に、どこで好きになってももらえただろう・・・）

いささか不安になったが、もういまは尋けない。

『いまさらわたし相手に取り繕っても仕方ないですよ、ゼンさん。』

ユキちゃんのことでも、なんでもいいから、気にせず連絡してください。電話でも、メールでも』

「理ちゃんも、連絡してよ」

そういえば、理からはあまりメールも電話もなかったことをゼンはいまさらながら思い出した。いままで友達、とも言い切れない微妙な間柄だったからでもあるが。

（なんか俺が一方的に押し続けていたような気がする）

押しはしたものの、のれんに腕押しの方が長く続いたため、それが普通の状態になってしまっていたし、自分でも自覚なしに、自

覚してからもほんとうにこれが恋なのかわからないまま、半信半疑で押していたような状況ではあったが。

『連絡、よりも、会いたいです、じかに』

耳元で、少しかすれた声が響いて、ゼンの頭に血が上った。

「だ、だからお店に」

『二人で』

心臓が、壊れそうだった。全身で鼓動をうっているような心持ちだった。

『だって、実験がまだ途中でしよう？』

先日は、9回目の途中で抱擁に変わったのだと思い出した。あの抱擁で10回目だと、ゼンは勝手に思っていた。

「ほんとに理ちゃんって、俺の気持ちをもてあそぶよね・・・」

『何言ってるんですか。人聞きの悪い』

理はふふと笑った。そして、一拍置いて言う。

『デートしませんか』

映画の券が手元にあるのだという。

『藤井さんの主演映画ってところが難有いですけど』

「晃が前売り券買ってたよ」

『いつもありがとございます』

脇役悪役専門の藤井の初主演映画と言うことで、藤井ファンのみならず、サブカルチャー誌なども注目し、数冊は藤井特集やインタビューを載せていた。

それらの記事を思い出しながら、ゼンは理と細かい日取りを決めていった。

それで、デートである。

理のテスト期間を挟んでいたのので、実際は話をしてから半月ほど経過していた。

ゼンは晃にデートとはどんな服を着ていくものなのか、何を
ものなのか聞いたが、鬱陶しそうに「好きなようにしたらいいじや
ない」と答えられただけだった。

「いままでさんざんいろんな情けないところ見せてるんだから、い
まさら取り繕ったってしょうがないわよ」と。

虫の居所が悪かったのかも知れないが、ゼンは悄然とした。

しかし、結局晃はぶつくさいいつつも、手持ちの服から見立てて
くれた。

長袖シャツに襟付きのニットカーディガン、下はジーンズといっ
た普段着だが、あんまり気張らないほうがいいというのが晃の主張
だ。ゼンも異論はなかった。いつもと違う格好をすると、ただでさ
えデートというはじめての事態に緊張しているのに、緊張が2倍に
なりそうだったからだ。

駅前に現れた理も、いつもどおり薄手の群青のコートに、チエッ
クのマフラーだった。

(ユキをつれてきたときに、着てたコートだ)

あのときから、半年くらいたった。

まさかこうして一緒に歩いているなんて、デートをするようにな
るなんて、あのときは思いもしなかった。

「わたし、藤井さんの出ている映画って、そういえば見たこと無い
んですよね」

理が前を見据えて言った。片側4車線の大きな通りはカーブして
先が見えない。

「一緒に住んでるの？」

「一緒に住んでるから、ですよ。見てるところを見られたらお互い
に気まずいだろうし。まあ、向こうは気にしないかもしれないけど、
結構テレビドラマにも出てるみたいなんで、どこかで見たこと
があったかもしれないけど、たいてい脇役とかだっというので覚え
てなさそうだし」

理は相変わらず藤井に対して冷たい。

しかし、なんだかんだで仲良く暮らしていることはなんとなくゼンにもわかる。

だから微笑んでゼンは言った。

「演技のことは、よくわからないけど、俺は好きだな。どんなに酷い人の役でも、どっか茶目っ気があるというか、憎めないんだ」

それは、藤井自身にも通じることかもしれない。乱暴そうに見えても、実際乱暴をされても、芯が優しいので憎めない。そう言う理由は「誰も彼も甘やかしすぎなんですよ」と辛らつに言った。ゼンは苦笑した。

大通りを逸れ、裏道に入る。教会のあった大学の裏を通る。住宅街と、高級そうな服や雑貨の店が点在する。

理は、ゼンの手をそつと握った。

ゼンは、握り返す。

アレルギーは、起きない。

けれど、いつも起こらないというわけではない。

今日のデートの前にも何度か理は店に現れ、結局そのたびに少し手に触れたが、まだときどき、なんの弾みかわからないがアレルギーが起こるときがあった。そういうときには、晃には悪いが交代してもらおう。

理は、ゼンを心配して事務室兼休憩室に付き添う。けれど会うたびに触るのは止めないでくれとゼンから頼んでいた。少しでも慣れたいからと。晃にも、そのために仕事が中断される恐れがあることは相談済みだった。

理以外の人とさらに発症の確率は高まる。

けれど、何度か繰り返すうちに、症状自体も少し緩和されつつあった。痒みも抑えられるほどだし、湿疹も出ないときがある。

呼吸は少し苦しいが、以前のようにしゃがみこむほどではない。

(少しづつ)

大学の周りを回り、映画館へ向かう。映画開始の15分前。丁度

いい時間だった。

すでに引き換えておいた整理番号順に入る。中では自由席なので、1番後ろの中央に座る。

席はちらほら空いているくらいで、日曜日であることもあってか、なかなかの客入りだった。

照明が、次第に暗くなる。

今度はゼンから、理の手を握る。

理はちらりと横目でゼンを見て、笑う。

触れるのが、もう何度目だか数えていなかった。

数えなくても、いつでも触れる。

(ちよつとづつ)

かたかたと映写機の回る音が聞こえる。

目の前のスクリーンに、白く光る画面が映った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7209s/>

Good day , today

2011年5月15日11時55分発行